

聖園学園短期大学

研究紀要

第 55 号

目 次

東北地方の学生の結婚観、子育て観に関する意識調査結果の考察

— 秋田県の次世代育成のための提言に向けて — 白 山 雅 彦 … 1
大 瀧 和 峰

聖園学園短期大学

2 0 2 5 年 3 月

編 集 委 員

白 山	雅 彦
内 藤	裕 子
東海林	美代子
加 藤	順 子
金 澤	久美子
大 原	かおり
土 居	有 紀
佐 藤	聡 美

東北地方の学生の結婚観、子育て観に関する意識調査結果の考察

— 秋田県の次世代育成のための提言に向けて —

聖園学園短期大学 教 授 白 山 雅 彦

聖園学園短期大学 教務課長 大 淵 和 峰

A Study of the Survey on Marriage and Child-rearing, Conducted for
the Students in the Tohoku Region, Japan
-For the Proposals Aimed to Nurture Coming Generations in Akita Prefecture-

SHIRAYAMA Masahiko

Professor, Misono Gakuen Junior College

OHBUCHI Kazutaka

Director of Educational Affairs, Misono Gakuen Junior College

要 約

本研究は、東北地方の大学・短大の学生の「結婚観、子ども観、子育て観」に関する意識調査結果から学生の意識について考察することを目的とし、その中の特に秋田県の学生意識をもとに、秋田県に対して次世代育成の観点から提言に結びつけることにした。

調査結果から“結婚観”は、(1)8割以上の学生に結婚願望がある。特に、教育系と保育系の学生がそれぞれ81.0%、91.3%と結婚志向が高い。(2)結婚希望年齢は25歳が全区分で最も高い割合で、保育系は卒業後から29歳までに96.7%、教育系は卒業後から29歳までに93.3%が結婚を希望している。“子ども観”は、(1)「将来子どもを持ちたい」学生は6割以上、特に保育系は88.3%と高い割合だった。(2)「子どもを持ちたくない」学生の割合平均は26.5%、保育系は11.7%と最も低かった。(3)子どもを持つ希望数は、「2人」が64.0%～71.4%で最も高く、次いで「3人」は14.3%～27.5%だった。“子育て観”は、(1)子どもを持ちたいと考えている多くの学生は、子育ての大変さを覚悟しながら夫婦の理想とする親子像や家庭像を描き、自分の子どもをしっかりと育てたいと考えている。(2)保育系や教育系の学生は、子育てにおいても前向きな考えを持っているが、その理由は、子どもと関わる機会が多く、子どもの特性について日々学びを積み重ねている経験があるからである。(3)子どもを育てる場所は、「自分が生まれ育ったところ」と「地方の都市部」という自分の生まれ故郷で育てたいと希望している学生が約7割を占めている。

しかし、国の各種統計は晩婚化や未婚化、少子化、地方から若者が県外流出している実態を示しており、本調査による学生意識と大きく乖離している。これからの少子化対策は、子育て世代への支援に加え、本調査結果を踏まえて多くの若者の結婚観等を刺激するために、小中高生が乳幼児と継続して関わる体験機会を設定する必要がある。特に、少子化日本一の秋田県は、次世代育成に最も力を入れなければならない状況であるため提言案をまとめた。

キーワード：結婚観、子ども観、子育て観、次世代育成、乳幼児とふれあう体験

Key words : view on marriage, view on child-rearing, nurturing coming generations, experiences of coming in contact with infants and children

目 次

序 章

- 1 少子化が進行する秋田県
- 2 学生意識調査実施のきっかけ
- 3 我が国における少子化対策

第1章 研究の目的

第2章 研究の方法

- 1 意識調査の対象及び調査方法
- 2 意識調査の質問項目について

第3章 調査結果と考察

- 1 基本属性
- 2 将来就きたい職業について
- 3 結婚観について
- 4 子ども観について
- 5 子育て観について
- 6 子どもの存在について
- 7 これまでの子どもとの関わり等について

第4章 秋田県の人口の推移と将来の見通し

- 1 最近の人口及び将来推計人口の推移
- 2 秋田県の年齢3区分別人口割合の推移
- 3 秋田県の出生数・婚姻件数
- 4 出会いと結婚、子育てへの支援について

第5章 行政等関係機関への提案

- 1 提案1
- 2 提案2

終 章

序 章

1 少子化が進行する秋田県

今や日本一の少子化県となって久しい秋田県は、これまで行政を中心に様々な少子化対策の手立てを講じているようだが、少子高齢化が進み人口減少は進行する一方である。

毎日接している夢多き学生たちの未来や、子や孫世代の将来を考えると、このままでは秋田県は大変なことになる、何とかしなければならないのではと考えているのは筆者だけではないと思われる。

秋田県の保育者養成に関わる大学として、少子化を改善するための様々なアイディアを県や市町村など自治体や議会に対して、積極的に提言する必要があるのではないかと考えるようになった。

2 学生意識調査実施のきっかけ

2023（令和5）年の8月末に、聖園学園短期大学（以

下「本学」と言う。また、短期大学を「短大」と言う。）の学生たちから次のような話を聞いた。「夏休み中に、4年制大学（以下「4大」と言う。）に進学した仲間と将来のことについて語り合ったら、『結婚なんて考えられない。子どもを持つなど考えたこともない。夜泣きにどう対応したらいいか分からないし、オムツの交換もできる気がしない。どうやって子どもと遊んだらいいかも分からない。』といった、結婚や出産、子育てに対してネガティブな声ばかりで驚いた。」ということだった。本学の学生たちは、入学後から乳幼児についての専門的な知識や技能を理論的に学んだり、2年間で5回の幼稚園や保育所、認定こども園、児童養護施設等での現場実習で体験的に学んだりすることから、結婚や出産、子育てを身近なものとして捉えており、同世代の仲間の考え方の違いにショックを受けたようであった。学生曰く、「自分たちの世代がこうした考えを持っているとしたら、秋田県だけでなく、日本の少子化は改善できないと思う。」と将来の秋田県だけでなく日本社会への危機感を語っていた。

少子化が進む現代に生きる若者は、兄弟姉妹などを含め乳幼児と接する機会がほとんどないまま進学し、就職して20代を迎える。こうした若者は、子どもと関わる経験もなく育つため、子育てに対するイメージが持てず、「結婚しても子育てできるか」といった漠然とした不安や自信のなさを抱いてしまい、結婚そのものに対するイメージが持てないといった傾向にあることも各種の報告や統計資料で報告されている。もちろんそれ以外の要因として、「経済的に難しい」「一人が楽である」などの多様な理由から結婚しないと考える若者も多いことが、日本の未婚化や晩婚化の進行に影響しているという報告もある。（国立青少年教育振興機構、2016⁽¹⁾；内閣府男女共同参画局、2022⁽²⁾；国立社会保障・人口問題研究所、2023⁽³⁾；子ども家庭庁、2024⁽⁴⁾）。

3 我が国における少子化対策

我が国では、都市化や核家族化、少子高齢化やグローバル化、価値観の多様化やIT化といった様々な社会変化を背景に、徐々に子育て世代の育児不安や子どもへの虐待などが増加してきており、子どもを守り育てる家庭や地域の教育力の低下も含めて社会的課題となってきた。加えて、上記のように日本の若者の結婚に対する考え方の変化による未婚化や晩婚化の進行についても社会問題視されるようになってきている。

国は少子化対策としてこれまで様々なプランや法律を打ち出してきた。1994年「今後の子育て支援のための施策の基本的方向（エンゼルプラン）について」⁽⁵⁾、1999年「少子化対策推進基本方針」⁽⁶⁾に基づいて「重点的に推進すべき少子化対策の具体的実施計画について（新エンゼルプラン）」⁽⁷⁾を策定した。しかし、出生率の低下に歯止めがか

からなかったことから、2003年には「次世代育成支援対策推進法」⁽⁸⁾及び「少子化社会対策基本法」⁽⁹⁾を制定。この基本法に基づき2004年6月に「少子化社会対策大綱」⁽¹⁰⁾を策定、さらにこの大綱に基づいて同年12月に「少子化社会対策大綱に基づく重点施策の具体的実施計画について（子ども・子育て応援プラン）」⁽¹¹⁾を策定した。そして、2006年には「新しい少子化対策について」⁽¹²⁾、直近では2015年「子ども・子育て支援新制度」⁽¹³⁾を策定するなど次々に手を打ってきた。

竹原ら⁽¹⁾は、これらの施策により、「育児休業制度や保育サービスの拡充、児童手当の増額など、労働環境の改善や子育て支援を中心とした様々な対策や法整備が進められてきた。しかし、その後も未婚化や晩婚化にはほとんど歯止めがかかっていない（国立社会保障・人口問題研究所、2006b）」と報告している。

一方、「次世代育成支援対策推進法」において、国を挙げて推進する重点施策のひとつとして「地域における子育て支援」が掲げられ、全ての地方自治体が具体的な取組を実行することが要請された。この法律は、2024年5月に「育児・介護休業法及び次世代育成支援対策推進法」（次世代法）⁽¹⁴⁾として改正され、柔軟な働き方を実現することが事業主の義務となったり、残業免除の対象を拡大したり、子の看護休暇の見直しをするなど、子育て世帯にとって活用しやすい内容に改善された。

このように国はもとより地方自治体もこれまで幾多の施策を講じてきたし、今後も講じていかなければならない。これからは、こうした「結婚しようと思う適齢期」にある若者や結婚している若い夫婦、子育て中の世帯向けの施策だけではなく、もう少し若い世代、つまり中学生や高校生に対しても結婚観や子ども観、子育て観に関する意識を醸成するような手立てを講じる施策も必要ではないかと考える。

第1章 研究の目的

本研究は、本学が所在する秋田県と宮城県、福島県に立地している4大3校と短大3校の学生を対象に、主に東北地方の学生の結婚観、子ども観、子育て観に関する意識について調査し、考察することを目的とした。それを踏まえて、特に秋田県の学生の意識をもとに、秋田県に対して次世代育成のための提言に結びつけることにした。

第2章 研究の方法

1 意識調査の対象及び調査方法

意識調査の対象は、『4大と短大』、『教育・保育系学部・学科とその他の学部・学科』を比較することを目的として、表1の3大学3短大の学部・学科を選定した。

調査方法は、2023年11月～2024年1月にかけて、当職と繋がりのある教職員を通じて、対象とした大学・短大の学部・学科の学生に『「結婚観」「子ども観」「子育て観」などに関する調査のお願い』を書面で配布してもらった。この書面には、調査の趣旨及び回答者個人が特定されるような公表はしないこと、研究目的以外には使用しないこと、答えにくい質問には回答しなくてもかまわないことなどを明記し、QRコードを読み取る形でアンケートページにアクセスし回答してもらうwebアンケート形式で実施した（本学の1・2年生合計198人の学生には、調査の事前チェックを兼ねて12月中旬にアンケート用紙を配布して回答を依頼し、回答率は83.8%だった）。回答学生数は合計602人だった。

調査結果の取りまとめにあたり、表1のとおり、全体の回答者数は602人だった。それを、大学別区分と専門別区分に分割し、大学別区分は、「4大」3校193人、「短大」3校409人。専門別区分は、「教育系」74人、「保育系」334人、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」82人、

（表1）意識調査の対象

	所在地	大学名	学部・学科	専門別・大学別区分		調査回答数
1	秋田県	秋田大学	教育文化学部	教育	4大	66
2	秋田県	秋田県立大学	生物資源科学部	その他Ⅱ	4大	79
			システム科学技術学部	その他Ⅱ		33
3	宮城県	東北福祉大学	教育学部教育学科	教育	4大	8
			総合福祉学部社会福祉学科	その他Ⅰ		7
4	宮城県	仙台青葉学院短期大学	子ども学科	保育	短大	153
5	福島県	桜の聖母短期大学	生活科学科福祉子ども専攻	保育	短大	15
			生活科学科食物栄養専攻	その他Ⅰ		18
			キャリア教養学科	その他Ⅰ		57
6	秋田県	聖園学園短期大学	保育科	保育	短大	166
合計						602

「その他Ⅱ（生物・システム系）」112人にそれぞれ区分けした。

2 意識調査の質問項目について

意識調査の質問項目は、次のとおり7つの項目21の質問を設定した。

【1 基本属性】

1 所属学部・学科、2 年齢、3 性別、4 未婚・既婚状況、5 出身地域、6 兄弟姉妹の人数

【2 将来就きたい職業について】

7 子どもに関係する職業かどうか

【3 結婚観について】

8 結婚についての考え方、9 結婚希望年齢、10 結婚したと思った理由、11 結婚を考えていない理由

【4 子ども観について】

12 将来子どもを持ちたいか、13 子どもを持つとしたら何人を希望するか、13-2 子どもを持つタイミングはいつか、14 子どもを持ちたくない理由

【5 子育て観について】

15 子どもを育てることについてどう思うか、15-2 子育てのどのようなことに不安を感じるか、16 子どもを育てるとしたらどのような地域で子育てしたいか、16-2 その理由

【6 子どもの存在について】

17 親になったときに子どもはどのような存在か

【7 これまでの子どもとの関わり等について】

18 高校以降の人生でどの程度の頻度で子どもと関わってきたか、19 主にどの年代の子どもと関わってきたか、19-2 主にどのような場所で関わってきたか、19-3 子どもと関わってどのような気持ちになったか、20 子どもと関わった経験が将来の結婚や出産、子育てに影響すると思うか、21 将来、自分の子育てのために保育や幼児教育を学ぶ機会があれば学んでみたいか

なお、意識調査の質問事項については、主に国立青少年教育振興機構が平成20年度に実施した「これから親となる若者の就労観、結婚観、子育て観に関する調査」⁽¹⁵⁾と平成27年度に実施した「若者の結婚観・子育て観等に関する調査〔結果の概要〕」⁽¹⁶⁾及び井梅の論文⁽¹⁷⁾を参考にした。

第3章 調査結果と考察

1 基本属性

質問1) 回答者の所属学部・学科（表1）

回答者の所属する大学及び学部・学科を質問した。

質問2) 回答者の年齢（図1）

回答者の年齢について質問した。

大学別区分を見ると、「4大」は『10歳代』が39.9%、『20歳代』が60.1%、「短大」は『10歳代』が60.4%、『20歳代』が38.6%であり、割合が正反対であった。

専門別区分では、「教育系」だけが『10歳代』25.7%、『20歳代』74.3%と開きが大きかったが、その他の3区分は『10歳代』が51.8%～59.8%、『20歳代』が39.0%～48.2%で『10歳代』の割合が上回っていた。

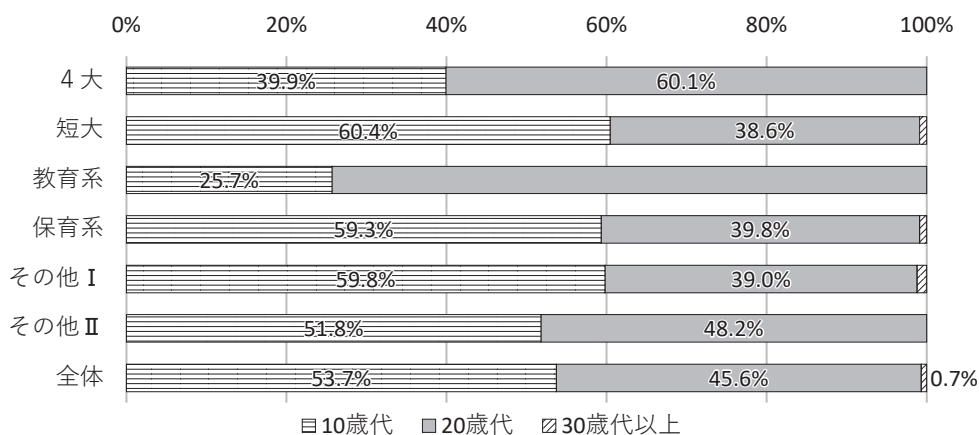
全体としては『10歳代』が53.7%、『20歳代』は45.6%、『30歳代以上』は0.7%であった。

質問3) 回答者の性別（図2）

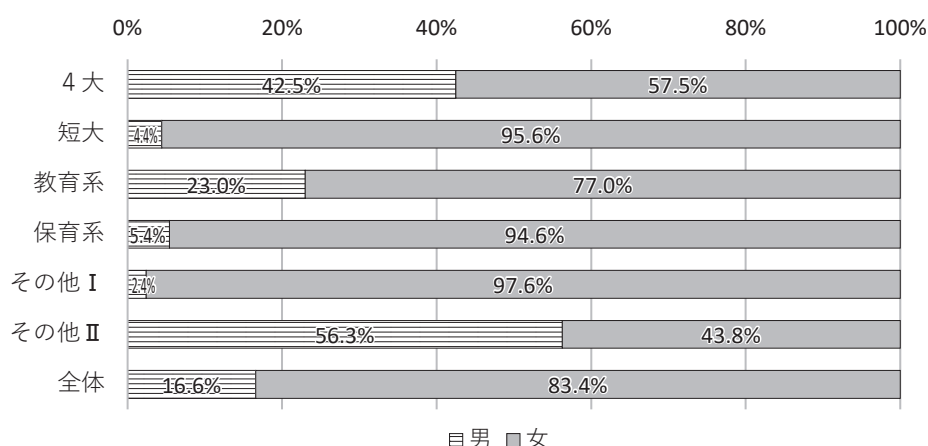
回答者の性別について質問した。

大学別区分では、「4大」は『男』42.5%、『女』57.5%で、比較的に近い割合だった。一方、「短大」は『男』4.4%、『女』95.6%であり、圧倒的に女性の割合が多かった。

専門別区分では、「教育系」は『男』23.0%、『女』77.0%、「保育系」は『男』5.4%、『女』94.6%、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」は『男』2.4%、『女』97.6%、「その他Ⅱ（生物・システム系）」は『男』56.3%、『女』43.8%で区分により差があった。



（図1）質問2 回答者の年齢



(図2) 質問3 回答者の性別

全体では『男』16.6%、『女』83.4%であった。これは、女性比率の高い「短大」の割合が多いことや、同じく女性比率の高い「保育系」や「その他Ⅰ」の割合が多いことが理由であると考えられる。このことにより、回答に何らかの形で男女差が出ることもあるのではないかと推察する。

質問4) 回答者の未婚・既婚状況(図3)

回答者が未婚か既婚かについて質問した。

大学別区分では、「4大」は未婚者の割合が100.0%で、既婚者はいなかった。「短大」は未婚者の割合が98.3%で、既婚者の割合は1.7%であった。

専門別区分では、「教育系」は『未婚』100.0%、「保育系」は『未婚』98.2%『既婚』1.8%、「その他Ⅰ」は『未婚』98.8%『既婚』1.2%、「その他Ⅱ」は『未婚』100.0%であった。

全体としては、『未婚』98.8%、『既婚』1.2%であった。

質問5) 回答者の出身地域(図4)

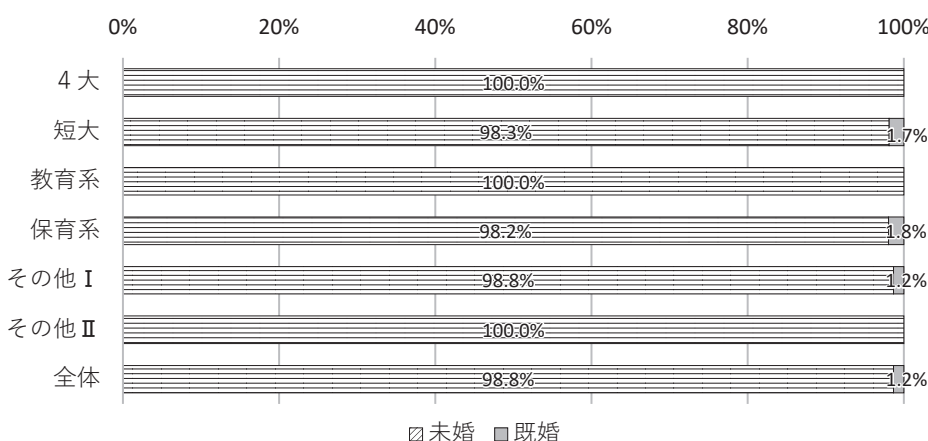
回答者の出身地域について質問した。

大学別区分では、「4大」は割合の高い順に、『東北』

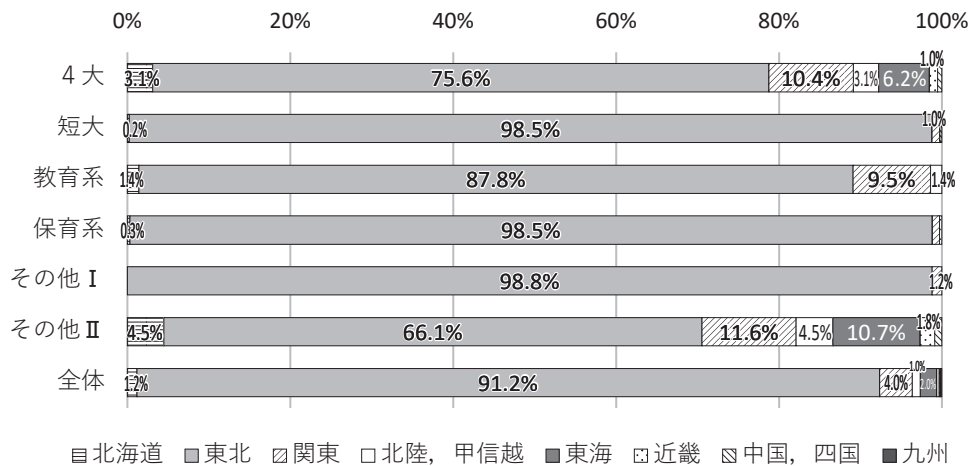
75.6%、『関東』10.4%、『東海』6.2%、『北海道』『北陸、甲信越』が3.1%、『近畿』1.0%、『中国、四国』0.5%だった。「短大」は、『東北』98.5%、『関東』1.0%、『北海道』『九州』0.2%で、「短大」の特色である「地域の身近な高等教育機関」を如実に表しており、その大半が地元出身者で占められている。それに対して「4大」は、所在地である東北の出身者は多いが、各地から学生が集まって来ていることが分かる。

専門別区分では、「教育系」は『東北』87.8%、『関東』9.5%、『北海道』『北陸、甲信越』1.4%、「保育系」は『東北』98.5%、『関東』0.9%、『北海道』『九州』0.3%、「その他Ⅰ」は『東北』98.8%、『関東』1.2%、「その他Ⅱ」は『東北』66.1%、『関東』11.6%、『東海』10.7%、『北海道』『北陸、甲信越』4.5%、『近畿』1.8%、『中国、四国』0.9%だった。

全体としては、『東北』の割合が91.2%、『関東』4.0%、『東海』2.0%、『北海道』1.2%、『その他の地域』が1.7%であった。



(図3) 質問4 回答者の未婚・既婚状況



（図4）質問5 回答者の出身地域

質問6）回答者の兄弟姉妹の人数（図5）

回答者の兄弟姉妹の人数について、「自分以外に何人いますか。」と質問した。

大学別区分では、「4大」で最も割合が高かったのは『1人（2人兄弟姉妹）』の52.3%、次いで『2人（3人兄弟姉妹）』の33.2%、『0人（1人っ子）』の9.8%だった。「短大」でも割合の順番は同じで、『1人（2人兄弟姉妹）』が50.1%、『2人（3人兄弟姉妹）』が28.9%、『0人（1人っ子）』が9.0%だった。また「短大」にあっては、わずかな差ではあるが、『3人（4人兄弟姉妹）』が7.3%で「4大」より4.2ポイント高く、『4人以上（5人以上の兄弟姉妹）』も4.6%で3.0ポイント高かった。

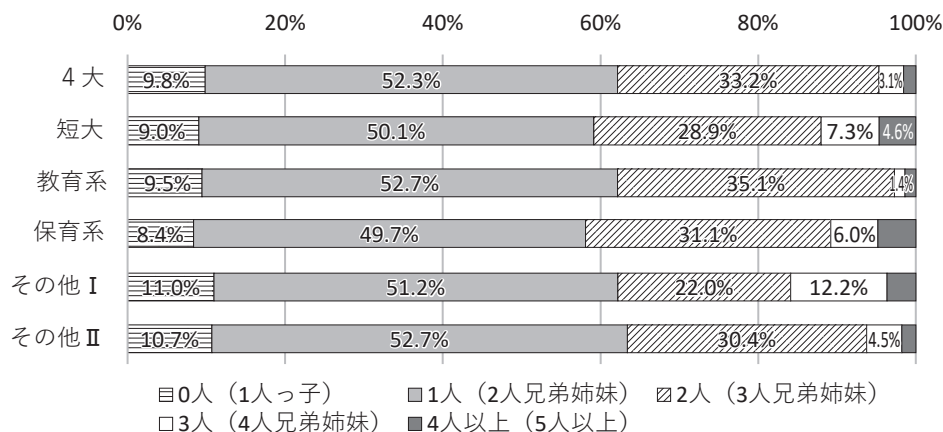
専門別区分でみると、4区分の全てにおいて割合の高い順番は、2番目までは4大・短大と同じであった。『1人（2人兄弟姉妹）』は、「教育系」52.7%、「保育系」49.7%、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」51.2%、「その他Ⅱ（生物・システム系）」52.7%で、『2人（3人兄弟姉妹）』は、教育系35.1%、「保育系」31.1%、「その他Ⅰ」22.0%、「その他Ⅱ」30.4%だった。3番目に割合が高いのは、「教

育系」、「保育系」、「その他Ⅱ」が『0人（1人っ子）』で、それぞれ9.5%、8.4%、10.7%だった。「その他Ⅰ」だけは3番目に割合が高かったのが『3人（4人兄弟姉妹）』で12.2%、『0人（1人っ子）』は11.0%で4番目だった。なお、4区分の中で、「その他Ⅰ」と「その他Ⅱ」だけが『0人（1人っ子）』の割合が11.0%と10.7%で、他の2区分よりも若干高い割合を示しており、これは「4大」や「短大」と比べても若干高くなっている。

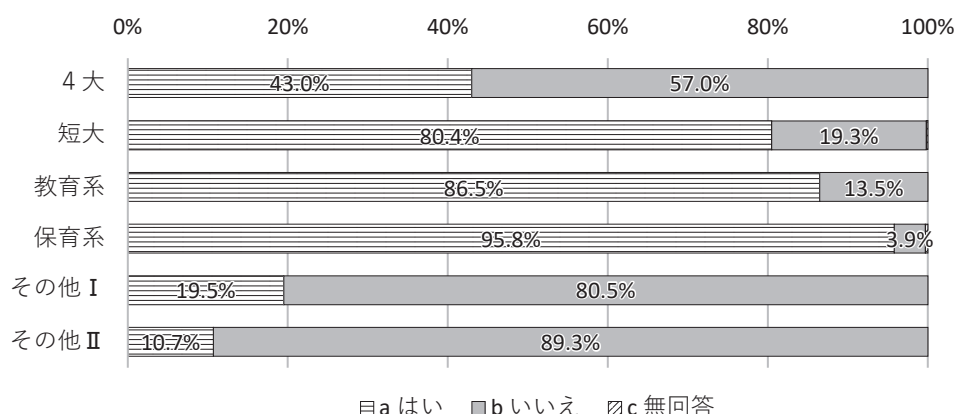
2 将来就きたい職業について

質問7）「将来就きたい職業は、保育士や教員、児童支援施設職員などの“子どもに関係する職業”ですか。」と回答者が将来、子どもに関係する職業に就きたいかについて質問した。（図6）

大学別区分では、「4大」の『はい』の割合は43.0%、『いいえ』は57.0%だった。「4大」の3大学の学部構成は、「教育系」38.3%、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）うち福祉系のみ」3.6%、「その他Ⅱ（生物・システム系）」58.0%であることから、必ずしも将来「子どもに関係する



（図5）質問6 回答者の兄弟姉妹の人数



（図6）質問7 将来子どもに関係する職業に就きたいか

職業」に就くとは限らない学生の方が多いと考えられる。それに対して、「短大」の『はい』の割合は80.4%、『いいえ』は19.3%であった。「短大」の3大学の学科構成は、「保育系」81.7%、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）うち食物・キャリア教養系のみ」18.3%であることから、将来卒業後に「子どもに関係する職業」に就くことを考えている学生が圧倒的に多いことが分かる。

専門別区分で比較してみると、「教育系」では『はい』の割合が86.5%、「保育系」では95.8%であるのに対して、「その他Ⅰ」で『はい』の割合は19.5%、『いいえ』は80.5%、「その他Ⅱ」での『はい』の割合は10.7%、『いいえ』が89.3%と、「教育系」や「保育系」とは正反対の割合を示している。

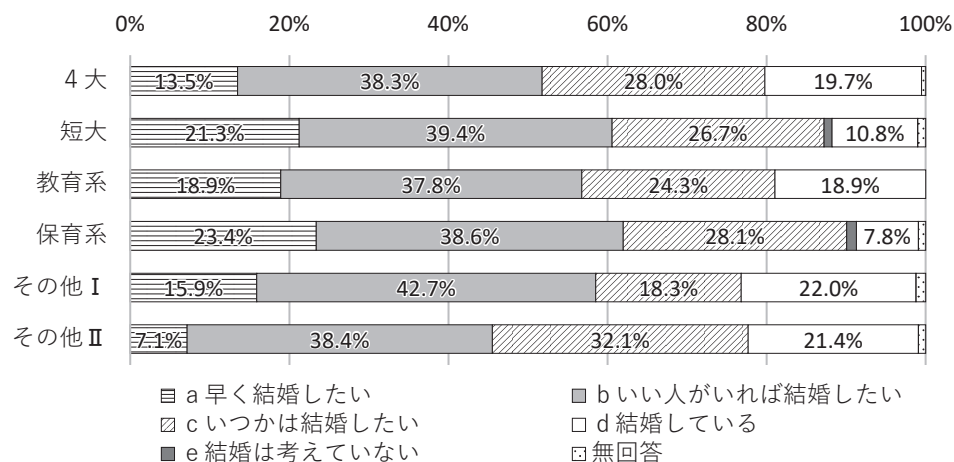
「教育系」や「保育系」の学生は、教員免許や保育士資格の取得を目指すなど子どもと関わる職業を目指そうとしている学部・学科に所属していることから、ほぼ想定どおりの結果だった。一方で、「その他Ⅰ」、「その他Ⅱ」は、一般的に子どもとの関係性が生じる学部・学科ではないためこの結果は必然である。しかしながら、教職課程を履修

しているなど、専門的な知識等を生かして将来的に子どもと関わる職業に就くことを目指している学生も若干数いることを踏まえておきたい。

3 結婚観について

質問8)「現在、結婚についてどのように考えていますか。」と回答者が、現在結婚についてどのように考えているかについて質問した。（図7）

選択肢『a 早く結婚したい』『b いい人がいれば結婚したい』は、結婚に対して積極的なタイプと仮定した場合、「4大」の『a』『b』の割合合計は51.8%、「短大」の割合合計は60.7%であり、短大生の方が結婚に積極的な学生が多いことを示している。それに、選択肢『c いつか結婚したい』と『d 結婚している』の割合も加えると、「4大」の割合合計は79.8%、「短大」は88.4%であり、学生の約8割に結婚願望があることを示唆していると考ええる。一方で、『e 結婚は考えていない』と回答した割合は、「4大」で19.7%、「短大」は10.8%であり、「4大」より「短大」の方が8.9ポイント低かった。結婚を考えていない理由に



（図7）質問8 結婚に対する意識

ついては、質問11で確認する。

専門別区分で比較すると、『a 早く結婚したい』『b いい人がいれば結婚したい』という結婚に対して積極的タイプは、割合合計が高い順に、「保育系」62.0%、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」58.6%、「教育系」56.7%、「その他Ⅱ（生物・システム系）」45.5%であった。この割合に『c いつか結婚したい』と『d 結婚している』の割合を加えると、高い順に、「保育系」91.3%、「教育系」81.0%、「その他Ⅱ」77.6%、「その他Ⅰ」76.9%であり、「保育系」の割合が圧倒的に高く、次いで「教育系」であったが、4つの区分の全てにおいて76.9%以上の結婚願望があることが分かった。その一方で、『e 結婚は考えていない』の割合は、高い順に、「その他Ⅰ」が22.0%、「その他Ⅱ」が21.4%、「教育系」18.9%、「保育系」7.8%であった。「その他Ⅰ」と「その他Ⅱ」は20%以上だったが、「保育系」は10%未満でその差は13.6～14.2ポイントもあった。この背景は質問11で確認する。

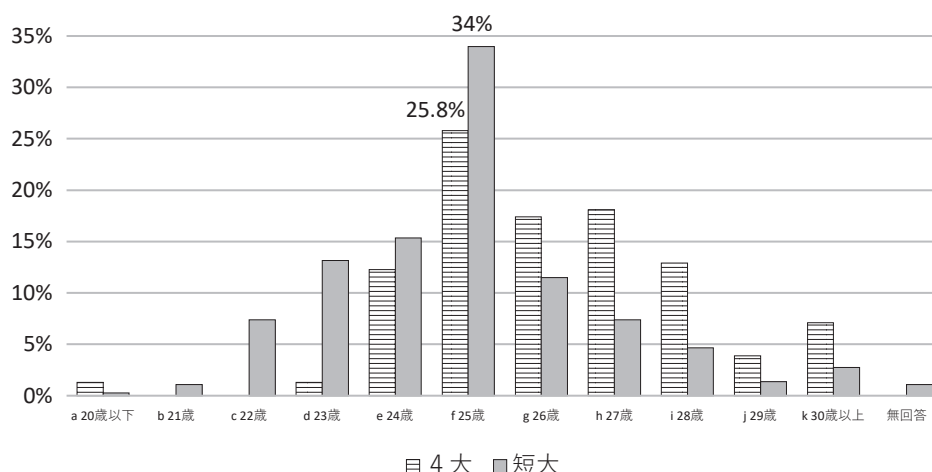
なお、本学では、2015（平成27）年度と2018（平成30）年度に別の研究目的で、学生の結婚願望について調査しており、その結果から2016年（安藤ら）⁽²⁾は、1・2年生合計224人の91.5%が、2019年（藤原ら）⁽³⁾は、1・2年生合計241人の97.0%が、それぞれ結婚願望を持っていると報告しているが、今回の調査結果により、県内外を問わず保育学生の結婚願望は現在も90%以上の高い割合であることが確認できた。

質問9）質問8で『a 早く結婚したい』『b いい人がいれば結婚したい』『c いつか結婚したい』『d 結婚している』と回答した人への質問である。「結婚を希望する年齢は何歳ですか。」と結婚を希望している回答者が結婚を希望する年齢について質問した。ただし、結婚している人は結婚当時の年齢で答えるものとした。（図8）

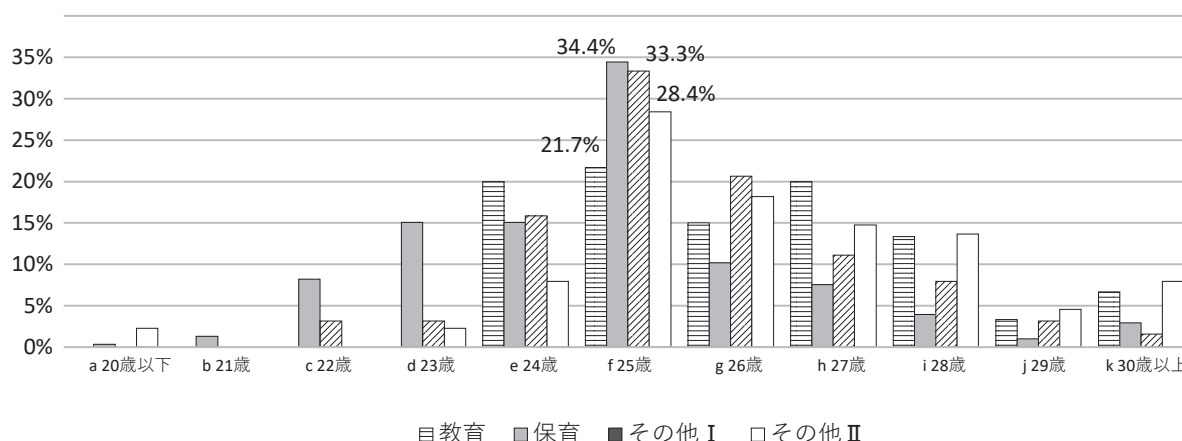
大学別区分では、「4大」も「短大」も、25歳での結婚

を希望している学生の割合がそれぞれ25.8%、34.3%と他の年齢に比べて最も高かった。「4大」では25歳までの結婚希望割合の合計が40.7%であり、卒業後の23歳から29歳までの7年間に91.7%が結婚を希望していることが分かった。30歳以上での結婚希望割合は7.1%であった。一方、「短大」は25歳までの結婚希望割合の合計が72.0%と高い割合を示していて、「4大」より31.3ポイントも高かった。さらに卒業後の21歳から29歳までの9年間に96.9%が結婚を希望している。また、30歳以上で結婚を希望している割合はわずか2.8%で、「4大」よりも4.3ポイント低かった。一般的に「短大」の卒業年齢は20歳であり、「4大」の卒業年齢が22歳であることを考えると、両者に見られるこうしたずれはうなずけるところである。4大生は卒業後、社会人としてキャリアを積んだあとに結婚を希望する学生もいると思われるが、短大生は4大生よりも早く社会に出るため、結婚希望等人生設計が早くなっているものと推察される。

専門別区分の比較でも、4つの区分の全てにおいて25歳で結婚を希望している学生の割合が最も高かった。（図9）「教育系」は全て4大生が占めているが、21.7%の割合を示している25歳を中心に、25歳までの結婚希望割合の合計は41.7%だった。卒業後の23歳から29歳までの7年間に93.3%が結婚を希望している。また、30歳以上で結婚を希望している割合は6.7%で、専門別区分中、「その他Ⅱ（生物・システム系）」の8.0%に次ぐ高い割合だった。「保育系」は全て短大生だが、34.4%と4区分中最も高い割合を示している25歳を中心に、25歳までの結婚希望割合の合計は74.4%と高かった。卒業して21歳から29歳までの9年間に96.7%が結婚を希望している。30歳以上で結婚を希望している割合は3.0%と少なかった。「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」は4大生と短大生が混在している。33.3%と高い割合を示している25歳を中心に、25歳までの結婚希望割合の合計は55.6%であり、卒業後の21歳か



（図8）質問9 結婚を希望する年齢（大学別区分）



(図9) 質問9 結婚を希望する年齢(専門別区分)

ら29歳までの9年間に98.4%が結婚を希望している。30歳以上で結婚を希望している割合は1.6%で専門別区分中最少であった。「その他Ⅱ」は全て4大生だが、28.4%を示している25歳を頂点に、25歳までの結婚希望割合の合計は41.0%で4区分中最少で、卒業後の23歳から29歳までの7年間に89.8%が結婚を希望している。また、30歳以上で結婚を希望している割合は8.0%で専門別区分中最多であった。

これらのことから、質問8で『結婚したい』『結婚している』と回答した516人のうちの495人95.9%の学生が29歳までに結婚したいと考えており、特に25歳と回答した164人の31.8%が結婚願望年齢のピークとなっていることが分かった。

参考までに、保育系短大である本学で過去に実施した別の調査でも何歳までに結婚したいかを質問した結果は、2016年(安藤ら)⁽⁴⁾は1・2年生224人のうち120名の回答で79.2%が、2019年(藤原ら)⁽⁵⁾は1・2年生241人の68.9%が25歳までに結婚したいと回答した。

2023年の厚生労働省「人口動態統計月報年計(概数)の概況」⁽¹⁸⁾の示す全国平均初婚年齢は夫31.1歳、妻29.7歳である。これと同統計による秋田県の平均初婚年齢を比較してみると、夫は31.1歳、妻は29.5歳であり、全国平均とほぼ同水準になっている。また、秋田県の平均初婚年齢を1980(昭和55)年と比較すると、男性は3.7年、女性は4.8年遅くなっていることから、秋田県でも確実に晩婚化が進んでいることが分かった。

本調査対象の学生の結婚希望年齢はこうした全国平均初婚年齢や秋田県の平均初婚年齢よりも若い時期に結婚したいと希望している。希望と現実はずいぶん一致する訳ではないが、本調査では大半の学生が引き続き25歳を中心に29歳ぐらいまでには結婚したいと希望していることから、国及び地方自治体はこうした若者の願望を叶えられるような環境を様々な立場で考え、整えていく必要があると考える。

質問10) 質問8で『a 早く結婚したい』『b いい人がいれば結婚したい』『c いつか結婚したい』『d 結婚している』と回答した人への質問である。「なぜ結婚したいと思いましたか。」と結婚を希望している回答者に結婚を希望する理由について質問した。a～kの質問事項別に、『とても当てはまる』『やや当てはまる』『あまり当てはまらない』『全く当てはまらない』に○をひとつ記入してくださいという4件法で回答してもらった。ただし、結婚している人は結婚した時の気持ちで答えるものとする。(表2)

大学別区分では、「4大」も「短大」も、『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が50%代～90%代となっている質問事項が次の7つで共通している。割合合計が高い順に見ることにする。

「a 夫婦で明るく楽しい家庭を築きたいから」

4大94.1%、短大95.6%

「f 家族団らんのある家庭を作りたいから」

4大85.8%、短大93.1%

「g 何でも言えて相談できる様な家族関係を作りたいから」

4大82.6%、短大86.5%

「b 夫婦で力を合わせて子どもを育てたいから」

4大80.6%、短大82.8%

「d 両親を安心させたいから」

4大65.8%、短大65.8%

「e 将来の老後を考えたから」

4大63.2%、短大65.5%

「h 結婚願望が高い方だから」

4大56.1%、短大64.1%

この7つの選択肢のうち、「4大」と「短大」の割合がともに80%以上となっている「a」「f」「g」「b」は、いずれも「～したい」という目標や希望であり、積極的に結婚をしたいという気持ちを抱いていることが高い割合に表れているのではないだろうか。

（表2） 質問10 なぜ結婚したいと思ったか

質問事項	選択肢	大学別区分		専門別区分			
		4大	短大	教育系	保育系	その他Ⅰ	その他Ⅱ
a 夫婦で明るく楽しい家庭を築きたいから	1. とても当てはまる	53.5%	57.7%	61.7%	59.3%	50.8%	47.7%
	2. やや当てはまる	40.6%	37.6%	35.0%	36.4%	44.4%	44.3%
	3. あまり当てはまらない	4.5%	1.9%	3.3%	1.6%	3.2%	5.7%
	4. 全く当てはまらない	1.3%	0.3%	0.0%	0.3%	0.0%	2.3%
	無回答	0.0%	2.5%	0.0%	2.3%	1.6%	0.0%
b 夫婦で力を合わせて子どもを育てたいから	1. とても当てはまる	44.5%	51.9%	58.3%	55.1%	39.7%	33.0%
	2. やや当てはまる	36.1%	30.9%	25.0%	31.5%	28.6%	44.3%
	3. あまり当てはまらない	14.8%	12.2%	11.7%	9.8%	22.2%	18.2%
	4. 全く当てはまらない	4.5%	2.5%	5.0%	1.3%	7.9%	4.5%
	無回答	0.0%	2.5%	0.0%	2.3%	1.6%	0.0%
c 一人前の人間として認めてもらいたいから	1. とても当てはまる	9.0%	11.3%	6.7%	12.5%	6.3%	10.2%
	2. やや当てはまる	21.9%	27.6%	21.7%	27.9%	27.0%	21.6%
	3. あまり当てはまらない	39.4%	42.0%	43.3%	40.7%	49.2%	36.4%
	4. 全く当てはまらない	29.7%	16.3%	28.3%	16.4%	15.9%	31.8%
	無回答	0.0%	2.8%	0.0%	2.6%	1.6%	0.0%
d 両親を安心させたいから	1. とても当てはまる	23.9%	26.0%	15.0%	25.6%	31.7%	27.3%
	2. やや当てはまる	41.9%	39.8%	53.3%	40.0%	38.1%	35.2%
	3. あまり当てはまらない	23.2%	23.2%	25.0%	23.9%	17.5%	23.9%
	4. 全く当てはまらない	11.0%	8.6%	6.7%	8.2%	11.1%	13.6%
	無回答	0.0%	2.5%	0.0%	2.3%	1.6%	0.0%
e 将来の老後を考えたから	1. とても当てはまる	27.7%	26.5%	26.7%	25.2%	34.9%	27.3%
	2. やや当てはまる	35.5%	39.0%	38.3%	39.0%	38.1%	34.1%
	3. あまり当てはまらない	18.7%	23.2%	26.7%	24.6%	15.9%	13.6%
	4. 全く当てはまらない	18.1%	8.8%	8.3%	8.9%	9.5%	25.0%
	無回答	0.0%	2.5%	0.0%	2.3%	1.6%	0.0%
f 家族団らんのある家庭を作りたいから	1. とても当てはまる	54.2%	63.8%	56.7%	66.6%	49.2%	53.4%
	2. やや当てはまる	31.6%	29.3%	31.7%	27.2%	42.9%	29.5%
	3. あまり当てはまらない	9.0%	3.9%	5.0%	3.3%	6.3%	12.5%
	4. 全く当てはまらない	4.5%	0.8%	5.0%	0.7%	1.6%	4.5%
	無回答	0.6%	2.2%	1.7%	2.3%	0.0%	0.0%
g 何でも言えて相談できる様な家族関係を作りたいから	1. とても当てはまる	47.1%	52.8%	51.7%	54.8%	42.9%	44.3%
	2. やや当てはまる	35.5%	33.7%	33.3%	31.5%	47.6%	35.2%
	3. あまり当てはまらない	12.9%	9.7%	11.7%	9.8%	7.9%	14.8%
	4. 全く当てはまらない	4.5%	1.4%	3.3%	1.6%	0.0%	5.7%
	無回答	0.0%	2.5%	0.0%	2.3%	1.6%	0.0%
h 結婚願望が高い方だから	1. とても当てはまる	22.6%	28.5%	33.3%	31.5%	14.3%	14.8%
	2. やや当てはまる	33.5%	35.6%	35.0%	35.7%	39.7%	29.5%
	3. あまり当てはまらない	31.6%	25.7%	25.0%	23.3%	34.9%	38.6%
	4. 全く当てはまらない	12.3%	7.7%	6.7%	7.2%	9.5%	17.0%
	無回答	0.0%	2.5%	0.0%	2.3%	1.6%	0.0%
i 友人や親戚等の結婚式に参加して「結婚っていいなあ」と感じたから	1. とても当てはまる	7.7%	16.9%	6.7%	17.0%	15.9%	8.0%
	2. やや当てはまる	13.5%	20.4%	8.3%	21.6%	15.9%	15.9%
	3. あまり当てはまらない	33.5%	35.4%	36.7%	34.1%	39.7%	33.0%
	4. 全く当てはまらない	45.2%	24.9%	48.3%	24.9%	27.0%	43.2%
	無回答	0.0%	2.5%	0.0%	2.3%	1.6%	0.0%
j 結婚や子育てにはそんなに金が必要ではないということを聞いたから	1. とても当てはまる	2.6%	4.1%	3.3%	4.6%	1.6%	2.3%
	2. やや当てはまる	5.8%	7.2%	1.7%	6.6%	11.1%	8.0%
	3. あまり当てはまらない	24.5%	39.0%	23.3%	38.4%	42.9%	23.9%
	4. 全く当てはまらない	67.1%	46.7%	71.7%	47.5%	42.9%	65.9%
	無回答	0.0%	3.0%	0.0%	3.0%	1.6%	0.0%
k 日本の少子化に歯止めをかけるためにも結婚して子どもを持ちたいから	1. とても当てはまる	6.5%	7.7%	5.0%	8.2%	4.8%	8.0%
	2. やや当てはまる	14.8%	15.5%	15.0%	15.7%	14.3%	14.8%
	3. あまり当てはまらない	26.5%	42.3%	26.7%	41.3%	49.2%	23.9%
	4. 全く当てはまらない	52.3%	32.0%	53.3%	32.5%	30.2%	53.4%
	無回答	0.0%	2.5%	0.0%	2.3%	1.6%	0.0%

一方、『全く当てはまらない』『あまり当てはまらない』の割合合計が50%代～90%代となっている選択肢は、次の4つであった。割合合計が高い順に見ることにする。

「j」結婚や子育てにはそんなにお金が重要ではないということを知ったから」

4大91.6%、短大85.7%

「k 日本の少子化に歯止めをかけるためにも結婚して子どもを持ちたいから」

4大78.8%、短大74.3%

「i 友人や親戚等の結婚式に参加して結婚っていいなあと感じたから」

4大78.7%、短大60.3%

「c 一人前の人間として認めてもらいたいから」

4大69.1%、短大58.3%

「j」の『当てはまらない』の割合が高いのは、大半の学生が結婚や子育てにはお金がかかると認識しているからであろう。質問8で『結婚は考えていない』と回答した人が質問11で「なぜ結婚は考えていないのか」という質問に対して、「経済的に難しくなると思うから」と答えた割合が、「4大」55.2%、「短大」59.1%だったことは、それを裏付けるものである。また、質問15-2でも「子育てのどのようなことが不安か」に対して、「経済的にやっていけるか」と回答した割合が「4大」23.7%、「短大」21.9%と回答全体の2番目に高い割合を示している。

「k」や「c」については、自分以外の他者や社会が関わることなので『当てはまらない』の割合が高くなっていると考えられる。「i」については、挙式の実施の有無やスタイルの多様化により結婚式への憧れが少なくなっていたり、学生結婚のケースも稀で身近な人の結婚式に参加することが少なくなってきたりしていることなどから当てはまらない傾向が高くなるのではないかと考える。

専門別区分でも、大学別区分で述べたこととほぼ同様な傾向があると言えるが、4区分中、唯一「その他Ⅱ」だけが、「h 結婚願望が高い方だから」が『当てはまらない』の割合が55.6%となっていて、結婚願望が低いと考えている学生が半数以上いることを示している。「教育系」や「保育系」、「その他Ⅰ」の「h 結婚願望が高い方だから」の割合は、いずれも『当てはまる』で高く、それぞれ68.3%、67.2%、54.0%であることから考えると、「その他Ⅱ」の特徴的な傾向を示していると言える。

全般的には、「a」「b」「f」「g」の『当てはまる』の割合が高いことから、パートナーと協力して温かい家庭を作りたいという考えは、いずれの区分でも結婚したい層の共通の気持ちであることが分かった。

質問11) 質問8で『e 結婚は考えていない』と回答した人への質問である。「なぜ結婚は考えていないのですか。」と結婚を考えていない回答者の結婚を考えていない理由に

ついて質問した。a～iの質問事項別に、『とても当てはまる』『やや当てはまる』『あまり当てはまらない』『全く当てはまらない』に○をひとつ記入してくださいという4件法で回答してもらった。(表3)

大学別区分で比較すると、「4大」も「短大」も結婚を考えていない理由として、個人の思想に関する選択肢が多く選ばれ、回答の傾向にばらつきはあるものの、『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が55%以上を占めているのは、割合合計が高い順に、次の6つの同じ質問事項だった。

「d 一人の方が楽だと思うから」

4大94.8%、短大79.6%

「i 自分のやりたいことが制限されてしまうから」

4大79.0%、短大77.3%

「c 仕事や趣味など他に夢中になるものがあると思うから」

4大76.3%、短大77.3%

「e 交際した経験が(あまり)ないから」

4大57.9%、短大59.1%

「a 経済的に難しくなると思うから」

4大55.2%、短大59.1%

「b 仕事が忙しいと思うから」

4大55.2%、短大59.1%

この6つのうち、「e 交際した経験が(あまり)ないから」を除く5つは、「a 自分の経済力」「b 自分の仕事の多忙さ」「c 自分が夢中になるもの」「d 自分一人が楽」「i 自分のやりたいことの制限」と、個人の仕事や給料(所得)の将来予測をした上での考えや、個人の自由に関わることややりたいことを大切にするという考えから、結婚には否定的な考えを持っているように思われる。「e 交際した経験が(あまり)ないから」の割合が「4大」、「短大」とともに55%以上であったが、現時点でそうであっても、交際の経験のなさが結婚を考えないという理由にまで本当に影響するのは予測できないことではないかと考えるとともに、将来的に結婚するという可能性を秘めているとも考えられる。なお、「d 一人の方が楽だと思うから」について「4大」と「短大」の割合を比較してみると、「4大」が15.2ポイントも高くなっている。これは4大生の年齢が短大生よりも高く、自立心やキャリア観の高さなどが影響しているのではないかと推察する。

一方、『全く当てはまらない』『あまり当てはまらない』の割合合計が高かったのは、高い順に次の3つの同じ質問事項であった。

「g 遠距離恋愛だから」

4大94.7%、短大88.7%

「f 親や周囲が認めてくれるか分からないから」

4大89.5%、短大81.8%

「h 結婚しても離婚するかもしれないから」

（表3） 質問11 なぜ結婚は考えていないのか

質問事項	選択肢	大学別区分		専門別区分			
		4大	短期大学	教育系	保育系	その他Ⅰ	その他Ⅱ
a 経済的に難しくなると思うから	1. とても当てはまる	26.3%	31.8%	21.4%	23.1%	44.4%	29.2%
	2. やや当てはまる	28.9%	27.3%	21.4%	30.8%	22.2%	33.3%
	3. あまり当てはまらない	23.7%	13.6%	35.7%	15.4%	11.1%	16.7%
	4. 全く当てはまらない	21.1%	22.7%	21.4%	26.9%	16.7%	20.8%
	無回答	0.0%	4.5%	0.0%	3.8%	5.6%	0.0%
b 仕事が忙しいと思うから	1. とても当てはまる	18.4%	22.7%	28.6%	15.4%	33.3%	12.5%
	2. やや当てはまる	36.8%	36.4%	21.4%	38.5%	33.3%	45.8%
	3. あまり当てはまらない	26.3%	18.2%	28.6%	15.4%	22.2%	25.0%
	4. 全く当てはまらない	18.4%	18.2%	21.4%	26.9%	5.6%	16.7%
	無回答	0.0%	4.5%	0.0%	3.8%	5.6%	0.0%
c 仕事や趣味など他に夢中になるものがあると思うから	1. とても当てはまる	50.0%	50.0%	35.7%	42.3%	61.1%	58.3%
	2. やや当てはまる	26.3%	27.3%	21.4%	30.8%	22.2%	29.2%
	3. あまり当てはまらない	10.5%	11.4%	28.6%	11.5%	11.1%	0.0%
	4. 全く当てはまらない	13.2%	6.8%	14.3%	11.5%	0.0%	12.5%
	無回答	0.0%	4.5%	0.0%	3.8%	5.6%	0.0%
d 一人の方が楽だと思うから	1. とても当てはまる	63.2%	52.3%	57.1%	38.5%	72.2%	66.7%
	2. やや当てはまる	31.6%	27.3%	35.7%	38.5%	11.1%	29.2%
	3. あまり当てはまらない	0.0%	4.5%	0.0%	3.8%	5.6%	0.0%
	4. 全く当てはまらない	5.3%	11.4%	7.1%	15.4%	5.6%	4.2%
	無回答	0.0%	4.5%	0.0%	3.8%	5.6%	0.0%
e 交際した経験が（あまり）ないから	1. とても当てはまる	34.2%	36.4%	35.7%	26.9%	50.0%	33.3%
	2. やや当てはまる	23.7%	22.7%	35.7%	26.9%	16.7%	16.7%
	3. あまり当てはまらない	23.7%	18.2%	21.4%	19.2%	16.7%	25.0%
	4. 全く当てはまらない	18.4%	20.5%	7.1%	23.1%	16.7%	25.0%
	無回答	0.0%	2.3%	0.0%	3.8%	0.0%	0.0%
f 親や周囲が認めてくれるか分からないから	1. とても当てはまる	2.6%	4.5%	7.1%	3.8%	5.6%	0.0%
	2. やや当てはまる	7.9%	6.8%	7.1%	11.5%	0.0%	8.3%
	3. あまり当てはまらない	26.3%	18.2%	21.4%	15.4%	22.2%	29.2%
	4. 全く当てはまらない	63.2%	63.6%	64.3%	65.4%	61.1%	62.5%
	無回答	0.0%	6.8%	0.0%	3.8%	11.1%	0.0%
g 遠距離恋愛だから	1. とても当てはまる	0.0%	4.5%	0.0%	0.0%	11.1%	0.0%
	2. やや当てはまる	5.3%	0.0%	7.1%	0.0%	0.0%	4.2%
	3. あまり当てはまらない	10.5%	11.4%	7.1%	11.5%	11.1%	12.5%
	4. 全く当てはまらない	84.2%	77.3%	85.7%	84.6%	66.7%	83.3%
	無回答	0.0%	6.8%	0.0%	3.8%	11.1%	0.0%
h 結婚しても離婚するかもしれないから	1. とても当てはまる	13.2%	13.6%	7.1%	11.5%	16.7%	16.7%
	2. やや当てはまる	15.8%	22.7%	0.0%	19.2%	27.8%	25.0%
	3. あまり当てはまらない	15.8%	27.3%	21.4%	34.6%	16.7%	12.5%
	4. 全く当てはまらない	55.3%	29.5%	71.4%	30.8%	27.8%	45.8%
	無回答	0.0%	6.8%	0.0%	3.8%	11.1%	0.0%
i 自分のやりたいことが制限されてしまうから	1. とても当てはまる	47.4%	50.0%	50.0%	30.8%	77.8%	45.8%
	2. やや当てはまる	31.6%	27.3%	21.4%	34.6%	16.7%	37.5%
	3. あまり当てはまらない	7.9%	9.1%	14.3%	15.4%	0.0%	4.2%
	4. 全く当てはまらない	13.2%	9.1%	14.3%	15.4%	0.0%	12.5%
	無回答	0.0%	4.5%	0.0%	3.8%	5.6%	0.0%

4大71.1%、短大56.8%

これらが当てはまらないのは、現時点ではあまり現実味がない事柄だからではないだろうか。特に結婚する前から離婚という意識はないのではないかとと思われる。

次に、専門別区分で比較する。『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が高い質問事項は、大学別区分と同様に「d 一人の方が楽だと思うから」「i 自分のやりたいことが制限されてしまうから」「c 仕事や趣味など他に夢中になるものがあると思うから」を示しているのが、「教育系」を除く「保育系」、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」、「その他Ⅱ（生物・システム系）」であった。ただし、「d」については、「保育系」は「短大」の79.6%とほぼ同じ割合の77.0%と低かったが、それ以外は83%～90%代と高い割合であり、女子が圧倒的に多い「保育系」や「短大」とそれ以外とは考え方が異なっているのではないかと推察する。また、「i」については、全ての区分で高い割合となっている。特に、「その他Ⅰ」で94.5%と高い割合を示している。「その他Ⅰ」は、「福祉系（4大生）・食物系（短大生）・キャリア教養系（短大生）」で構成されているが、当該質問に回答した者は、全て短大生であったことから、学科による差異が見られたと推察する。「c」については、「保育系」、「その他Ⅰ」、「その他Ⅱ」でいずれも高い割合を占めていて、順に73.1%、83.3%、87.5%だった。「教育系」だけが57.1%と低く、他の区分と16～30.4ポイントの差がある。「教育系」は他区分と違って多くの学生が仕事や趣味と結婚は別物と割り切っているからであろうか。改めて「教育系」の高い割合を見ると、「d」「e」「i」であり、「e 交際した経験が（あまり）ないから」が2番目に高い71.4%という割合で他との違いが際立っている。ちなみに、「保育系」と「その他Ⅱ」における「e」の割合は、それぞれ53.8%、50.0%であり、「教育系」との差は17.6～21.4ポイントであった。

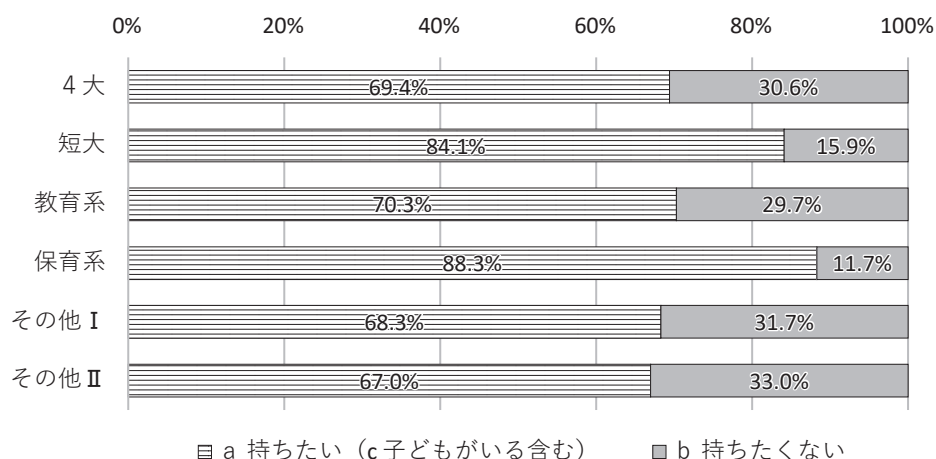
一方、『全く当てはまらない』『あまり当てはまらない』

の割合合計が高かった3つの質問事項は、大学別区分と同様に「g 遠距離恋愛だから」「f 親や周囲が認めてくれるか分からないから」「h 結婚しても離婚するかもしれないから」であったが、「教育系」と「その他Ⅱ」では、それ以外の選択肢も入っている。まず「教育系」では、「a 経済的に難しくなると思うから」が57.1%、「b 仕事が忙しいと思うから」が50.0%であった。つまり、教育系学生の半数程度は、経済的なことや仕事の忙しさは結婚を阻害する要因ではないと考えているということになる。次に、「その他Ⅱ」については、「e 交際した経験が（あまり）ないから」が50.0%で、大学別と専門別の6区分中唯一『とても当てはまる』『やや当てはまる』と両方に位置づけられている。これは、他区分の学生よりも交際経験がある学生が多いということだろうか。

これに関連して、近年、「未婚化」が進んでいると言われている我が国だが、その実態を確認しておきたい。2022年2月の内閣府男女共同参画局の「結婚と家族をめぐる基礎データ」⁽¹⁹⁾によると、2020年の男性50歳時点での未婚割合は25.9%、25歳時点では85.2%だが、1985年の男性50歳時点の未婚割合は3.7%、25歳時点では77.1%であり、それぞれ22.2ポイント、8.1ポイント未婚化が進んでいる。同じく、2020年の女性50歳時点の未婚割合は16.4%、25歳時点では77.5%だが、1985年の女性の未婚割合は50歳時点では4.3%、25歳時点は49.2%で、それぞれ12.1ポイント、28.3ポイント未婚化が進んでいることが分かった。

4 子ども観について

質問12)「将来子どもを持ちたいと思いますか。」将来、子どもを持つことを希望するかどうかについて質問した。『a 持ちたい』『b 持ちたくない』『c 子どもがいる』の選択肢の中からひとつ選んで回答してもらった。ただし、子どもがいる場合は、『子どもを持ちたい』に含むことにする。(図10)



(図10) 質問12 将来子どもを持ちたいか

区分全体では、概ね10人のうち、7人の学生は『子どもを持ちたい』と考えており、大学別区分では、『子どもを持ちたい』が「4大」134人69.4%と、「短大」344人84.1%で、『子どもを持ちたくない』が「4大」59人30.6%と「短大」65人15.9%だった。『子どもを持ちたい』では、「短大」が「4大」を14.7ポイント上回っている。4大生に比べて短大生の方が子どもを持ちたい割合が圧倒的に高かった。子どもを持つ、持たないにおける4大生と短大生の意識の違いが大きく出ている。

専門別区分で比較すると、『子どもを持ちたい』割合が大きい順に、「保育系」295人88.3%、「教育系」52人70.3%、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」56人68.3%、「その他Ⅱ（生物・システム系）」75人67.0%であった。「教育系」学生は全て4大生であり、「4大」の割合とほぼ同じである。「その他Ⅱ」の学生も全て4大生だが、「4大」「教育系」の割合よりも、持ちたい割合でそれぞれ、2.4ポイント、3.3ポイント低くなっている。「その他Ⅱ」はいわゆる理系学生で、子どもを持つことに他の4大生より若干消極的である傾向が見られた。

「保育系」学生は全て短大生であるが、『子どもを持ちたい』割合は、「短大」の持ちたい割合84.1%よりも4.2ポイント高く、保育系学生は子どもを持つことに前向きであると言える。

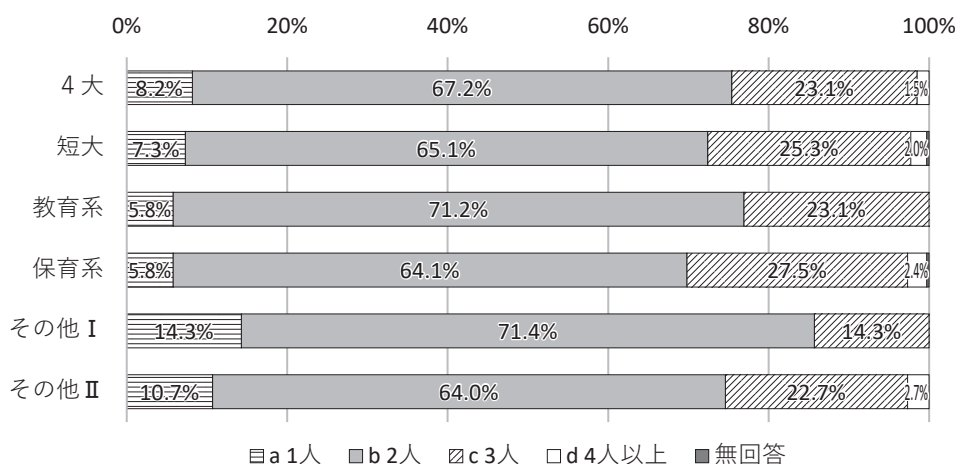
6区分の全てで、『子どもを持ちたい』と答えた割合が6割以上であった。その中でも8割を超えていた区分は「短大」と「保育系」であった。それに対して、『子どもを持ちたくない』の割合が比較的高かったのが、「その他Ⅱ（生物・システム系）」の33.0%、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」の31.7%、「4大」の30.6%、「教育系」29.7%だった。10人のうちほぼ3人程度が持ちたくないと思っている。しかし、「保育系」と「短大」ではそれぞれ11.7%、15.9%と持ちたくない割合が低いことが分かった。

4大生は短大生に比べて学生時代に積むキャリアが多岐

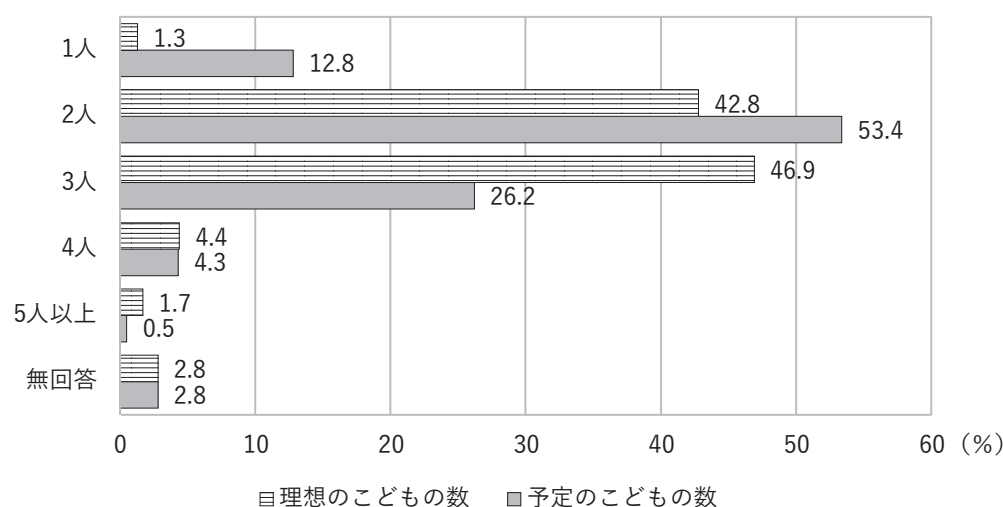
にわたると思われることから、一つ一つの物事への関心が広く浅くなり、結婚して子どもを持つことや子育てについても関心が向かない、あるいは薄くなってしまふのかもしれない。他方で、「短大」の約8割を占めているのが「保育系」学生であることも影響していると考えられるが、子どもを持つことについては圧倒的に「短大」や「保育系」は「4大」・「教育系」・「その他Ⅰ・Ⅱ」を上回る関心を示している。2年間という短期間に集中して保育の専門性を培う授業や現場実習での学びや体験というキャリアから、子どもの可愛らしさ、愛おしさ、面白さ、頼もしさ、そして成長への喜びなどを抱くようになり、それらがそのまま『子どもを持ちたい』という気持ちに直結していると推察する。子ども観については、4大生と短大生、保育科学生とそれ以外の学生の違いが顕著であることが示唆される結果であった。

質問13 質問12で『子どもを持ちたい』『子どもがいる』と答えた人へ、「子どもを持つとしたら何人を希望しますか。」と子どもを持ちたいと希望している回答者に、持ちたい子どもの希望人数について質問した。a～fの選択肢の中からひとつ選んで回答してもらった。(図11)

大学別区分と専門別区分を合わせた6区分の割合を見ると、全ての区分において『2人希望』が、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」の71.4%を最大に、「教育系」71.2%、「4大」67.2%、「短大」65.1%、「保育系」64.1%、「その他Ⅱ（生物・システム系）」の64.0%と続き、いずれも高い割合であることが分かった。2番目に高かったのは『3人希望』で、「保育系」の27.5%を筆頭に、「短大」25.3%、「4大」23.1%、「教育系」23.1%、「その他Ⅱ」22.7%であり、「その他Ⅰ」は14.3%で最も低い数値であった。その次は『1人希望』で、「その他Ⅰ」が14.3%、「その他Ⅱ」10.7%でやや高く、以降「4大」8.2%、「短大」7.3%、「教育系」「保育系」がともに5.8%と続く。『4人以上の希



(図11) 質問13 子どもを持つとしたら何人を希望するか



(図12) 理想のこどもの数と予定のこどもの数

(秋田県『秋田県こども計画(素案)』より引用)

望』は全ての区分において0%～2.7%とわずかだった。

なお、本学の過去の調査研究における類似質問に対して次のような結果が得られている。2016年(安藤ら)⁽⁶⁾の「子どもは何人ほしいか」には、『2人』に1・2年生224人の67.4%、『3人』は28.6%、『1人』は2.2%、2019年(藤原ら)⁽⁷⁾の「子どもを持つとしたら何人が理想か」には、『2人』に241人の68.1%、『3人』26.1%、『1人』3.4%の回答があり、今回の調査とほぼ同様な意識を持っていたことが確認できた。

ここまでの結果を、質問6の調査対象学生の兄弟姉妹数との相関性について見ることにする。

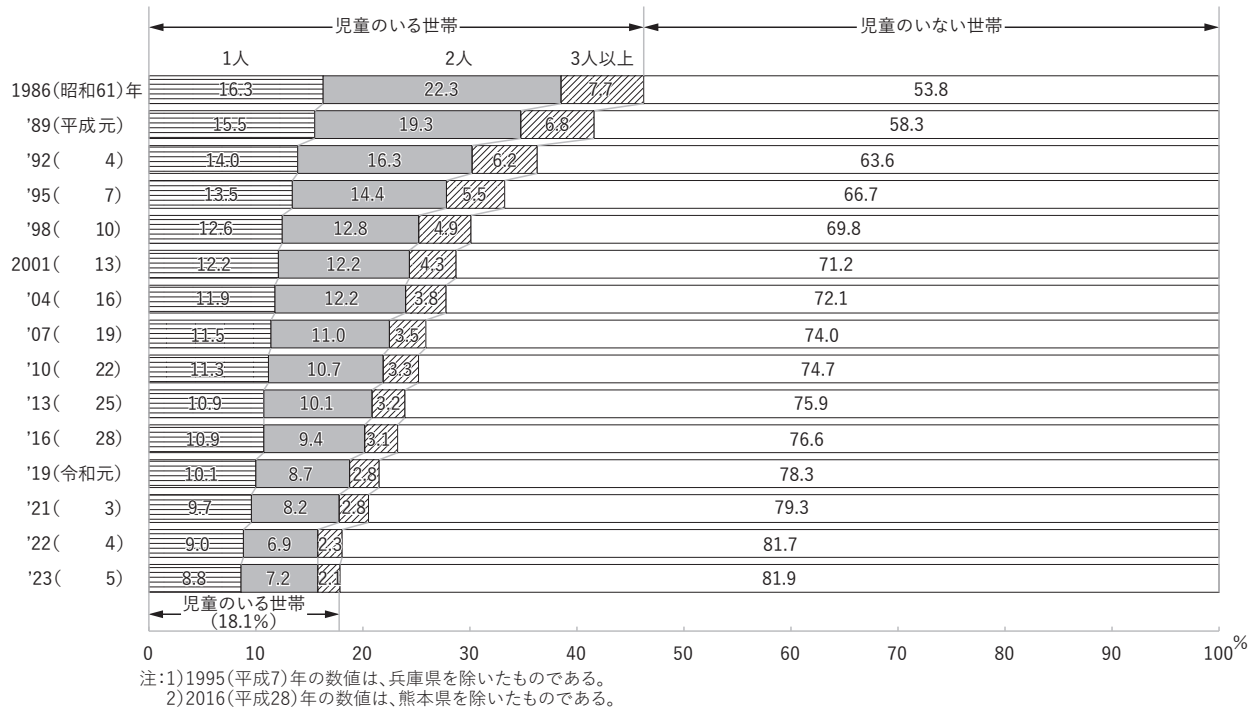
自分以外の兄弟姉妹数が0人～3人まで、つまり「一人っ子」から「4人兄弟姉妹」と回答した学生は、子どもの希望数を『2人』と答えた割合が最も高く、「一人っ子」の学生では61.0%、「2人兄弟姉妹」72.6%、「3人兄弟姉妹」60.7%、「4人兄弟姉妹」51.9%だった。「5人以上の兄弟姉妹」になると子どもの希望数『2人』の割合41.2%よりも、『3人』の割合が47.1%と上回っているのが特徴的である。いずれにせよ、多くの学生の子どもの希望数は『2人』であり、次いで『3人』を希望していることが分かった。また、「一人っ子」の学生は、子どもを持ちたい数で『1人』を希望している割合が17.1%と全体の中で最も高かった。これは自分が一人っ子だったことから、兄弟姉妹が欲しいと思うタイプがいる反面、兄弟姉妹と生活したことがないために兄弟姉妹が欲しいと思わないタイプもいるのではないかと推察する。また、「5人以上の兄弟姉妹」の学生の『1人』の割合が11.8%とやや高いが、これはいつも多くの兄弟姉妹といった密度の濃い自分の経験からそれを避けたいという思いがあるからではないかと推察する。

こうした学生の希望実態を、秋田県の「令和5年度子育て支援に関するアンケート調査」⁽⁸⁾結果と比較してみる。

(図12)によると、保護者に対するアンケート調査では、理想の子どもの数は、『3人』が46.9%と最も割合が高く、続いて『2人』が42.8%となっている。これに対して、予定の子どもの数は、『2人』が53.4%と最も割合が高く、次いで『3人』が26.2%、『1人』が12.8%であり、理想の子どもの数に比べると、『2人』と『3人』の順位が逆転し、『1人』の割合がより高くなっている。理想の子どもの人数が持てない理由としては、「子育てや教育にお金がかかりすぎる」が最多となっている。

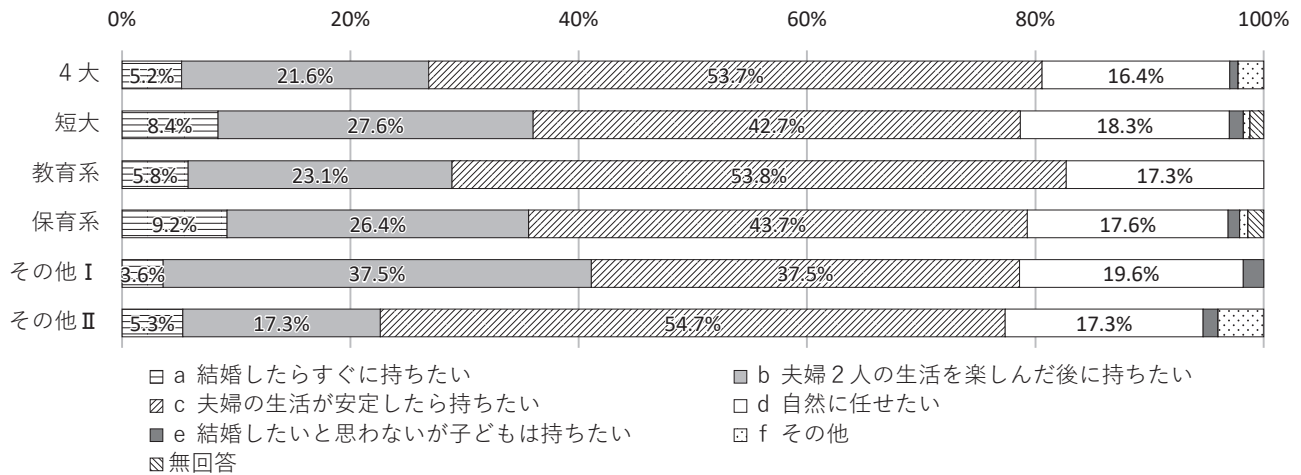
一方、「2023(令和5)年国民生活基礎調査の概況」⁽⁹⁾結果をみると、我が国の児童のいる世帯の実態は(図13)のように変化してきている。2023年に児童のいる世帯数は983万5000世帯で、それは全世帯の18.1%である。そのうち、児童が1人の世帯は478万2000世帯(全世帯の8.8%、児童のいる世帯の48.6%)で、児童が2人の世帯は390万2000世帯(全世帯の7.2%、児童のいる世帯の39.7%)、児童が3人以上の世帯は115万2000世帯(全世帯の2.1%、児童のいる世帯の11.7%)であった。1986(昭和61)年以降、2004(平成16)年までは、児童2人の世帯が児童1人の世帯数や割合よりも上回っていたが、2007(平成19)年以降は、児童1人世帯が児童2人世帯を数も割合も上回り続けているのが現状であり、今回の学生意識調査によって見えた子どもを持ちたい希望数と乖離して「少子化」が進んでいることが分かった。

質問13-2)質問12で『子どもを持ちたい』『子どもがいる』と答えた人への質問である。「子どもを持つタイミングはいつを考えていますか。」と子どもを持ちたいと希望している回答者に、子どもを持つタイミングについて質問した。a～fの選択肢の中からひとつ選んで回答してもらった。(図14)



（図13）児童の有（児童数）無の年次推移

（厚生労働省『2023年（令和5）国民生活基礎調査の概況』より引用）



（図14）質問 13-2 子どもを持つタイミングはいつを考えているか

大学別区分で比較すると、ともに『c 夫婦の生活が安定したら持ちたい』の割合が最も高く、「4大」53.7%と「短大」42.7%であった。次に割合が高かったのはともに『b 夫婦2人の生活を楽しんだ後に持ちたい』で、「4大」21.6%、「短大」27.6%であり、その次もともに『d 自然に任せたい』で、それぞれ16.4%と18.3%であった。『a 結婚したらすぐに持ちたい』については、「4大」5.2%で、「短大」8.4%であり、「短大」の方が若干高い割合を示している。

専門別区分でみると、4区分とも『c 夫婦の生活が安定したら持ちたい』の割合が最も高く、「その他Ⅱ（生物・システム系）」が54.7%、「教育系」53.8%、「保育系」43.7%、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」は37.5%であった。次に『b 夫婦2人の生活を楽しんだ後に持ちたい』の割合が高く、「その他Ⅰ」が37.5%、「保育系」26.4%、「教育系」23.1%、「その他Ⅱ」は17.3%だった。その次は『d 自然に任せたい』で、「その他Ⅰ」が19.6%、「保育系」17.6%、「教育系」と「その他Ⅱ」がともに

17.3%であった。『a 結婚したらすぐに持ちたい』については、「保育系」が9.2%で他に比べると割合が高く、「教育系」が5.8%、「その他Ⅱ」が5.3%、「その他Ⅰ」は3.6%であった。

6区分全体をみると、共通して最も割合が高かった『c 夫婦の生活が安定してから持ちたい』については、「その他Ⅱ（生物・システム系）」の割合が54.7%で最も高く、最も低い「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」は37.5%で、17.2ポイントの差があった。次に割合が高かった『b 夫婦2人の生活を楽しんだ後に持ちたい』については、「その他Ⅰ」の割合が37.5%で最も高く、最も低い「その他Ⅱ」は17.3%であり、20.2ポイントの差があった。これらから、子どもを持つまでは夫婦の絆をしっかりとものにしようという考えを抱いているものと推察される。その次は『d 自然に任せたい』であるが、その割合は16%代～19%代であり類似していた。『a 結婚したらすぐに持ちたい』の割合は、どの区分も10%未満だったが、その中であって、「保育系」が9.2%、「短大」が8.4%と比較的高く、特にこの両区分には早いうちに子どもを持つことに前向きな学生がいることを示していると言える。これは質問8で、『早く結婚したい』への回答が、「保育系」23.4%、「短大」21.3%であり、他と比較しても高い割合を示していたこととも関連していると思われる。さらに質問9で、希望する結婚年齢を聞いたが、「保育系」と「短大」は、ともに25歳までに結婚を希望している割合が、それぞれ74.4%、72.0%であり、他区分に比べて16.4～33.7ポイントも高く早めに結婚したいと回答していることとも関連していると思われる。

一方、『e 結婚したいと思わないが、子どもは持ちたい』に回答した割合は0～2%と低かったが、わずかながら回答者はいた。実数としては合計5人であるが、若い学生にも様々な考えがあることが分かった。

質問14 質問12で「子どもを持ちたくない」と答えた人への質問である。「子どもを持ちたくない理由について質問事項別に当てはまるものをひとつ選んでください。」と子どもを持ちたくないと考えている回答者に、子どもを持ちたくない理由について質問した。a～hの質問事項別に、『とても当てはまる』『やや当てはまる』『あまり当てはまらない』『全く当てはまらない』に○をひとつ記入してくださいという4件法で回答してもらった。（表4）

質問12で「子どもを持ちたくない」と思っている学生は図10のとおり大学別では、「4大」で59人30.6%、「短大」は65人15.9%だった。専門別区分では割合が高い順に、「その他Ⅱ（生物・システム系）」が37人33.0%、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」26人31.7%、「教育系」22人29.7%、「保育系」39人11.7%だった。「短大」と「保育系」を除くと約3割の学生が子どもを持ちたくないと思ってい

ることが分かった。一方で、「短大」と「保育系」は1割台と低く、その差が顕著であった。

子どもを持ちたくない理由の質問事項8項目の中で、6区分の全てで『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が70%代～90%代の高い割合を示したのは3項目だった。それは、割合合計が高い順に、「c 子どもを育てることが不安だ（自信が持てない）から」が「4大」84.7%、「短大」81.5%、「教育系」90.9%、「保育系」74.4%、「その他Ⅰ」92.3%、「その他Ⅱ」81.1%。「d 子育てにはお金がかかるなど経済的負担が大きいから」が「4大」86.4%、「短大」75.4%、「教育系」90.9%、「保育系」74.3%、「その他Ⅰ」76.9%、「その他Ⅱ」83.8%。「b 子どもを育てるという将来展望が描けないから」が「4大」81.3%、「短大」70.8%、「教育系」81.9%、「保育系」58.9%、「その他Ⅰ」88.4%、「その他Ⅱ」81.1%だった。このうち、「c」と「b」は漠然とした個人の不安感であり、「d」は、現在から将来にかけて見込まれる日本の社会経済状況への不安感からの判断ではないかと推察する。

このほかの項目では、「a 夫婦2人の生活を優先し（楽しみ）たいから」については、「短大」58.4%、「保育系」56.4%、「その他Ⅰ」61.5%であり、「4大」「教育系」「その他Ⅱ」は『全く当てはまらない』『あまり当てはまらない』の割合合計がそれぞれ59.3%、63.7%、56.7%を示している。より現実的な個人の希望の反映であり、いずれも女子が大半を占める区分で高い割合を示している。また、「e 出産は痛いとか苦しいとかなどの話を聞いたから」については、『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が「短大」50.8%、「その他Ⅰ」57.7%、「その他Ⅱ」51.3%であったが、「4大」「教育系」「保育系」では、『全く当てはまらない』『あまり当てはまらない』の割合合計はそれぞれ52.5%、59.1%、51.3%を示していた。いずれの割合も50%代であることから、女性は少なくとも出産に対する漠然とした不安を誰しも抱いていることを男性をはじめ周囲は認識する必要があると考える。

一方、6区分の中、「その他Ⅰ」以外の5区分で共通している質問事項の3項目が『全く当てはまらない』『あまり当てはまらない』の割合合計で50%代～90%代を示している。「f 日本の将来に期待が持てず生まれてくる子どもがかわいそうだから」が「4大」54.2%、「短大」61.5%、「教育系」50.0%、「保育系」71.8%、「その他Ⅱ」56.7%。「g 健康上の理由から」が「4大」89.8%、「短大」78.4%、「教育系」95.4%、「保育系」84.6%、「その他Ⅱ」86.5%。「h 子どもが好きではないから」が「4大」66.1%、「短大」69.2%、「教育系」81.8%、「保育系」87.1%、「その他Ⅱ」56.7%だった。「f」は、日本社会の将来に対する漠然とした不安があまりないことを示しているのではないかと。「g」は、現在の自分の健康状態から判断したものと思われる。「h」は、56.7%～87.1%が『当

（表4） 質問14 子どもを持ちたくない理由

質問事項	選択肢	大学別区分		専門別区分			
		4大	短大	教育系	保育系	その他Ⅰ	その他Ⅱ
a 夫婦2人の生活を優先し（楽しみ）たいから	1. とても当てはまる	10.2%	16.9%	9.1%	15.4%	19.2%	10.8%
	2. やや当てはまる	30.5%	41.5%	27.3%	41.0%	42.3%	32.4%
	3. あまり当てはまらない	18.6%	23.1%	18.2%	25.6%	19.2%	18.9%
	4. 全く当てはまらない	40.7%	13.8%	45.5%	15.4%	11.5%	37.8%
	無回答	0.0%	4.6%	0.0%	2.6%	7.7%	0.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
b 子どもを育てるという将来展望が描けないから	1. とても当てはまる	54.2%	46.2%	45.5%	25.6%	76.9%	59.5%
	2. やや当てはまる	27.1%	24.6%	36.4%	33.3%	11.5%	21.6%
	3. あまり当てはまらない	8.5%	12.3%	0.0%	15.4%	7.7%	13.5%
	4. 全く当てはまらない	10.2%	13.8%	18.2%	23.1%	0.0%	5.4%
	無回答	0.0%	3.1%	0.0%	2.6%	3.8%	0.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
c 子どもを育てることが不安だ（自信が持てない）から	1. とても当てはまる	55.9%	53.8%	50.0%	38.5%	76.9%	59.5%
	2. やや当てはまる	28.8%	27.7%	40.9%	35.9%	15.4%	21.6%
	3. あまり当てはまらない	6.8%	6.2%	0.0%	5.1%	7.7%	10.8%
	4. 全く当てはまらない	8.5%	10.8%	9.1%	17.9%	0.0%	8.1%
	無回答	0.0%	1.5%	0.0%	2.6%	0.0%	0.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
d 子育てにはお金がかかるなど経済的負担が大きいから	1. とても当てはまる	64.4%	52.3%	59.1%	48.7%	57.7%	67.6%
	2. やや当てはまる	22.0%	23.1%	31.8%	25.6%	19.2%	16.2%
	3. あまり当てはまらない	3.4%	13.8%	4.5%	12.8%	15.4%	2.7%
	4. 全く当てはまらない	10.2%	7.7%	4.5%	10.3%	3.8%	13.5%
	無回答	0.0%	3.1%	0.0%	2.6%	3.8%	0.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
e 出産は痛いとか苦しいとかなどの話を聞いたから	1. とても当てはまる	23.7%	26.2%	22.7%	23.1%	30.8%	24.3%
	2. やや当てはまる	23.7%	24.6%	18.2%	23.1%	26.9%	27.0%
	3. あまり当てはまらない	20.3%	21.5%	27.3%	20.5%	23.1%	16.2%
	4. 全く当てはまらない	32.2%	23.1%	31.8%	30.8%	11.5%	32.4%
	無回答	0.0%	4.6%	0.0%	2.6%	7.7%	0.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
f 日本の将来に期待が持てず生まれてくる子どもがかわいそうだから	1. とても当てはまる	27.1%	24.6%	22.7%	10.3%	46.2%	29.7%
	2. やや当てはまる	18.6%	12.3%	27.3%	17.9%	3.8%	13.5%
	3. あまり当てはまらない	20.3%	36.9%	13.6%	38.5%	34.6%	24.3%
	4. 全く当てはまらない	33.9%	24.6%	36.4%	33.3%	11.5%	32.4%
	無回答	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%	3.8%	0.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
g 健康上の理由から	1. とても当てはまる	5.1%	9.2%	0.0%	5.1%	15.4%	8.1%
	2. やや当てはまる	5.1%	9.2%	4.5%	7.7%	11.5%	5.4%
	3. あまり当てはまらない	27.1%	33.8%	22.7%	33.3%	34.6%	29.7%
	4. 全く当てはまらない	62.7%	44.6%	72.7%	51.3%	34.6%	56.8%
	無回答	0.0%	3.1%	0.0%	2.6%	3.8%	0.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
h 子どもが好きではないから	1. とても当てはまる	10.2%	7.7%	0.0%	0.0%	19.2%	16.2%
	2. やや当てはまる	23.7%	18.5%	18.2%	10.3%	30.8%	27.0%
	3. あまり当てはまらない	18.6%	24.6%	13.6%	25.6%	23.1%	21.6%
	4. 全く当てはまらない	47.5%	44.6%	68.2%	61.5%	19.2%	35.1%
	無回答	0.0%	4.6%	0.0%	2.6%	7.7%	0.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

てはまらない』と回答している。「教育系」と「保育系」は8割以上であるが、「4大」「短大」「その他Ⅰ」は60%代以下であり、専門性の違いがあらわれているものと推察する。

ところが、「その他Ⅰ」だけは、「g」のみ『全く当てはまらない』『あまり当てはまらない』の割合合計で69.2%を示しているが、それ以外は全て50%以上が『とても当てはまる』『やや当てはまる』になっている。また、「h」については、唯一「その他Ⅰ」だけは『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計で50.0%を示しており、『全く当てはまらない』『あまり当てはまらない』の割合合計42.3%を上回っている。「f」についても「教育系」とともに『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計で50.0%を示していて他の区分と違いがあった。

ここまでのことから、大半の学生が子どもを持ちたいと思っていることが分かった。さらに、我が国の社会経済状況が今後どのように展開していくか予測はできないが、少なくとも現状維持、あるいは好転すれば、今後学生が、若いうちに子どものことや保育のことについての理解を深めるための経験を積むことによって、今の子ども観から否定的な要素が減っていくのではないかと考える。

5 子育て観について

質問15) 質問12で「子どもを持ちたい」「子どもがいる」と答えた人への質問である。「自分の子どもを育てることについてどのように思っていますか。」と子どもを持ちたいと希望している回答者に、自分の子どもを育てることについて、どのような考えを持っているかについて質問した。a～hの質問事項別に、『とても当てはまる』『やや当てはまる』『あまり当てはまらない』『全く当てはまらない』に○をひとつ記入してくださいという4件法で回答してもらった。(表5)

はじめに子育てに対してポジティブな印象を持つ質問事項5項目について割合合計の高い順に見ることにする。

「a 夫婦で子どもと一緒に温かな家庭や生活を築きたいから」については、「4大」99.2%、「短大」95.1%、「教育系」98.1%、「保育系」94.9%、「その他Ⅰ(福祉・食物・キャリア教養系)」96.5%、「その他Ⅱ(生物・システ系)」100%と6区分の全てにおいて高い割合で『とても当てはまる』『やや当てはまる』と回答している。しかも「保育系」を除くと、残りの5区分は全て最も高い割合を示している。これは、将来結婚して子どもを持ちたい学生が、理想的な親子関係や家庭の在り方を描いていることの表れと推察できる。

「e 子どもと触れ合うと可愛いくて幸せな気持ちになる(癒やされる)から」についても、『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が非常に高い割合を示した。それぞれ高い順に、「教育系」98.1%、「保育系」96.3%、「短

大」94.8%、「4大」94.0%、「その他Ⅱ」90.7%、「その他Ⅰ」87.5%であった。これまでの何らかの理由で子どもと関わった楽しい経験をしたり、子どもの成長を実感できたりしたことなどからこうした思いが多くの学生にあるということではないかと考える。

「d 自分の子どもの世話をするのが楽しみだから」についても、5区分で『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が高い割合を示している。高い順に、「教育系」94.3%、「保育系」94.3%、「短大」93.3%、「その他Ⅰ」89.2%、「4大」87.3%であるが、「その他Ⅱ」は81.4%でやや低い割合だった。特に「教育系」、「保育系」、「短大」がいずれも90%以上という高い割合を示していることは、質問12で子どもを持ちたい割合が6区分の中でそれぞれ70.3%、88.3%、84.1%と他に比べていずれも高い割合だったことと関連していると思われる。また、「教育系」や「保育系」、そして保育系学生が81.7%を占めている「短大」の学生たちは、子どもに対する専門的知識を持ち、一緒に遊ぶ機会が多いことなどから他学生よりもこうした感覚を持つのではないかと考える。

「c 子育てしながら自分も人間として成長したいから」についても、5区分で『とても当てはまる』『やや当てはまる』が高い割合を示している。割合の高い順に、「教育系」90.4%、「その他Ⅰ」89.3%、「4大」86.6%、「短大」86.3%、「保育系」85.8%、「その他Ⅱ」84.0%だった。多くの学生が子育てをすることにより自分の成長にもつながるという意識を持っていることが分かった。

「b 子育ては大変なところもあるがやりがいがあるから」については、6区分の全てにおいて高い割合を示している。割合の高い順に、「保育系」92.8%、「短大」92.1%、「教育系」90.4%、「その他Ⅰ」87.5%、「4大」83.6%、「その他Ⅱ」78.7%だった。多くの学生が将来自分の子どもを試行錯誤しながら育てていくことで、その発達や成長を見届けられることに親としてのやりがいを抱えていることが分かった。

なお、本学の過去の調査においてこれに類似した質問をしている。2015年調査(安藤ら)⁽¹⁰⁾の「子育てにどのようなイメージを持っているか」について(複数回答可)の質問である。割合が高かった3つは、「伴侶と子どもと一緒に温かな家庭を築きたい」のべ151人(33.2%)、「子育てそのものが大変なこともあるが味わい深いものであり、やり甲斐があることだ」のべ150人(33.0%)、「子育てをしながら自分も成長していきたい」のべ118人(25.9%)であり、本調査とほぼ同様な結果を得られていたことが確認できた。

次に質問事項のうち子どもに対してネガティブな印象を持つ3項目について見ることにする。

「f 子どもの相手をするのは疲労がたまると思うから」については、『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割

（表5） 質問15 自分の子どもを育てることについてどう思っているか

質問事項	選択肢	大学別区分		専門別区分			
		4大	短大	教育系	保育系	その他Ⅰ	その他Ⅱ
a 夫婦で子どもと一緒に 温かな家庭や生活を築 きたいから	1. とても当てはまる	71.6%	75.9%	80.8%	77.6%	66.1%	65.3%
	2. やや当てはまる	27.6%	19.2%	17.3%	17.3%	30.4%	34.7%
	3. あまり当てはまらない	0.7%	1.7%	1.9%	1.7%	1.8%	0.0%
	4. 全く当てはまらない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	無回答	0.0%	3.2%	0.0%	3.4%	1.8%	0.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
b 子育ては大変なところも あるがやりがいがあるか ら	1. とても当てはまる	47.0%	59.0%	65.4%	62.0%	41.1%	34.7%
	2. やや当てはまる	36.6%	33.1%	25.0%	30.8%	46.4%	44.0%
	3. あまり当てはまらない	14.2%	3.5%	5.8%	3.1%	7.1%	20.0%
	4. 全く当てはまらない	2.2%	0.9%	3.8%	0.7%	1.8%	1.3%
	無回答	0.0%	3.5%	0.0%	3.4%	3.6%	0.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
c 子育てしながら自分も 人間として成長したいか ら	1. とても当てはまる	47.0%	52.6%	59.6%	55.3%	41.1%	36.0%
	2. やや当てはまる	39.6%	33.7%	30.8%	30.5%	48.2%	48.0%
	3. あまり当てはまらない	8.2%	9.0%	5.8%	9.2%	8.9%	9.3%
	4. 全く当てはまらない	4.8%	1.7%	3.8%	1.7%	1.8%	6.7%
	無回答	0.0%	2.9%	0.0%	3.4%	0.0%	0.0%
	計	99.6%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
d 自分の子どもの世話を するのが楽しみだから	1. とても当てはまる	55.2%	65.7%	80.8%	70.2%	44.6%	34.7%
	2. やや当てはまる	32.1%	27.6%	13.5%	24.1%	44.6%	46.7%
	3. あまり当てはまらない	9.0%	2.0%	5.8%	1.7%	3.6%	12.0%
	4. 全く当てはまらない	3.7%	1.5%	0.0%	0.7%	5.4%	6.7%
	無回答	0.0%	3.2%	0.0%	3.4%	1.8%	0.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
e 子どもと触れ合うと可愛 くて幸せな気持ちになる （癒やされる）から	1. とても当てはまる	66.4%	76.2%	84.6%	81.7%	50.0%	50.7%
	2. やや当てはまる	27.6%	18.6%	13.5%	14.6%	37.5%	40.0%
	3. あまり当てはまらない	5.2%	1.5%	0.0%	0.3%	7.1%	9.3%
	4. 全く当てはまらない	0.7%	0.6%	1.9%	0.0%	3.6%	0.0%
	無回答	0.0%	3.2%	0.0%	3.4%	1.8%	0.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
f 子どもの相手をするこ とは疲労がたまると思うか ら	1. とても当てはまる	30.6%	16.9%	30.8%	15.9%	26.8%	28.0%
	2. やや当てはまる	43.3%	43.6%	40.4%	41.7%	53.6%	45.3%
	3. あまり当てはまらない	18.7%	29.9%	25.0%	31.5%	17.9%	16.0%
	4. 全く当てはまらない	7.5%	5.8%	3.8%	6.8%	0.0%	10.7%
	無回答	0.0%	3.8%	0.0%	4.1%	1.8%	0.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
g 子どもがいると自分のし たいことができなくな ると思う	1. とても当てはまる	26.1%	16.3%	25.0%	15.9%	19.6%	26.7%
	2. やや当てはまる	44.0%	46.5%	40.4%	45.8%	51.8%	45.3%
	3. あまり当てはまらない	25.4%	25.9%	30.8%	25.8%	25.0%	22.7%
	4. 全く当てはまらない	4.5%	7.6%	3.8%	8.5%	1.8%	5.3%
	無回答	0.0%	3.8%	0.0%	4.1%	1.8%	0.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
h 親としてちゃんと子ども を育てられるか不安だ （自信がない）から	1. とても当てはまる	35.1%	20.9%	32.7%	18.6%	39.3%	33.3%
	2. やや当てはまる	32.8%	37.8%	32.7%	37.3%	39.3%	33.3%
	3. あまり当てはまらない	26.9%	32.8%	32.7%	34.6%	19.6%	25.3%
	4. 全く当てはまらない	5.2%	4.9%	1.9%	5.8%	0.0%	8.0%
	無回答	0.0%	3.5%	0.0%	3.7%	1.8%	0.0%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

合合計が6区分の全てにおいて57.6%以上の割合を占めていた。割合が高い順に、「その他Ⅰ」80.4%、「4大」73.9%、「その他Ⅱ」73.3%、「教育系」71.2%といずれも70%以上と高かった。「短大」は60.5%、「保育系」は57.6%で若干低く、割合が最も高い「その他Ⅰ」との差は22.8ポイントであった。短大生の81.7%を占める「保育系」の学生たちは、手がかかる乳幼児の特性等を学び、関わり方の技能も習得し、その上で現場実習などで子どもたちと触れ合う機会が多く、遊び慣れていて、子どもの気持ちのある程度理解できるようになってきている。そのため、様々な場面での扱いや対応力が身に付いていることなどが、こうした違いに現れているのではないだろうか。

「g 子どもがいると自分のしたいことができなくなると思うから」については、『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が高い順に、「その他Ⅱ」は72.0%、「その他Ⅰ」71.4%、「4大」70.1%といずれも70%以上と高かったが、「教育系」は65.4%、「短大」62.8%、「保育系」61.7%であり、ここでは「短大」・「保育系」に加えて「教育系」も若干低い割合になっている。後者の3区分は、子どもの特性等を専門的に学び認識している分、そうした自分のやりたいことが少し阻害されてしまうことはやむを得ないことと考えている学生がいるのではないかと推察した。

この「f」と「g」の回答について、後述の質問19「主にどの年代の子どもと関わってきたか」(図17)の回答との関連性を見ることにする。「4大」では児童・生徒・幼児との関わり、「短大」では幼児・児童・乳児との関わりが多くなっている。「教育系」は児童・生徒を中心に、「保育系」は、幼児・乳児・児童を中心に関わっている。「その他Ⅰ」は児童・幼児・生徒と、「その他Ⅱ」は、児童・生徒との関わりを中心に行っていることが分かった。これは、教職課程や保育士養成課程における実習による影響が大きく関わっていると予測できることから、限られた学生しか乳児や幼児と関わっていないということが分かった。乳幼児期はなかなか言うことを聞かなかったり、同じことを何度も要求したりするなど手がかかる時期である。こうした時期の子どもの特性を認識して接することができるのは、「保育系」や「短大」、そして「教育系」の一部の学生であることと関連していると推察する。

「h 親としてちゃんと子どもを育てられるか不安だ(自信がない)から」について、『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計の高い順に見てみる。同時に、ここでは、「子どもを持ちたい」「子どもがいる」と回答したうちの何人が「不安だ、自信が持てない」と回答しているかも見る。「その他Ⅰ」では56人中44人の78.6%、「4大」は134人中91人の67.9%、「その他Ⅱ」は75人中50人の66.6%、「教育系」は52人中34人の65.4%、「短大」は344人中202人の58.7%、「保育系」は295人中165人の55.9%で

あり、「短大」「保育系」の割合の低さが他の区分との違いを明確にしている。前述したように、手がかかる乳幼児についての学びと接触体験が多いことから、「保育系」や「短大」の学生は子どもを育てることについて他の4区分の学生よりも自信を持っていると言えるのではないだろうか。

しかし、子どもについて専門的に学び、実習等で子どもと接する機会が一般学生に比べると多いと思われる「保育系」では5割以上、「教育系」の約7割の学生が、「子育ては不安だ、自信がない」と回答していることは意外だった。これはいくら子どもについていろいろ学び体験していても、いざ自分が育てるということになると不安があるということであるとするならば、子どもについて学ぶ機会が少ない一般学生の不安は相当大きいものになるのではないかと考える。

結局、子どもを持ちたいと考えている多くの学生は、子育ての様々な大変さを覚悟しながらも、自分たち夫婦の理想とする親子像や家庭像を描きながら、自分の子どもをしっかりと育てていきたいと考えていることが分かった。そして、調査結果から見えてきたこととしては、保育系学生や教育系学生が子育てにおいても前向きな考え方を持っている、あるいは自信すら持っているということである。

しかし、調査に回答した学生602人中で「子どもを持ちたい」「子どもがいる」と回答した478人のうち、293人(61.3%)の学生が子育てに対して自信がないとか不安だと答えていることに留意する必要がある。

質問15-2) 質問15のa～hの質問事項8項目のうち、「h 親としてちゃんと子どもを育てられるか不安である(自信がない)」について、『とても当てはまる』『やや当てはまる』と回答した人に対して、「子育てのどのようなことに不安を感じますか。」と子どもを持ちたいと希望している者のうち、子育てに不安を持っている回答者に、どのようなことに不安を感じているかについて質問し、自由記述での回答を求めた。(表6)

まず、大学別区分で比較してみる。「4大」での記述回答者は不安と回答した91人中76人、「短大」では202人中196人であり、「4大」「短大」ともに上位3つまでは同じような理由であった。最も割合が高かった回答「子どもをしっかりと育てられるか、子育てできる自信がない」については、「4大」「短大」の回答割合はそれぞれ25.0%、26.0%であり、記述回答学生のほぼ4分の1がこうした不安を抱えていることが分かった。次は「経済的にやっつけられるか」であり、それぞれ23.7%、21.9%であった。3番目は、「子育てが仕事と両立できるか、しっかり家事ができるか」で、それぞれ10.5%、9.7%であった。これらの回答以外は、両区分ともに10%未満と割合的には低くなる。4番目の「子どもの育て方が分からない、何をしたらよいかわからない」については、「4大」7.9%、「短大」7.7%

（表6）質問15－2 子育てにどのような不安を感じているか（自由記述）

回答（自由記述）	大学別区分		専門別区分			
	4大	短大	教育系	保育系	その他Ⅰ	その他Ⅱ
・子どもをしっかり育てられるか ・子育てできる自信がない ・経験がなくても育てられるか	25.0%	26.0%	24.2%	24.4%	32.4%	27.0%
・経済的にやっていけるか	23.7%	21.9%	18.2%	22.0%	23.5%	27.0%
・子育てが仕事と両立ができるか ・しっかり家事ができるか ・同時に自分のこともできるか	10.5%	9.7%	12.1%	10.7%	5.9%	8.1%
・子どもの育て方が分からない ・何をしたらよいか分からない ・分からないことが多い	7.9%	7.7%	9.1%	7.1%	11.8%	5.4%
・夫婦の子育て分担の度合い ・夫婦の一方に負担が偏らないか ・相手を嫌いになってしまわないか	7.9%	1.5%	12.1%	1.2%	2.9%	5.4%
・ストレスがたまるとはならないか ・疲れや睡眠不足になるのでは ・イライラが多くなりそうだ	3.9%	6.1%	6.1%	6.5%	2.9%	2.7%
・自分はいい親になれるか ・親の責任が大きい ・年齢を重ねて乗り越えられるか	3.9%	4.6%	3.0%	4.2%	5.9%	5.4%
・子どもの健康（けがや病気） ・発達や障害について ・危険な目にあわないか	2.6%	6.6%	0.0%	7.1%	2.9%	5.4%
・休みが取れるか ・時間的な余裕が持てるか ・心の余裕を保てるか	6.6%	1.0%	9.1%	1.2%	2.9%	2.7%
・漠然とした不安 ・間違った対応で将来に悪影響を与えないか	2.6%	6.6%	3.0%	7.7%	0.0%	2.7%
・自分の言動（怒号等）が子どもに トラウマを与えてしまわないか ・価値観を押しつけたりしないか	1.3%	3.6%	0.0%	2.4%	8.8%	2.7%
・子どもの成長や性格 ・子どもの食について	2.6%	2.6%	0.0%	3.0%	0.0%	5.4%
・相談できる人がいるか ・頼りになる人がそばにいるか	1.3%	2.0%	3.0%	2.4%	0.0%	0.0%

である。「4大」の理由の4番目（7.9%）にはもう一つ「夫婦の子育て分担の度合い、夫婦の一方に負担が偏らないか」もある。「短大」で5番目（6.6%）になっている理由には2つある。「子どもの健康（けがや病気）、発達や障害」、「漠然とした不安、間違った対応で将来に悪影響を与えないか」であり、子どものことに対して自分の関わりも含めて様々な理由から不安感を抱いていることが分かった。

次に専門別区分で見ることにする。質問15で、「h 親としてちゃんと子どもを育てられるか不安だ（自信がない）から」について『とても当てはまる』『やや当てはまる』と回答した学生のうち何人が自由記述しているかを見る

と、「教育系」34人中33人、「保育系」は165人中165人、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」は44人中34人、「その他Ⅱ（生物・システム系）」は50人中37人であった。4区分でともに割合が高い理由の上位2つは「4大」、「短大」と同じである。3番目以下についてはまちまちなので、それぞれ見ることにする。「教育系」の3番目は、「子育てが仕事と両立できるか、しっかり家事ができるか」と「夫婦の子育て分担の度合い、夫婦の一方に負担が偏らないか」で12.1%、5番目は「子どもの育て方が分からない、何をしたらよいか分からない」と「休みが取れるか、時間的な余裕が持てるか」で9.1%だった。「保育系」の3番目も「子

育てが仕事と両立できるか、しっかり家事ができるか」が10.7%で「教育系」に次いで高い割合だった。「保育系」の4番目は「漠然とした不安、間違った対応で将来に悪影響を与えないか」で7.7%、5番目は「子どもの育て方が分からない、何をしたらよいかわからない」と「子どもの健康（けがや病気）、発達や障害」で7.1%だった。「その他Ⅰ」の3番目は「子どもの育て方が分からない、何をしたらよいかわからない」で11.8%、4番目は他の区分ではほとんどわずかだった「自分の言動（怒号等）が子どもにトラウマを与えてしまわないか」で8.8%だった。5番目は「子育てが仕事と両立できるか、しっかり家事ができるか」と「自分はいい親になれるか、親の責任が大きい」で5.9%だった。「その他Ⅱ」の3番目は「子育てが仕事と両立できるか、しっかり家事ができるか」で8.1%、4番目は5つの理由が同じ割合で、「子どもの育て方が分からない、何をしたらよいかわからない」、「子どもの健康（けがや病気）、発達や障害」、「子どもの成長や性格、子どもの食について」、「自分はいい親になれるか、親の責任が大きい」、「夫婦の子育て分担の度合い、夫婦の一方に負担が偏らないか」で5.4%だった。

理由別に見ると、学生の不安の主たるものとしては「子どもをしっかりと育てられるか、子育てできる自信がない」と「経済的にやっていけるか」であり、6区分の両者の割合合計が42.4%～55.9%を占めるほど高い割合だった。子どもについて専門的に学んでいてもいなくても、やはり子育てに不安を抱いてしまう学生が多いということが分かった。また、バブル期までは世界の経済大国と言われていた我が国ではあるが、その後景気の減速によりGDPが徐々に低下し、他国との競争力も衰えてしまった。現在も円安や物価高が国民を苦しめているし、金融、経済、雇用などが安定せず、年金等の社会保障制度なども先行きが不安視されている。こうした社会状況が学生には将来の不安となって影響しているのではないかと考えられる。

「その他Ⅰ」を除く全区分で3番目に割合が高かった、「子育てが仕事と両立できるか、しっかり家事ができるか」は、「教育系」12.1%、「保育系」10.7%、「4大」10.5%、「短大」9.7%、「その他Ⅱ」8.1%、「その他Ⅰ」5.9%であった。残業が多かったり、育児休暇や有給休暇が取りにくかったりするとされる我が国の労働環境が反映しているのではないかと考えられる。特に、「教育系」と「保育系」の割合が他区分より若干高い10%以上であることは、将来学校・園の現場に出た時に多忙化が問題視されている現実の影響を受けるのではないかと懸念していることが推察できる。加えて「教育系」は、5番目に「休みがとれるか、時間的な余裕が持てるか」で9.1%を示していることとも関連しているのではないかと考える。

それ以外の理由として、「子どもの育て方が分からない、何をしたらよいかわからない」については、「その他Ⅰ」

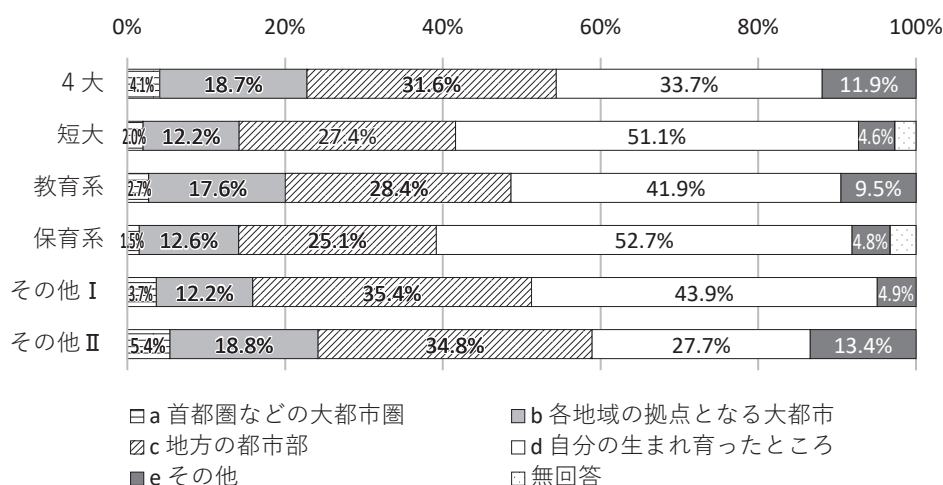
が11.8%と高い割合を示している。これは、「子育てが不安（自信がない）」の理由とも関わるところであるが、長く少子化が続いている我が国では、学生が成長してくる過程において日常的に身近に赤ちゃんを抱っこしたり、乳幼児の世話をしたりするという体験や、そういう場面を見たりする機会もほとんどないことがこうした思いを抱かせているのではないかと考える。

「夫婦の子育て分担の度合い、夫婦の一方に負担が偏らないか」は、「教育系」が12.1%と他区分に比べると高い割合を示している。現在多くの家庭では共働きであるが、この傾向は将来的にも変わらないと考えられる。こうした労働や家庭の環境にあって、夫婦が家事や子育てにおいて役割分担をしてやっていく必要があると考えられるが、現状では家事や子育ての負担が母親に偏ってしまう傾向が見受けられることから、それへの懸念を感じていることの表れではないかと考える。また、「教育系」が12.1%と高い割合を示しているのは、今日、社会問題になっている教員の多忙化が影響しているのではないだろうか。また同じく関連していると考えられるのが、「教育系」では「休みがとれるか、時間的な余裕が持てるか」が9.1%を示しており、専門別の他の3区分を6.2～7.9ポイントも上回っていることである。

他にも「ストレスがたまるといけない、イライラが多くなりそうだ」では、「短大」「教育系」「保育系」の割合がそれぞれ、6.1%、6.1%、6.5%と他よりやや高かった。また、「子どもの健康（けがや病気）、発達や障害」では、「短大」6.6%、「保育系」7.1%と他よりもやや割合が高く、「漠然とした不安、間違った対応で将来に悪影響を与えないか」でも、「短大」6.6%、「保育系」7.7%と他よりも割合が高かった。自分自身や子どもの身体的・精神的なことに対する様々な不安感を抱いていることの表れと推察する。また、「自分はいい親になれるか、親の責任が大きい」では、「その他Ⅰ」が5.9%、「その他Ⅱ」は5.4%と他よりも若干高かった。「自分の言動（怒号等）が子どもにトラウマを与えてしまわないか」については、「その他Ⅰ」が8.8%、「子どもの成長や性格、子どもの食について」は「その他Ⅱ」が5.4%であるなど、子育てについてはまだ実感がないだけに様々なことが想定されているものと推察される。

いずれにしても、自分が親になることを想像しての不安事や自信のなさを、学生全体602人のうちで、「子どもを持ちたい」「子どもがいる」と回答した478人中の293人（61.3%）が抱えていることを、国や地方の行政機関や各業界を中心に社会的な認識とするとともに、結婚前の学生を含めた若者世代に何らかの対策を講じていかなければならないのではないかと考える。

質問16)「自分の子どもを育てるとしたらどのような地域で子育てしたいと思いますか。」と子育てをするとしたら



（図15）質問16 子育てしたい地域

どのような地域で育てたいと考えているか質問した。a～eの選択肢の中からひとつ選んで回答してもらった。（図15）

大学別区分で見ると、割合の高い順は「4大」も「短大」も同じであった。「d 自分の生まれ育ったところ」の割合がそれぞれ33.7%、51.1%と最も高かったが、「短大」は5割を超えている。2番目に高かったのは、「c 地方の都市部（県庁所在地やそれに次ぐような県内の都市）」であり、それぞれ31.6%、27.4%だった。「4大」は「d」と「c」の割合が近かったのに比べると、「短大」は「d」が多く、自分の生まれ育った場所への志向が突出している。3番目は「b 各地域の拠点となる大都市」となっている。ここでいう大都市とは、札幌市、仙台市、新潟市などの政令指定都市のことであるが、「4大」が18.7%、「短大」は12.2%であった。4番目は「e その他」であり、「4大」は11.9%もあるが、「短大」は4.6%しかなかった。また5番目の「a 首都圏などの大都市圏」もともに5%未満と低かった。4大生の志向の割合が、自分が生まれ育ったところから遠ざかるにつれて、33.7%、31.6%、18.7%、4.1%と徐々に下がっているが、短大生の志向の割合は、自分が生まれ育ったところが突出し、遠ざかるにつれて、51.1%、27.4%、12.2%、2.0%と落差が大きくなっている。

次に、専門別区分で見ることにする。「d」の割合が1番目に高かったのは、「教育系」と「保育系」、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」であり、それぞれ41.9%、52.7%、43.9%だった。「その他Ⅱ（生物・システム系）」だけは2番目で27.7%だった。「その他Ⅱ」で最も割合が高かったのは「c」であり34.8%だった。質問5で学生の出身地を見たが、「その他Ⅱ」は「東北出身」の割合が66.1%であり、それ以外の「教育系」「保育系」「その他Ⅰ」がいずれも87.8～98.8%と高い割合を示しているのに比べて低かったことから他の地域から大学に入り、生まれ故郷

以外での生活を経験しているために、いわゆる地元志向が低い傾向があるのではないかと考えられる。

なお、「d」の割合が最も高かったのは「保育系」の52.7%で、「短大」の51.1%とほぼ同じ割合だった。「c」について「教育系」と「保育系」、「その他Ⅰ」は、いずれも2番目に高い割合であり、それぞれ28.4%、25.1%、35.4%だった。共通して3番目に高い割合を示したのが「b」で、「教育系」が17.6%、「保育系」12.6%、「その他Ⅰ」12.2%、「その他Ⅱ」が18.8%だった。「a」については、大学別と同様に、全てで割合が低かった。「その他Ⅱ」の割合が、他のグループの割合と異なっていることに注目する必要がある。割合が高い順に、「c」34.8%、「d」27.7%、「b」18.8%、「e」13.4%、「a」5.4%だった。「その他Ⅱ」は生物系とシステム系のいわゆる理系学生の集まりであるが、自分が生まれ育ったところにこだわることなく、仕事や子育ての環境等の条件が良いところであればどこでもという、自分の専門性を生かす観点と、子育てをする上での観点などから総合的に考えている結果ではないかと推察する。

大学別区分でも、専門別区分でも「d 自分が生まれ育ったところ」が最も高い割合を示した。特に「短大」と「保育系」は5割を超えて突出している。もともと「短大」は地域に根差した大学として地元出身者が多く、今回の調査で短大生の割合がほとんどを占める「保育系」についても同様のことが言える。それは地元への帰属意識が高いこととも関係していると考えられる。それに対して、「4大」と「その他Ⅱ（生物・システム系）」は、それぞれ33.7%、27.7%であり地元志向は低かった。また、「その他Ⅱ」については、質問5（図4）で学生の出身地を見ると、「東北出身」の割合が66.1%であり、それ以外の「教育系」87.8%、「保育系」98.5%、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」98.8%に比べて約20～30ポイント以上も低

かったことから、他の地域から大学に入り、生まれ故郷以外での生活を経験している学生がある程度存在していることも地元志向の低さに関係しているのではないかと推察する。

質問16-2)「子育てしたい地域を選んだ理由」について自由記述で回答を求めたことを考察することにする。「d」については、『自分が生まれ育ったところで慣れ親しんだ土地であり、馴染み深くよく知っているので安心して子育てができと思うから』112人、『親の協力が得られるところで子育てしたい。親や親戚がいるので子育て環境がよいから』49人、『自然が豊かで水や空気もきれいなところ(田舎)で、穏やかにゆったりしながら、伸び伸びと子どもを育てたいから』44人、『自分の地元がとても良いところだからそこで子どもを育てたい。自分が生まれ育った地元で暮らし、自分と同じ環境のもとで子どもを育てたいから』19人、『地元には相談できる、頼れる友人や知人がいるから。地元には温かい人達が沢山いて頼れるから』13人などが挙げられていた。(表7)

2番目に高い割合だったのが、「c 地方の都市部(県庁所在地やそれに次ぐような都市)」だった。3割以上の割合を示しているのが、「4大」と「その他Ⅰ」、「その他Ⅱ(全員が理系の4大生)」である。「短大」に比べると広範で様々な出身地域から学生が集まってくる「4大」と「その他Ⅱ」では、地元以外での生活経験から、あるいは専門性の影響から「d」以外の選択者の割合が増えているのではないかと考える。また、4年間の学びや経験などで得られる様々な知見は、視野や将来の自分の可能性をも拡大させると考えられるため、子育てする場所選びについては、自分が就く仕事との関連性も含めて柔軟な発想を持っているのではないかと推察する。「c」についての理由を見ると、『適度な子育てサービスや商業施設、娯楽施設なども整っていて便利だから。交通機関、医療や商業施設、保育施設や教育施設、子育て支援環境がある程度整っていて子育てや生活する上で便利だから』58人、『都会過ぎず田舎過ぎず、生活しやすいところで子どもを育てたいから。大都会に比べたら人も多くなく、都会と田舎のバランスが程よいところで生活して子どもを育てたいから』35人、『大都会よりも自然に恵まれているところで子どもを育てたいから。ある程度自然が多いところで伸び伸びと子育てをしたいから』27人などが挙げられていた。

3番目の割合を示したのが「b 各地域の拠点となる大都市」、札幌市や仙台市、新潟市などの政令指定都市のことであるが、6区分とも10%台であった。理由は、『交通機関、医療・商業施設、教育施設、娯楽施設などが充実していて生活しやすいところだから。保育・教育施設や機関、習い事できる場が多くあり、便利で不自由なく子育てができるから』44人などが挙がっていた。

次いで「e その他」の理由としては『地域や場所には

拘らない。安定した生活ができるのであればどこでもよい』10人、『子どもを伸び伸びと育てることができる自然豊かなところ。豊かな自然の中で子どもを遊ばせたい』9人、『まだ考えていない。』8人、『結婚する相手と相談して決める』6人などが挙げられていた。

そして最低の割合を示したのが「a 首都圏などの大都市圏」だった。主な理由には、『保育・教育関係の施設や機関が充実しているから。いろいろな機関や施設・設備が整っているの、子どもにとって様々なチャンスがありそうだから』6人などが挙がっている。しかし一方では、「b」や「c」を選択した学生の一部から、子育てをする地域として「a」に対してごくわずかだが次のように、『空気が汚いイメージがある。騒音が気になる。治安が悪そうだ』『人も多く犯罪などの不安があるし、物価が高い』『人が多すぎて息が詰まりそうだ。自分の精神状態が安定できない気がする。首都圏は苦手だ』などの声があった。

この結果から総じて言えることは、今回調査した学生は東北地方の主に秋田県と宮城県出身者が主であるが、その多くは「d 自分が生まれ育ったところ」で子育てをしたいと回答している。特にその傾向が強いのは「短大」であり「保育系」であった。つまり、「短大」の保育系学生のほとんどが秋田県内や宮城県内などの地元で子育てをしたいと考えているということになる。生まれ育ったところは馴染み深いことから安心感があり、親の協力を得られる可能性に期待でき、自然にも恵まれていることが主な理由である。次いで多かったのも、「c 地方の都市部」で子育てをしたいであり、これは県内の県庁所在地やそれに次ぐような都市を希望していることになる。「その他Ⅱ」ではこれが最も高い割合であったし、それ以外の5つの区分では2番目に高い割合だった。ここでも生まれ育った県内での子育てを希望している学生が多いことが分かった。ある程度、交通の利便性や多くの分野での機能が集中・発達し、適度に人的交流ができ、子育てに必要な保育・教育関係の機関や施設も整っていて、しかも自分が生まれ育ち住み慣れた県内であれば土地勘もあり、いろいろな生活情報も得やすくなるという魅力があるからではないかと推察する。

なお、本学での過去の調査研究で、これに類似した質問をしている。2015年度調査(安藤ら)⁽¹¹⁾では「将来結婚をして子育てをしたい場所としてどこを選びますか」に対する回答は、秋田県内80.2%、東北管内9.3%、関東圏7.0%などであり、県内をあげた理由としては『住み慣れた場所で安心感がある』『親や親戚、友人に援助してもらえる環境、自然環境のよさ、保育施設が整っている』『子どもに自分が育った場所で同じことを感じて欲しい』『地元のよさを子どもたちに伝えたい』『秋田が好き』などであった。2018年度の調査研究(藤原ら)⁽¹²⁾では「将来、子育てをしたい場所はどこですか。その理由を教えてください」に対する回答は、秋田県内85.6%、県外14.4%であり、その

（表7） 質問16－2 子育てをしたい地域を選んだ理由

回答項目	回答内容	回答合計
a 首都圏などの大都市圏で (16人)	○教育機関が発達しているから。保育・教育関係の施設や機関などが充実しているから 3	6
	○いろいろな機関や施設・設備が整っているの、子どもにとって様々なチャンスがありそうだから 3	
	○自分が首都圏への就職希望で、定住したいから。自分が首都圏に住みたいから 3	3
	○人との出会いの機会が多く、何かと便利だから 2	2
	○地元は不便だから 1 ○記述なし 4	5
b 各地域の拠点となる大都市で (87人)	○交通機関、医療・商業施設、教育施設、娯楽施設などが充実していて生活しやすいところだから 24	44
	○保育・教育施設や機関、習い事できる場が多くあり、便利で不自由なく子育てができるから 20	
	○一定以上の規模の都会は様々な施設や制度が整っており、子どもにとって得だ（選択肢が増える）から 8	8
	○自分が育ち、慣れ親しんだところで子どもを育てたいから 7	7
	○大都会過ぎず、田舎過ぎずちょうどよい環境だから 6	6
	○なんとなく 2 ○記述なし 20	22
	★首都圏だと空気が汚いイメージがあり、騒音が気になるし、治安も悪そうだ 2	—
c 地方の都市部で (175人)	★首都圏は人も多く、犯罪などの不安があるし、物価が高いという問題もある 2	—
	○適度な子育てでサービスや商業施設、娯楽施設なども整っていて生活に便利だから 28	58
	○交通機関、医療や商業施設、保育・教育施設、子育て支援環境がある程度整っていて便利だから 30	
	○都会過ぎず田舎過ぎず、生活しやすいところで子どもを育てたいから 21	35
	○大都会ほど人も多くなく、都会と田舎のバランスが程よいところで子どもを育てたいから 14	
	○大都会よりも自然に恵まれているところで子どもを育てたいから 12	27
	○ある程度自然が多いところで伸び伸びと子育てをしたいから 15	
	○忙し過ぎず、静かで落ち着いたところで生活して子どもを育てたいから 10	15
	○治安が良く、安心してゆったり穏やかなところで生活をしたいから 5	
	○住み慣れているところだから 3 ○就職したいと考えているから 2	5
	○なんとなく 2 ○地元に離れたくないから 1	3
	○人間関係が楽に感じるから 1 ○記述なし 31	32
d 自分の生まれ育ったところで (272人)	★首都圏は人が多すぎて息が詰まりそうだ。自分の精神状態が安定できない気がする 1	—
	★首都圏は苦手だ 1	—
	○自分が生まれ育ったところなので慣れ親しんで馴染んでいるから 43	112
	○住み慣れていて馴染みがあり、土地勘もあるところで子育てをしたいから 27	
	○自分が生まれ慣れ親しんだ土地で利便性や勝手が分かり生活しやすいから 25	
	○自分が好きな土地でよく知っているし、安心して落ち着いて子育てができるから 17	49
	○両親の協力が得られるところで子どもを育てたいから 7	
	○親が近くにいると安心して子育てができるから 24	
	○家族や親戚など頼れる人が身近にいて子育て環境が良いから 18	44
	○自然が豊かで水や空気もきれいなところ（田舎）で、穏やかに伸び伸びと子どもを育てたいから 25	
	○自然が豊かで都市部にも近く、治安もよいところで子育てにはちょうど良い環境だから 19	19
	○自分の地元がとても良いところだから、そこで子どもを育てたい 13	
	○自分が生まれ育った地で暮らし、自分と同じ環境のもとで子どもを育てたいから 6	13
	○地元には相談できる、頼れる友人や知人がいるから 8	
	○地元には温かい人たちが沢山いて頼れるから 5	3
	○子育て支援が他よりもしっかり整った環境なので子育てしやすいと思うから 3	
	○地元以外の場所での生活を考えたことがないから 2	2
	○地元で就職するから 2 ○他の地域に引っ越すのが大変だから 2	4
	○親の面倒をみななければいけないから 2 ○地元に恩返ししたいから 2	4
	○都会が好きでないから 1 ○不便さを感じていないから 1	2
	○地元は災害が少ないから 1 ○結婚する相手と相談して決める 1	2
	○記述なし 18	18
e その他 (42人)	○地域や場所には拘らない。安定した生活ができるのであればどこでもよい 10	10
	○子どもを伸び伸びと育てることができる自然豊かなところ。豊かな自然の中で子どもを遊ばせたい 9	9
	○まだ考えていない。まだ決めていない。自分の子どもを育てるというビジョンが見えない 8	8
	○結婚する相手と相談して決める 6	6
	○海外勤務希望なので海外を考えている。日本の環境が子どもに適していると思わないので海外で 4	4
	○働く場所によって決まる 3 ○分からない。特になし 2	5

主な理由としては、『親や地域の身近な人とのつながりや支援があるため』『自分が育った秋田で育ってほしい』『秋田が好き』が大半であったが、加えて『少人数で質の高い教育が受けられる』『高い学力を育んでいる秋田の教育を受けさせたい』という回答が複数あったことは、教育環境が子育ての大きな条件となりうることを示唆しているものと考えられる。

ところが、このように過去も現在も地元での子育て希望が多いのに、現実には多くの若者が今も首都圏などの大都市圏に流出し、それが地方の少子化や人口減少の一因となっているのはどうしてだろうか。今回の調査結果と現実にある大きな乖離の原因を探ることが今後の社会的な課題と考える。

6 子どもの存在について

質問17)「あなたが親になったとき、子どもはどのような存在だと思いますか。質問事項別に当てはまるものに○をひとつ記入してください。」と親になったとき、子どもは自分にとってどのような存在になると思うかについて質問した。a～jの質問事項別に、『とても当てはまる』『やや当てはまる』『あまり当てはまらない』『全く当てはまらない』の4件法で回答してもらった。(表8)

大学別区分と専門別区分のどちらにおいても『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が高かった質問事項は「a」～「f」及び「j」の7項目であった。割合合計が最も高かったのが、「b 仕事や人生の励みになる存在」で、「4大」が91.2%、「短大」は94.1%だった。また、「教育系」93.3%、「保育系」95.2%と高い割合を示し、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」90.3%、「その他Ⅱ（生物・システム系）」89.3%と続いている。2番目に高い割合だったのが「c 親の人間性を成長させてくれる存在」で、「4大」が88.1%、「短大」は91.7%だった。そして、「教育系」91.9%、「保育系」93.1%と高い割合を示し、「その他Ⅰ」85.3%、「その他Ⅱ」85.7%と続いた。3番目に高い割合を示したのは、「a 家族や夫婦間の結び付きを強める存在」であり、「4大」は85.0%、「短大」89.8%だった。専門別区分では、「教育系」85.1%、「保育系」89.8%、「その他Ⅰ」89.0%、「その他Ⅱ」84.8%であった。このように9割前後の学生が、子どもの存在が、夫婦や家庭にとって精神的な意味からかけがえのないものであるという意識を強く持っているということが分かった。かつては「子は鎧」とよく言われたが、その想いに近いものが現代の学生たちにもしっかりあるということではないだろうか。

4番目に割合合計が高かった項目は、「d いざというときに頼りになる存在」で、「保育系」の80.5%が最も高く、最も低かった「その他Ⅱ」の62.5%と18.0ポイントの差があり、6区分全体の平均割合は72.8%だった。5番目は、「j

次代の社会を担う存在」であり、「その他Ⅱ」が74.2%で最も高い割合を示し、最も低かった「その他Ⅰ」の56.1%とは18.1ポイントの差があり、6区分の平均の割合は69.0%だった。「e 親に社会的信頼を与えてくれる存在」と「f 友人など人間関係を広げてくれる存在」は、それぞれ6区分の平均の割合が63.0%、64.4%だった。

一方、『まったく当てはまらない』『あまり当てはまらない』の割合合計が高かったのは3つの質問事項だった。6区分の割合合計の平均が高い順に、「i 自分の夢や理想を託す存在」76.1%、「h 財産や仕事などを継いでくれる存在」59.4%、「g 自分の老後の面倒を見てくれる存在」54.9%だった。

かつての親は、自分の子どもに対して、老後の自分の面倒を見て欲しい、財産や家業を継いで欲しい、自分の夢や理想を子どもに託したいなどの思いが強かったようだが、現在は子どもの意思を尊重する時代になってきていることが窺える。また、寿命が延びて高齢化している社会で実際に生活している背景もあつてのことからか、「終活」という言葉を多く見かけるようになった昨今、自分の老後を子どもの世話になるかどうかも含めて、自分で生活設計しなければならないと考えている学生が5割以上いると読み取ることができる。

7 これまでの子どもとの関わり等について

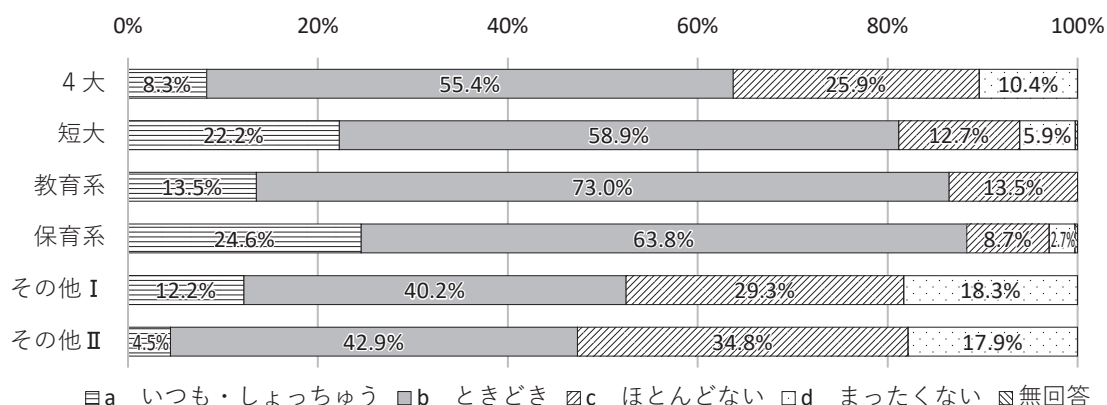
質問18)「高校以降の人生で、どの程度の頻度で子どもと関わってきましたか。」と高校以降に、どの程度の頻度で子どもと関わってきたかについて質問した。a～dの選択肢の中からひとつ選んで回答してもらった。※0～2歳児は乳児、3～6歳は幼児、7～12歳児は児童、13～18歳児は生徒とする。(図16)

まず、大学別区分で見ると、「4大」では『a いつも、しょっちゅう』8.3%、『b とときどき』55.4%であり、「短大」は『a』22.2%、『b』58.9%だった。『a』『b』は子どもと関わる頻度が高いことを示しており、両者の割合合計は、「4大」で63.7%、「短大」は81.1%であり、短大生の割合の方が17.4ポイント高い。『c ほとんどない』『d 全くない』の割合合計では「4大」36.3%、「短大」18.6%で「短大」が「4大」より17.7ポイント少なく、4大生に比べて短大生が子どもと関わる頻度の割合が高いことが分かった。

一方、専門別区分で比較してみると、3区分で『a』『b』の割合合計が、『c』『d』の割合合計よりも高くなっている。「教育系」は『a』13.5%、『b』73.0%で合計86.5%。「保育系」は『a』24.6%、『b』63.8%で合計88.4%。「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」『a』12.2%、『b』40.2%で合計52.4%であり、「保育系」と「教育系」は専門性の関係で子どもと関わる機会が多いことからであろうか、割合合計が高く、「その他Ⅰ」や「その他Ⅱ（生物・システム系）」の割合に比べると34.1～41ポイントの差が

（表8） 質問17 親になったときの子どもの存在

質問事項	選択肢	大学別区分		専門別区分			
		4大	短大	教育系	保育系	その他Ⅰ	その他Ⅱ
a 家庭や夫婦間の結び付きを強める存在	1. とても当てはまる	39.9%	55.3%	44.6%	56.9%	46.3%	37.5%
	2. やや当てはまる	45.1%	34.5%	40.5%	32.9%	42.7%	47.3%
	3. あまり当てはまらない	10.9%	6.6%	9.5%	6.6%	7.3%	11.6%
	4. 全く当てはまらない	4.1%	1.5%	5.4%	1.5%	1.2%	3.6%
	無回答	0.0%	2.2%	0.0%	2.1%	2.4%	0.0%
b 仕事や人生の励みになる存在	1. とても当てはまる	61.7%	63.8%	75.7%	65.6%	54.9%	53.6%
	2. やや当てはまる	29.5%	30.3%	17.6%	29.6%	35.4%	35.7%
	3. あまり当てはまらない	5.7%	3.2%	4.1%	2.7%	4.9%	7.1%
	4. 全く当てはまらない	3.1%	0.7%	2.7%	0.3%	2.4%	3.6%
	無回答	0.0%	2.0%	0.0%	1.8%	2.4%	0.0%
c 親の人間性を成長させてくれる存在	1. とても当てはまる	53.9%	64.8%	63.5%	67.4%	52.4%	48.2%
	2. やや当てはまる	34.2%	26.9%	28.4%	25.7%	32.9%	37.5%
	3. あまり当てはまらない	8.3%	4.6%	4.1%	3.9%	8.5%	10.7%
	4. 全く当てはまらない	3.6%	1.2%	4.1%	0.9%	2.4%	3.6%
	無回答	0.0%	2.4%	0.0%	2.1%	3.7%	0.0%
d いざというときに頼りになる存在	1. とても当てはまる	26.4%	37.2%	23.0%	41.3%	23.2%	25.9%
	2. やや当てはまる	40.4%	42.3%	48.6%	39.2%	52.4%	36.6%
	3. あまり当てはまらない	24.4%	14.4%	18.9%	14.1%	15.9%	28.6%
	4. 全く当てはまらない	8.8%	3.7%	9.5%	3.3%	4.9%	8.9%
	無回答	0.0%	2.4%	0.0%	2.1%	3.7%	0.0%
e 親に社会的信頼を与えてくれる存在	1. とても当てはまる	23.3%	33.7%	17.6%	36.5%	24.4%	25.0%
	2. やや当てはまる	31.6%	39.9%	37.8%	39.2%	41.5%	27.7%
	3. あまり当てはまらない	29.0%	20.0%	28.4%	18.6%	25.6%	30.4%
	4. 全く当てはまらない	16.1%	3.9%	16.2%	3.6%	4.9%	17.0%
	無回答	0.0%	2.4%	0.0%	2.1%	3.7%	0.0%
f 友人など人間関係を広げてくれる存在	1. とても当てはまる	26.9%	34.2%	20.3%	38.3%	19.5%	29.5%
	2. やや当てはまる	35.2%	37.7%	36.5%	38.0%	36.6%	33.9%
	3. あまり当てはまらない	26.9%	19.6%	32.4%	16.8%	29.3%	25.0%
	4. 全く当てはまらない	10.9%	5.9%	10.8%	4.5%	11.0%	11.6%
	無回答	0.0%	2.7%	0.0%	2.4%	3.7%	0.0%
g 自分の老後の面倒をみってくれる存在	1. とても当てはまる	14.0%	16.6%	13.5%	17.7%	12.2%	14.3%
	2. やや当てはまる	24.9%	33.3%	24.3%	32.9%	32.9%	25.9%
	3. あまり当てはまらない	36.3%	35.2%	36.5%	35.9%	35.4%	33.9%
	4. 全く当てはまらない	24.9%	12.5%	25.7%	11.4%	15.9%	25.9%
	無回答	0.0%	2.4%	0.0%	2.1%	3.7%	0.0%
h 財産や仕事などを継いでくれる存在	1. とても当てはまる	9.3%	15.4%	12.2%	16.5%	11.0%	7.1%
	2. やや当てはまる	28.5%	25.7%	18.9%	24.3%	30.5%	35.7%
	3. あまり当てはまらない	35.2%	40.3%	36.5%	41.6%	37.8%	32.1%
	4. 全く当てはまらない	26.9%	15.9%	32.4%	15.3%	17.1%	25.0%
	無回答	0.0%	2.7%	0.0%	2.4%	3.7%	0.0%
i 自分の夢や理想を託す存在	1. とても当てはまる	7.3%	12.5%	6.8%	14.4%	4.9%	7.1%
	2. やや当てはまる	13.5%	14.2%	9.5%	14.1%	15.9%	15.2%
	3. あまり当てはまらない	32.1%	38.4%	35.1%	38.3%	37.8%	30.4%
	4. 全く当てはまらない	47.2%	32.5%	48.6%	31.1%	37.8%	47.3%
	無回答	0.0%	2.4%	0.0%	2.1%	3.7%	0.0%
j 次代の社会を担う存在	1. とても当てはまる	31.6%	30.3%	33.8%	31.7%	24.4%	30.4%
	2. やや当てはまる	40.9%	39.1%	36.5%	41.0%	31.7%	43.8%
	3. あまり当てはまらない	15.5%	20.8%	17.6%	19.8%	25.6%	13.4%
	4. 全く当てはまらない	11.9%	7.3%	12.2%	5.4%	14.6%	12.5%
	無回答	0.0%	2.4%	0.0%	2.1%	3.7%	0.0%



(図16) 質問18 高校以降どの程度の頻度で子どもと接したか

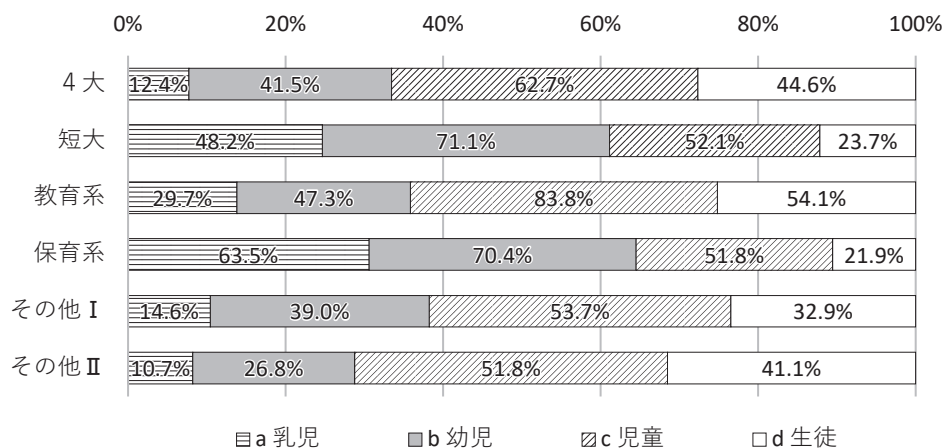
あった。『c』『d』の割合合計で見ると、「その他Ⅰ」は47.6%、「その他Ⅱ」は52.7%であり、「教育系」の13.5%や「保育系」の11.4%に比べると34.1～41.3ポイントも高くなっていて、子どもと関わる経験がないか、少ない学生が多いことが分かった。特に、「その他Ⅱ」では、『c』『d』の割合合計が52.7%と半数以上だった。やはり、「4大」や「短大」の専門性が「教育系」や「保育系」では普段から子どもを研究や学習の対象としていることから、実習も含めてカリキュラム的に子どもと接する機会が多いと思われる。「その他Ⅰ」や「その他Ⅱ」の学生は、教職課程を履修したり、子どもと関わるようなアルバイトやボランティア活動をしたりしていれば子どもと関わる機会はあると思われるが、そうでなければ子どもとの接点は限られてしまうと推察する。

質問15で「自分の子どもを育てることについてどのように思っているか」を聞いたが、78.7%以上の学生が子育ての大変さをやりがいと認識していることが分かった。特に、子育てへのポジティブな印象について高い割合を示した保育系学生や教育系学生が、子育てに前向きな考えを

持っている、あるいは自信すら持っていると推察された。こうした背景にあるものとしては、「教育系」と「保育系」の学生が子どもと関わる頻度がそれぞれ86.5%、88.4%で、他の区分に比べて圧倒的に高いことが示しているように、子どもと関わる機会が多いという経験と、子どもの特性について日々学びを積み重ねている経験が最大の理由ではないかと考える。

質問19) 質問18で子どもとの関わりが『a いつも(しょっちゅう)』『b ときどき』『c ほとんどない』と答えた人への質問である。「主にどの年代の子どもと関わってきましたか。当てはまるものすべてに○をしてください。」と子どもとの関わりがある回答者に、どの年代の子どもと関わってきたかについて質問した。選択肢、『a 乳児』、『b 幼児』、『c 児童』、『d 生徒』の中から当てはまるものをすべて選んで回答してもらった(複数回答可)。なお、回答が複数の選択肢に及ぶ場合もそれぞれの選択肢として集約した。(図17)

これと同じ質問対象者に対して、質問19-2)では、「主



(図17) 質問19 関わった子どもの年代

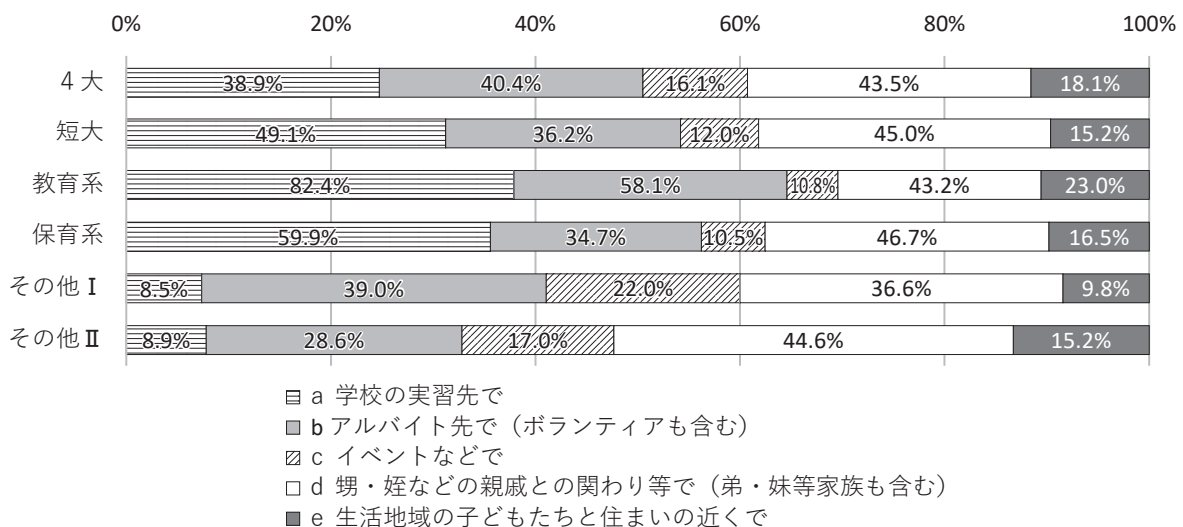
にどのような場所で関わってきましたか。当てはまるものすべてに○をしてください。」と子どもとの関わりがある回答者に、どのような場所で子どもと関わってきたかについて質問した。選択肢、『a 学校の実習先』、『b アルバイト先で (ボランティアも含む)』、『c イベントなどで』、『d 甥・姪などの親戚との関わり等で (弟・妹等家族も含む)』、『e 生活地域の子どもたちと住まいの近くで』の中から当てはまるものすべてを選んで回答してもらった (複数回答可)。これも回答が複数の選択肢に及ぶ場合はそれぞれの選択肢として集約した。(図18) ここでは、2つの質問への回答結果をあわせて考察することにする。

はじめに、どの年代の子どもと関わってきたかについて大学別区分で見ると、割合が高い順に、「4大」では、『児童』62.7%、『生徒』44.6%、『幼児』41.5%、『乳児』12.4%。「短大」では、『幼児』71.1%、『児童』52.1%、『乳児』48.2%、『生徒』23.7%だった。次に、関わった場所を割合が高い順に見ると、「4大」では、『親戚・弟妹等』43.5%、『アルバイト先』40.4%、『実習先』38.9%、『生活地域』18.1%、『イベント』16.1%の順であり、『親戚・弟妹等』『アルバイト先』『実習先』の割合が比較的高かった。「短大」では、『実習先』49.1%、『親戚・弟妹等』45.0%、『アルバイト先』36.2%、『生活地域』15.2%、『イベント』12.0%の順であり、順番は異なるものの「4大」と同様に『実習先』『親戚・弟妹等』『アルバイト先』の割合が高かった。『実習先』の位置付けに10.2ポイントの差が見られたが、「4大」では実習に参加する学生は「教育系」学生が教職課程履修学生の約4割、「短大」では「保育系」学生の約8割なので、その差が出たものと考えられる。また、『親戚・弟妹等』の存在や『アルバイト先』の経験も影響していることが分かった。

専門別区分で関わった子どもについて見てみると、割合

が高い順に、「教育系」では、『児童』83.8%、『生徒』54.1%、『幼児』47.3%、『乳児』29.7%となっていて、『児童』『生徒』の割合が突出して高いことから、関わった場所は教職課程における『実習先』82.4%及び『アルバイト先』58.1%の経験を反映していることと、『親戚・弟妹等』43.2%の存在が影響しているものと推察できる。「保育系」では、『幼児』70.4%、『乳児』63.5%、『児童』51.8%、『生徒』21.9%だった。『幼児』『乳児』の割合が高い理由は、59.9%を占める教育・保育『実習先』が大きく反映され、次いで『親戚・弟妹等』46.7%、『アルバイト先』34.7%が影響していることが窺える。「その他Ⅰ (福祉・食物・キャリア教養系)」は、『児童』53.7%、『幼児』39.0%、『生徒』32.9%、『乳児』14.6%であり、「その他Ⅱ (生物・システム系)」は、『児童』51.8%、『生徒』41.1%、『幼児』26.8%、『乳児』10.7%であった。実習参加が少ない「その他Ⅰ」の学生が関わった場所は、『アルバイト先』39.0%、『親戚・弟妹等』36.6%、『イベント』22.0%などが主であり、『生活地域』『実習先』の割合は10%未満と少なかった。同じく実習参加が少ないと考えられる「その他Ⅱ」では、『親戚・弟妹等』44.6%、『アルバイト先』28.6%、『イベント』17.0%、『生活地域』15.2%であり、『実習先』の割合は低かった。「その他Ⅰ」と「その他Ⅱ」でともに高い割合だった場所は、『アルバイト先』と『親戚・弟妹等』であった。

以上のことから、『親戚・弟妹等』『アルバイト先』がいずれの区分でも高い割合を占めた。兄弟姉妹がいる学生であれば『親戚・弟妹等』の割合が高くなるのは当然である。『アルバイト先』の割合が高くなるのは、近年の大学生のアルバイト就業率71.1% (「大学生のアルバイト調査2024」株式会社マイナビ2024年4月公表) を反映していると考ええる。飲食店などのサービス業であればファミリー層の対



(図18) 質問19-2 子どもと関わった場所

応をすることも多くなるだろうし、教員を目指している学生であれば塾の講師や家庭教師などがあるかもしれない。また、保育科学生であれば保育所、幼稚園、認定こども園などでのアルバイトやボランティアの経験が多くなると考えられる。そして、特徴的な結果となったのが『実習先』である。実習のある「教育系」「保育系」は非常に高い割合を示した一方、教育・保育実習に参加する機会が少ない「その他Ⅰ」「その他Ⅱ」では非常に低い割合となった。教育・保育実習の履修の有無によって、子どもと接する機会や頻度が大きく変わる傾向が見られた。

一方で、『生活地域』の子ども達との関わりは全体的に低い割合となっており、少子化により近所や地域で子どもに会う機会が少なくなっていることも考えられることから、何らかの枠組みが無い限り、子どもと関わるには地域社会との接点が限定されることを示していると推察される。

質問19-3 質問18で『a いつも（しょっちゅう）』、『b ときどき』、『c ほとんどない』と答えた人への質問である。「子どもと関わってどのような気持ちになりましたか。」と子どもとの関わりがある回答者に、子どもと関わってどのような気持ちになったかについて質問した。気持ちの表わす質問事項がa～hの8項目あり、そのうちa～dの項目はポジティブな内容で、e～hの項目はネガティブな内容である。それぞれの質問事項別に、『とても当てはまる』『やや当てはまる』『あまり当てはまらない』『まったく当てはまらない』に○をひとつ記入してくださいという4件法で回答してもらった。(表9)

ポジティブ4項目のうち6区分の『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計を平均して高い順に3項目を示すと、『a 可愛い、面白い、楽しい、嬉しいと感じた』、『d 活発でエネルギーだと思った』、『b 癒やされる、心が穏やかになった』だった。

『a』については、大学別区分と専門別区分の6区分において、『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が91.4%～97.2%でいずれも高く、6区分の割合を平均すると95.5%でポジティブ項目中最も高かった。特に、95%以上の割合を示したのが「保育系」97.2%、「短大」96.4%、「教育系」95.9%だった。『d』についても、6区分の全てにおいて、『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が87.0%～100.0%で、6区分の割合平均は95.0%だった。95%以上の区分は、「教育系」100.0%、「保育系」96.3%、「短大」95.9%だった。『b』についても、6区分の全てにおいて、『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が75.0%～96.0%で、6区分の割合平均は90.3%だった。90%以上の区分は、「保育系」96.0%、「短大」93.8%、「教育系」90.5%だった。子どもと関わる経験の多少に関わらず、子どもに対してポジティブな感覚や

印象を持つ学生が圧倒的に多いということが分かった。

ポジティブ項目で唯一他と異なる回答が見られたのは『c 自分の先入観を正されたり、新たな考えに気付かされたりした』だった。大学別区分の「4大」と「短大」を比べてみると、『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計はそれぞれ65.9%と85.2%で、「短大」の方が19.3ポイント高かった。専門別区分では、『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が、「教育系」86.5%、「保育系」90.1%と高い割合だったが、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」は61.2%でやや低かった。しかし、「その他Ⅱ（生物・システム系）」の割合は47.9%と低く、逆に『あまり当てはまらない』『まったく当てはまらない』の割合合計が52.2%であり明確な差異が見られる。このことについては、質問7で「将来就きたい職業は子どもに関係する職業か」と聞いて確認できたことであるが、「教育系」と「保育系」の学生は、それぞれ86.5%と95.8%という高い割合で将来子どもと関わる職業に就くことを示していた。そのために、子どもについて様々な角度から理論的に学び、実習等で子どもと接する機会に実践的に学び、常に教員等になるために日々努力をしていることから、『c』のような感覚を持つこともあると考えられるが、「その他Ⅰ」や「その他Ⅱ」の学生は、子どもと直結するような学びや接点が少ないかほとんどないため、こうした感覚を持つには至らない学生が多くなるのではないかと推察する。

次に、ネガティブ4項目について見ることにする。『e こちらが思うように動いてくれないので疲れた』については、区分ごとに異なる回答が見られた。大学別区分の「4大」と「短大」を比べると、「4大」は『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が58.4%で、『あまり当てはまらない』『全く当てはまらない』の割合合計が41.6%であり、16.8ポイントの差で『当てはまる』の方が上回った。それに対して「短大」は逆で、『あまり当てはまらない』『まったく当てはまらない』の割合合計が55.2%で、『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が42.4%と、12.8ポイント差で『当てはまらない』の方が上回っている。専門別区分で比べると、『とても当てはまる』『やや当てはまる』の割合合計が上回っているのが、「教育系」64.8%、「その他Ⅰ」53.7%、「その他Ⅱ」53.3%で、『あまり当てはまらない』『全く当てはまらない』の割合合計との差がそれぞれ29.6ポイント、9ポイント、6.6ポイントであり、子どもに接する機会が多い「教育系」の割合の差が特に大きかった。質問19で「どの年代の子どもと関わってきたか」を確認したが、「教育系」の学生は、子どもの特性について学び、接する機会も多いはずだが、一般に聞き分けのない乳児や幼児よりも、ある程度発達した児童や生徒との接触が主であることが影響しているのではないかと考える。一方、「保育系」のみが『あまり当てはまらない』『全く当てはまらない』の割合合計が57.1%で、『とても当てはまる』

（表9） 質問19－3 子どもに関わったときの気持ち

質問事項	選択肢	大学別区分		専門別区分			
		4大	短大	教育系	保育系	その他Ⅰ	その他Ⅱ
a 可愛らしい、面白い、楽しい、嬉しいと感じた	1. とても当てはまる	61.3%	81.3%	79.7%	86.1%	56.7%	45.7%
	2. やや当てはまる	32.4%	15.1%	16.2%	11.1%	35.8%	45.7%
	3. あまり当てはまらない	3.5%	1.3%	4.1%	0.3%	6.0%	3.3%
	4. 全く当てはまらない	2.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.4%
	無回答	0.0%	2.3%	0.0%	2.5%	1.5%	0.0%
b 癒やされる、心が穏やかになった	1. とても当てはまる	59.0%	79.2%	77.0%	84.3%	55.2%	42.4%
	2. やや当てはまる	23.7%	14.6%	13.5%	11.7%	28.4%	32.6%
	3. あまり当てはまらない	14.5%	3.4%	8.1%	1.2%	13.4%	20.7%
	4. 全く当てはまらない	2.9%	0.3%	1.4%	0.3%	0.0%	4.3%
	無回答	0.0%	2.6%	0.0%	2.5%	3.0%	0.0%
c 自分の先入観を正されたり、新たな考えに気付かされたりした	1. とても当てはまる	34.7%	56.3%	54.1%	61.1%	29.9%	19.6%
	2. やや当てはまる	31.2%	28.9%	32.4%	29.0%	31.3%	28.3%
	3. あまり当てはまらない	22.5%	10.2%	9.5%	5.9%	29.9%	34.8%
	4. 全く当てはまらない	11.6%	2.1%	4.1%	1.5%	6.0%	17.4%
	無回答	0.0%	2.6%	0.0%	2.5%	3.0%	0.0%
d 活発でエネルギッシュだと思った	1. とても当てはまる	66.5%	75.8%	86.5%	77.2%	68.7%	50.0%
	2. やや当てはまる	26.6%	20.1%	13.5%	19.1%	25.4%	37.0%
	3. あまり当てはまらない	4.0%	1.6%	0.0%	1.2%	3.0%	7.6%
	4. 全く当てはまらない	2.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.4%
	無回答	0.0%	2.6%	0.0%	2.5%	3.0%	0.0%
e こちらが思うように動いてくれないので疲れた	1. とても当てはまる	20.8%	13.0%	21.6%	12.3%	17.9%	19.6%
	2. やや当てはまる	37.6%	29.4%	43.2%	28.1%	35.8%	33.7%
	3. あまり当てはまらない	26.6%	37.2%	20.3%	38.0%	34.3%	30.4%
	4. 全く当てはまらない	15.0%	18.0%	14.9%	19.1%	10.4%	16.3%
	無回答	0.0%	2.3%	0.0%	2.5%	1.5%	0.0%
f 意思疎通ができず、まどろっこしさを感じた、イライラした	1. とても当てはまる	6.9%	6.3%	5.4%	4.9%	13.4%	7.6%
	2. やや当てはまる	22.5%	15.6%	28.4%	14.8%	17.9%	19.6%
	3. あまり当てはまらない	40.5%	37.8%	39.2%	37.7%	41.8%	39.1%
	4. 全く当てはまらない	30.1%	38.0%	27.0%	40.1%	25.4%	33.7%
	無回答	0.0%	2.3%	0.0%	2.5%	1.5%	0.0%
g 同じことを繰り返して要求するので飽き飽きした	1. とても当てはまる	3.5%	5.7%	1.4%	5.2%	7.5%	5.4%
	2. やや当てはまる	17.9%	9.4%	21.6%	8.3%	16.4%	14.1%
	3. あまり当てはまらない	40.5%	39.3%	39.2%	39.2%	40.3%	41.3%
	4. 全く当てはまらない	38.2%	43.0%	37.8%	44.8%	32.8%	39.1%
	無回答	0.0%	2.6%	0.0%	2.5%	3.0%	0.0%
h わがままで手に負えずもう一緒に遊びたくない	1. とても当てはまる	2.9%	3.1%	1.4%	3.1%	3.0%	4.3%
	2. やや当てはまる	6.9%	3.6%	6.8%	3.1%	7.5%	6.5%
	3. あまり当てはまらない	34.1%	23.7%	32.4%	19.8%	46.3%	33.7%
	4. 全く当てはまらない	56.1%	66.1%	59.5%	70.7%	40.3%	55.4%
	無回答	0.0%	3.4%	0.0%	3.4%	3.0%	0.0%

『やや当てはまる』の割合合計40.4%より16.7ポイント上回っている。乳児や幼児の扱いに慣れているであろう「保育系」の学生ならばうなずける割合だと考えることができる結果だったが、『当てはまる』の割合が意外に高いと思った。これは、いくら扱いに慣れていても、実際に子ども一人一人に寄り添いながら終日世話をすることは疲労感につながるということではないかと推察した。

『f 意思疎通ができず、まどろっこしさを感じた（イライラした）』については、大学別区分と専門別区分を合わせた6区分で、『あまり当てはまらない』『全く当てはまらない』の割合合計が66.2%～77.8%を占めていた。意思の疎通ができないのは子どもならやむを得ないことと思って接している学生が多くいるのではないかと推察した。『g 同じことを繰り返して要求するので飽き飽きした』についても、6区分で『全く当てはまらない』『あまり当てはまらない』の割合合計が73.1%～84.0%であり、同じことを繰り返すのは子どもならよくあることと思って接している学生が多くいるということの意味していると考えられる。『f』『g』で『全く当てはまらない』『あまり当てはまらない』の割合合計が最も高かったのが「保育系」で、それぞれ77.8%と84.0%だった。これは、保育系学生が保育の授業で、乳児・幼児の特性を発達や心理等の観点から学んでいるため、子どもにも発達段階に応じた意思表示力があることと、コンピテンスの高まりや知的好奇心の表れとしての繰り返しの要求などを認識していることなどから、「まどろっこしさ（イライラした）」や「飽き飽きした」といった感覚はあまり持たないのではないかと考える。

『h わがままで手に負えず、もう一緒に遊びたくない』については、6区分の全てにおいて、『あまり当てはまらない』『まったく当てはまらない』の割合の合計が86.6%～91.9%と高い割合を示した。子どもならわがままであることはよくあることであり、だからといってもう一緒に遊びたくないとは思っていない学生が大半であることを示している。中でも、「教育系」が91.9%、「保育系」が

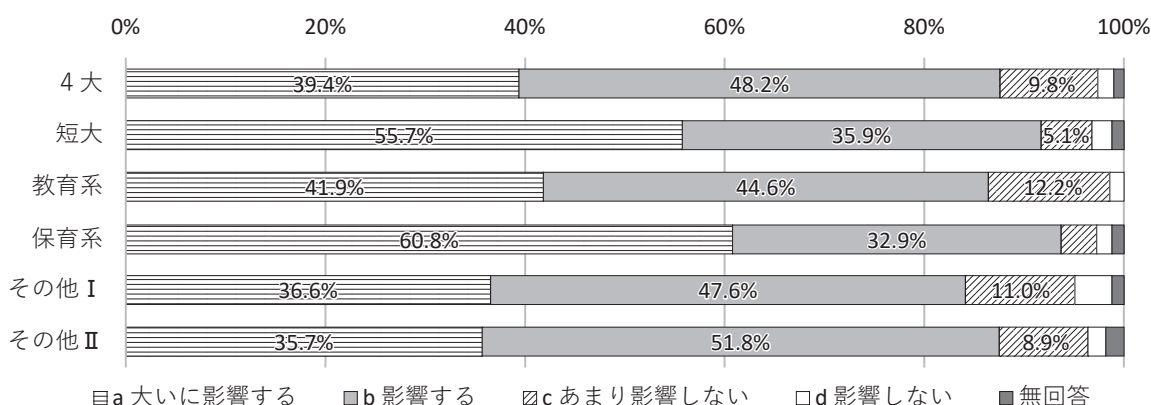
90.5%で特に高い割合であり、「その他Ⅰ」と「その他Ⅱ」の割合もそれぞれ86.6%と89.1%と高い割合だった。

この質問の回答を分析する際に活用したいのが質問19「主にどの年代別の子どもと関わってきたか」についての回答結果である。大学別区分で「4大」と「短大」を比較すると、4大生は短大生に比べて、乳児や幼児と関わっている割合があきらかに低いことが分かる。このことから、乳児や幼児と一緒に遊んでも、扱いに不慣れであることからネガティブな事項に対して当てはまる割合が高くなったのではないかと考える。同じように、専門別区分でも質問19の結果で比較すると、「教育系」に比べて「保育系」は乳児や幼児に関わっている割合が高いことが分かった。こうしたことから、「教育系」は、「保育系」に比べると乳児や幼児との関わりに不慣れであるため、このネガティブ事項に対して当てはまる割合が高くなったのではないかと考える。そして、「教育系」と同じような割合を示している、「その他Ⅰ」と「その他Ⅱ」についても同様のことが言えるのではないかと考える。

質問20「子どもと関わった経験が将来の結婚や出産、子育てに影響すると思いますか。」と子どもと関わった経験の有無が、将来の結婚観や子ども観、子育て観に影響を与えるかについて質問した。選択肢、『a 大いに影響する』、『b 影響する』、『c あまり影響しない』、『d 影響しない』からひとつ選んで回答してもらった。（図19）

大学別区分で比較すると、「4大」は『大いに影響する』『影響する』の割合合計が87.6%であり、「短大」の割合合計は91.6%である。両者ともに高い割合で『影響する』と回答している。

専門別区分での『大いに影響する』『影響する』の割合合計は、「教育系」86.5%、「保育系」93.7%、「その他Ⅰ（福祉・食物・キャリア教養系）」84.2%、「その他Ⅱ（生物・システム系）」87.5%で、いずれの区分でも高い割合で『影響する』と回答している。子どもと関わった経験が将来の



（図19）質問20 子どもと関わった経験の結婚や出産、子育てへの影響

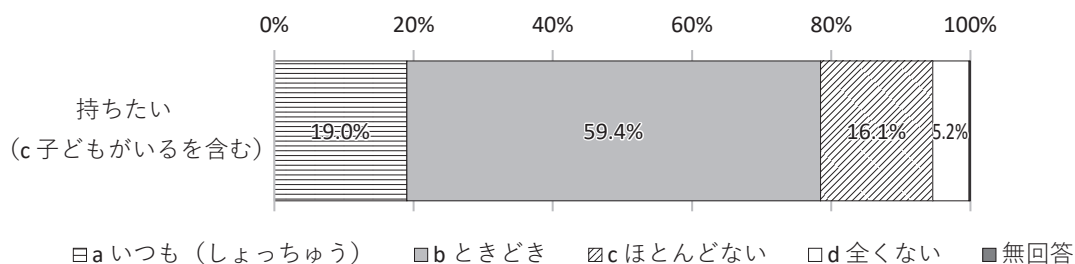
結婚や出産、子育てに何らかの影響があると学生自身が考えていることが分かった。

このことに加え、図20『将来、子どもを持ちたいか』と『子どもと関わる頻度』、図21『結婚観』と『子どもと関わる頻度』の相関図」からも、子どもと関わる頻度が高いほど結婚や出産等に対して積極的な考えを持っていることが分かる。このことから、子どもと関わる経験をすることで疑似的な保育体験となり、子どもや保育、子育てに対する理解や興味・関心の増進に繋がるのではないかと期待するところである。これらの体験は、表4「c 子どもを育てることが不安だ（自信が持てない）から」や表5「h

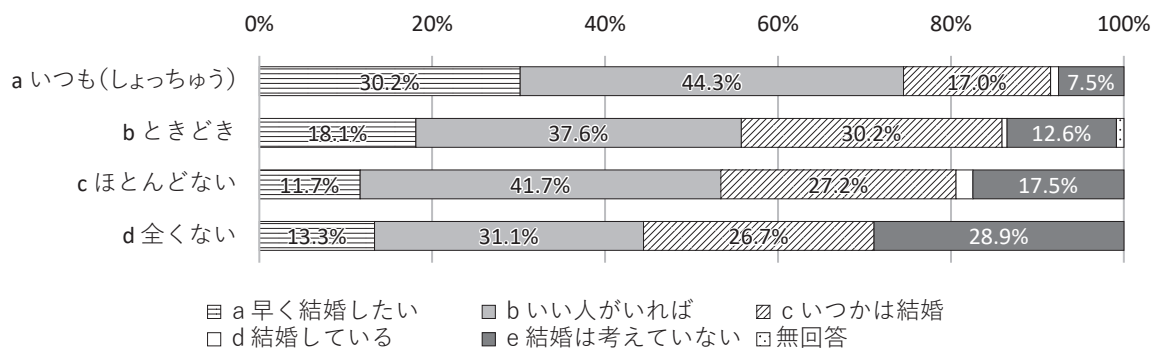
親としてちゃんと子どもを育てられるか不安だ（自信がない）から」で高い割合を示した、学生の「潜在的な子育てへの不安」の解消になるのではないだろうか。

こうしたことから、中学・高校時代に乳幼児や児童のことをある程度理解できるような継続的な関わりを体験することができるならば、次の世代への架け橋となっていく可能性があるのではないかと考える。そもそも、質問20の回答からも、多くの若者たちがそのような場や機会の設置を望んでいることが窺える。

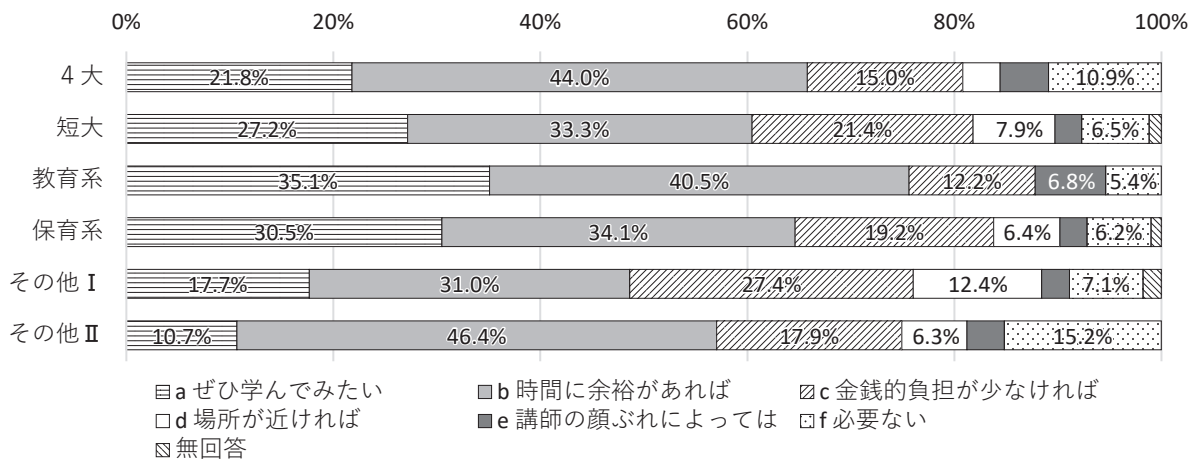
少子高齢化が加速度的に進行している我が国では、人口減少や経済活動の低迷、年金制度を含む社会保障制度への



(図20)『将来、子どもを持ちたいか』と『子どもと関わる頻度』の相関図



(図21)『結婚観』と『子どもに関わる頻度』の相関図



(図22) 質問21 将来、保育・幼児教育を学んでみたいか

不安など、将来展望は危機的状態にあることから、こうした体験機会を地方自治体に任せるのではなく、国がプロジェクトを立ち上げるなどして早急に対応することが、将来的に結婚や出産、子育てへの若者の意識に何らかの変化をもたらすことができるものと期待する。

質問21)「将来、自分の子育てのために、保育・幼児教育を学ぶ機会があれば学んでみたいと思いますか。」と自分の子どものために、保育や幼児教育について学んでみたいかについて質問した。選択肢、『a ぜひ学んでみたい』、『b 時間に余裕があれば学んでみたい』、『c 金銭的な負担が少なければ学んでみたい』、『d 場所が近ければ学んでみたい』、『e 講師の顔ぶれによっては学んでみたい』、『f 必要ない』の中から当てはまるものすべてを選んで回答してもらった。(複数回答可)。ただし、大学や短大で学んでいる人は、『学び直しをしたいか』で考えて答えてもらった。(図22)

大学別区分と専門別区分の6区分の全てにおいて最も割合が高かったのは『b 時間に余裕があれば学んでみたい』で、区分別の割合の高い順に、「その他Ⅱ(生物・システム系)」46.4%、「4大」44.0%、「教育系」40.5%、「保育系」34.1%、「短大」33.3%、「その他Ⅰ(福祉・食物・キャリア教養系)」31.0%だった。『a ぜひ学んでみたい』が2番目に高い割合を示しているのは、「教育系」35.1%、「保育系」30.5%、「短大」27.2%、「4大」21.8%で、「その他Ⅰ」と「その他Ⅱ」の2番目は『c 金銭的な負担が少なければ学んでみたい』であり、割合はそれぞれ、27.4%と17.9%だった。3番目については、「短大」、「保育系」、「4大」、「教育系」が『c』であり、それぞれ、21.4%、19.2%、15.0%、12.2%だった。「その他Ⅰ」と「その他Ⅱ」の3番目は、『a』で、それぞれの割合は、17.7%、10.7%だった。『a』『b』『c』の3項目の割合合計が6区分ともに75%以上であり、自分の子育てについて学ぶ機会があれば学びたいと考えている学生が多いことが分かった。

特に、「教育系」と「保育系」が『a ぜひ学んでみたい』の割合がそれぞれ35.1%、30.5%と他の区分より最大24.4ポイントも高く、積極的に子育ての学びを考えていることが分かった。また、「教育系」と「保育系」は、『a』『b』『c』の3項目の割合合計でも87.8%と83.8%とともに他の区分よりも高いことが目を引く。日常的に子どもについて専門的に学び、触れ合って研究もしている「教育系」と、保育や幼児教育を実際に学びやは子どもと触れ合って研究している「保育系」の学生たちが、子育てについてもっと学びたいと考えているということは、それだけ子育ては難しく、奥深いものであることを意味していると考えることができる。

一方、『f 必要ない』を選択した割合が10%以上だった

のが、「その他Ⅱ」15.2%と「4大」10.9%だった。それに比べると、「教育系」5.4%、「保育系」6.2%、「短大」6.5%と割合が低かった。「その他Ⅱ」と「教育系」の割合の差は9.8ポイントだった。「4大」の58.0%を占めているのが「その他Ⅱ」で、38.3%は「教育系」であることから、「4大」の『f』の割合には、「その他Ⅱ」の影響が出ているのではないかと考える。また、「教育系」や「保育系」は、普段から専門的に学んでいることから子育てに少し自信があることの表れかもしれない。「その他Ⅱ」は、現時点でまだ保育や幼児教育というところまで考えが及んでいないということだろうか。真意は測れなかった。

ここまでは、学生の結婚観、子ども観、子育て観についての意識調査結果をもとに、主に各種統計等と比較しながら考察してきた。同種類の調査研究はこれまで多数発表されているが、今後はそれらとの比較検討が必要と考える。

次章からは、少子高齢化が全国で最も進んでおり、それが深刻な課題となっている秋田県の主に少子化に関する統計及び県の施策から、現状と課題を確認した上で、今回の学生の意識調査結果と考察をもとに、次世代育成のために秋田県にとって必要だと考える提言についてまとめることとする。

第4章 秋田県の人口の推移と将来の見通し

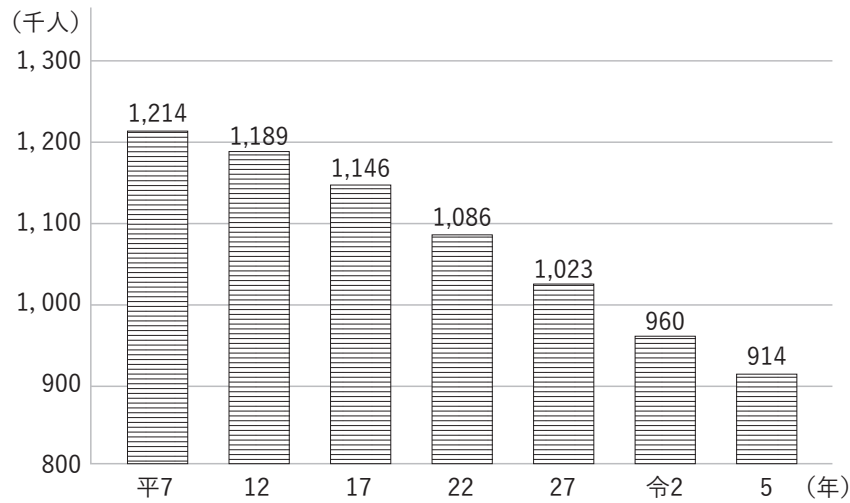
1 最近の人口及び将来推計人口の推移

2020(令和2)年の国勢調査人口等基本集計⁽²⁰⁾によると、本県の同年の人口は959,502人であり、前回の2015(平成27)年国勢調査から63,617人減り、人口減少率は6.2%と全国で最も大きくなっている。(図23)

秋田県が公表した『あきた県政概況2024』⁽¹³⁾によると、2023(令和5)年10月1日現在の秋田県の人口は913,514人となっている。1982(昭和57)年以降減少が続いており、2017(平成29)年には100万人台を割り込み、その後年間1万人を超えるペースで減少している。

県の人口は、高校や大学卒業後の進学や就職等により、多くの若年層が県外へ転出しており、その転出者数が県内への転入者数を上回る社会減が長年続いている。一方で、出生数が死亡数を上回るという自然増の状態が長く続いたため、1992(平成4)年までは社会減をある程度カバーすることができた。ところが、1993(平成5)年以降は死亡数が出生数を上回っており、それ以降は自然減も拡大傾向にある。つまり今の秋田県では、自然減と社会減が同時に進行しているのである。

国立社会保障・人口問題研究所が令和5年4月に公表した「日本の地域別将来推計人口」⁽²¹⁾では、2050(令和32)年には県人口が約56万人に減少すると推計されている。



（図23）秋田県の総人口の推移

※令和5年は令和5年県年齢別人口流動調査資料）
国勢調査（総務省統計局）より県作成
（秋田県『あきた県政概況 2024』より引用）

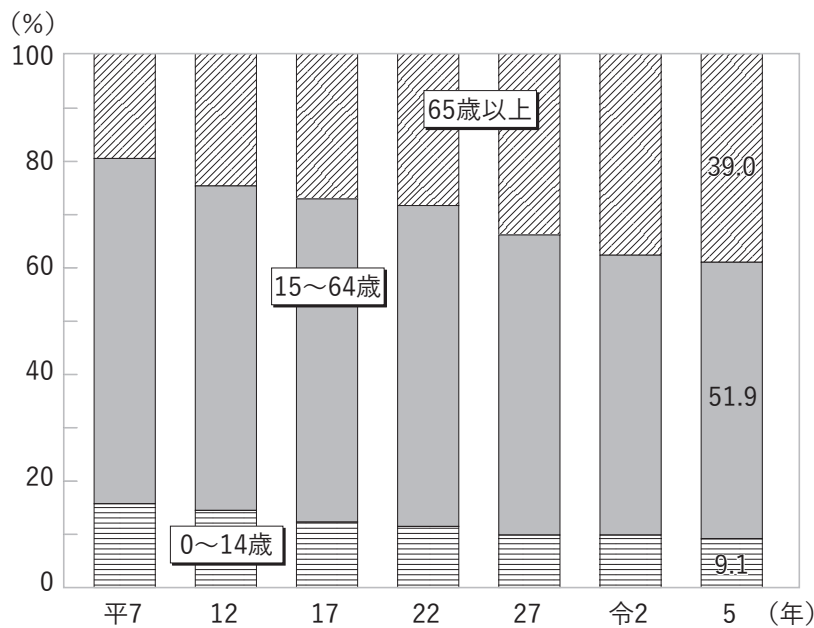
2 秋田県の年齢3区分別人口割合の推移⁽¹⁴⁾（図24）

2023（令和5）年10月1日現在の総人口を年齢3区分別の割合で見ると、0～14歳の年少人口は9.1%、15～64歳の生産年齢人口は51.9%、65歳以上の老年人口は39.0%となっている。これは前年に比べて、年少人口及び生産年齢人口ではともに0.2ポイントの減少、老年人口では0.4ポイントの増加となっており、高齢化が進行していることが分かる。

3 秋田県の出生数・婚姻件数（図25・26）

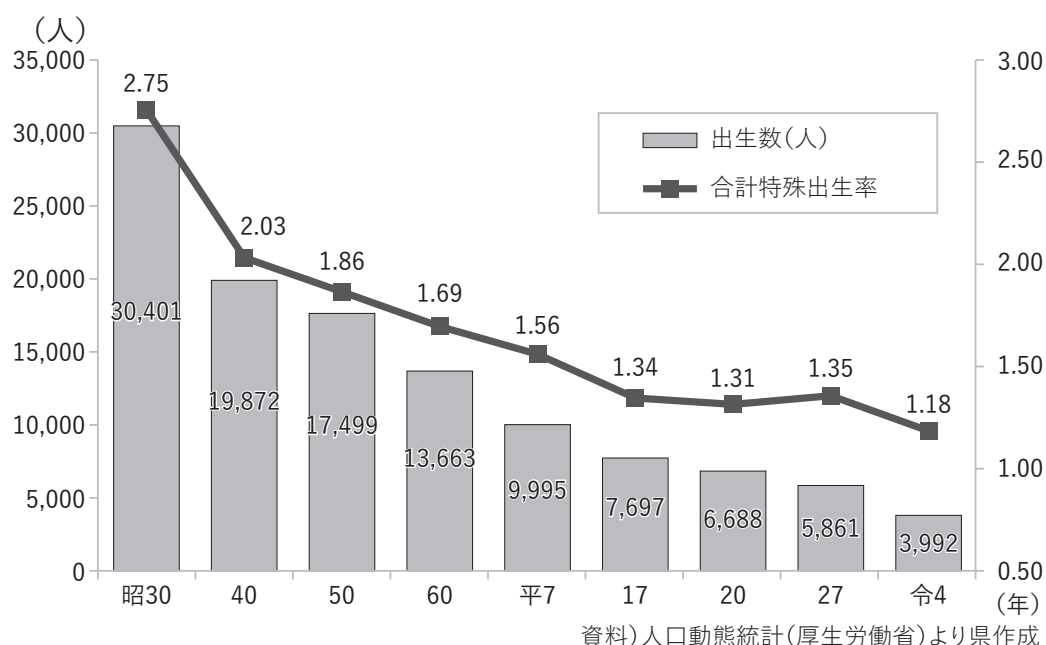
全国的に少子化が進む中で、本県の出生数⁽¹⁵⁾は1947（昭和22）年の47,838人をピークに減少しており、2022（令和4）年には3,992人となっている。合計特殊出生率（女性一人が一生涯に生む子どもの数を表す指標）は、1.18と全国平均の1.26を大きく下回っている。

婚姻件数⁽¹⁵⁾は、2022（令和4）年は2,447組、婚姻率は2.6と全国最下位だが、20～39歳の範囲で比較した場合の



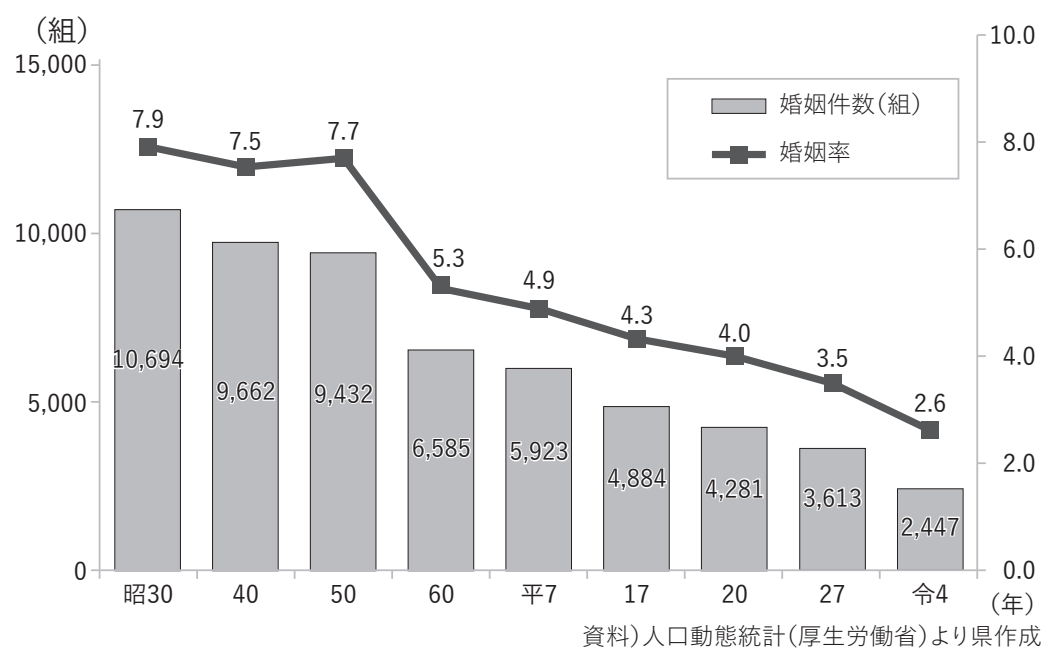
（図24）秋田県の年齢3区分別人口割合の推移

※令和5年は令和5年県年齢別人口流動調査資料）
国勢調査（総務省統計局）より県作成
（秋田県『あきた県政概況 2024』より引用）



(図25) 秋田県の出生数と合計特殊出生率の推移

(秋田県『あきた県政概況 2024』より引用)



(図26) 秋田県の婚姻件数と婚姻率の推移

(秋田県『あきた県政概況 2024』より引用)

婚姻率は21.6と全国平均と同程度になっている。このまま県の人口が減少し、少子高齢化がさらに進行すれば、秋田県は消滅の危機に見舞われることになる。それを回避するための施策が期待される。

4 出会いと結婚、子育てへの支援について

県は、こうした状況を踏まえて、『第2期あきた未来総合戦略 2020(令和2)年度～2024(令和6)年度』⁽²²⁾を策定し、「人口減少対策」と「秋田の創生」を推進してきた。

基本目標1は、IoT・AIの活用による産業の生産性・競

争力の向上や働く場の増加等。基本目標2では、女性・若者をはじめ、県民に魅力的な仕事の創出により、高卒・大卒者の県内定着や県外進学者の県内回帰・首都圏からの移住者の増加等。基本目標3では、結婚・出産・子育ての希望をかなえる社会づくり、女性があらゆる分野で活躍し、男女ともワーク・ライフ・バランスを実現できる環境の整備等。基本目標4では、買い物・地域交通など生活サービス確保のための態勢づくり、若者を中心とする新たな地域活動の展開、先端技術の活用による住民生活の利便性の向上等。

現在、最終年度にあるが、各施策や取組を通じて掲げたこの4つの基本目標の実現を目指してきているところである。

第5章 行政等関係機関への提案

1 提案1

「大学や短大卒業後に自分が生まれた地域で子育てしたいと考えている学生が多くいることに応える方策を検討して欲しい」が一つ目の提案である。

今回の調査に協力してくれた「4大」の中に占める地元秋田県の秋田大学生66人と秋田県立大学生112人の合計の割合は193人中178人で92.2%であり、「短大」の中に占める地元秋田県の学生の割合は166人で409人の40.6%だった。また、専門別区分の「教育系」の中に占める地元秋田大学生の割合は74人中66人で89.2%、「保育系」に占める地元本学学生の割合は334人中166人で49.7%、「その他Ⅱ」は全員地元秋田県立大学生である。ただし、秋田大学生のうちで秋田県出身者は約7割を占めているが、秋田県立大学生では約3割である。一方、本学の学生では98.2%の163人が秋田県出身者である。なお、「その他Ⅰ」に秋田県出身者はいない。

これらを踏まえて、今回調査の設問16の「自分の子どもを育てるとしたらどのような地域で子育てをしたいと思いますか」という質問への回答は、『d 自分の生まれ育ったところ』と『c 地方の都市部』の割合が高かったが、大学別区分の「4大」では『d』と『c』の割合合計が65.3%、「短大」では78.5%に上った。

専門別区分では、「教育系」が70.3%、「保育系」が77.8%、「その他Ⅱ」は62.5%だった。生まれ育ったところが秋田県である学生が秋田大学と秋田県立大学であわせて約50%、本学では98.2%であることが分かった。この秋田県出身学生のうち7割ほどが、「自分の生まれ育ったところで子育てをしたい」あるいは、「自分が生まれ育った県内の都市部で子育てをしたい」と回答している実態を大切に受け止める必要があると考える。

質問16-2では、設問16の回答の理由について次のような点を挙げている。

『d 自分の生まれ育ったところで』と回答した学生は、「自分が生まれ育ったところで慣れ親しんだ土地は馴染み深くよく知っているので安心して子育てができる。」「親の協力が得られるところで子育てしたい。親が近くにいると安心して子育てができる。」「自然が豊かで水や空気もきれいなところ（田舎）で、穏やかにゆったりしながら、伸び伸びと子どもを育てたいから。」「自分の地元がとても良いところだからそこで子どもを育てたい。自分が生まれ育った地元で暮らし、自分と同じ環境のもとで子どもを育てたいから」「地元には相談できる、頼れる友人や知人がいるから。地元には温かい人達が沢山いて頼れるから」などで、大半が生まれ育ち慣れ親しんできた地元の豊かな自然や、親が近くにいることで安心して子育てできるといった期待感、そこで育まれてきた良好な人間関係に対する魅力といった観念的な理由であった。

『c 地方の都市部』と回答した学生の理由としては、「適度な子育てサービスや商業施設、娯楽施設なども整っていて便利だから。交通機関、医療や商業施設、保育施設や教育施設、子育て支援環境がある程度整っていて子育てや生活する上で便利だから。」「大都会よりも自然に恵まれているところで子どもを育てたいから。ある程度自然が多いところで伸び伸びと子育てをしたいから。」「都会過ぎず田舎過ぎず、生活しやすいところで子どもを育てたいから。大都会に比べたら人も多くなく、都会と田舎のバランスが程よいところで生活して子どもを育てたいから。」「忙しすぎず、静かで落ち着いたところで生活して子どもを育てたいから。治安が良く、安心してゆったり穏やかなところで生活をしたいから。」などが挙げられていた。『d』に比べると、社会環境など制度的な充実や利便性、安全性、平穏性など生活や子育てする上で有効な理由が具体的に多く挙げられている。これらは学生たちにとって、結婚して子育てをしていくために必要な条件として語られているものと言える。あるいは、学生が将来的に自分の結婚後の新たな家庭生活を送る上で絶対に必要な地元の魅力を失わないで欲しい、さらに充実させて欲しいという願いが込められていると捉えることもできる。

以上のことから、「若い世代の多くは、可能であれば地元で子育てをしたい」という気持ちを持っており、大学卒業後いかに地元で生活の基盤を作れることを支援できるかが少子化対策のひとつの方法になりうるのではないかと考える。パートナーができ、子どもをもち、家を建てるなど、一定の生活の基盤ができれば、そう簡単に県外に出ていくことは考えにくい。年を取ってから呼び戻す施策よりも、大学卒業後の若者を地元に着させる施策に力を入れるべきではないだろうか。

現在推進中の『第2期あきた未来総合戦略2020（令和2）年度～2024（令和6）年度』⁽²²⁾の「人口減少対策」と「秋田の創生」の基本目標1～4の達成には県民はもとより、

県内の各種団体や企業、法人等の協力なくしてできることではない。成果をあげるには相当ハードルが高いと考える。最終年度になり、目標の達成状況に期待しつつも、目に見える状況変化を実感できていない現状を思うと、厳しい自己評価をして次期施策につなげていかなければならないと考える。

国は、少子化対策の一環として、2003（平成15）年7月に『次世代育成支援対策推進法』を公布し、国を挙げて少子化対策を推進するための重点施策の一つとして「地域における子育て支援」を掲げ、全ての地方自治体に具体的な取組を実行することが要請された。この法律が、2024（令和6）年5月に『育児・介護休業法及び次世代育成支援対策推進法』（次世代法）に改正され、全企業の協力のもとで、若者が結婚や出産、子育てしやすい環境を一層整えていくことが求められている。

2 提案2

「若年期に何らかの形で子どもと接する機会を設けることが、若者の結婚観や子ども観、子育て観に大きく影響すると考えられるので、何らかの方策を考えて欲しい」が二つ目の提案である。

前述した県の施策は、「出会いと結婚、子育てへの支援」であることから、支援の対象となっているのは高校や大学を卒業したあとの若者である。次世代を育成するという国の視点には、それ以外の視点も含まれていることに注目したい。

その象徴と言えるのが、2023（令和5）年4月のこども家庭庁の設置である。その年の12月22日には、こども施策に関する基本的な方針や重要事項並びにこども施策を推進するために必要な事項について定めた「こども大綱」⁽²³⁾を閣議決定した。この大綱には、ライフステージ別の重要事項として、学童期・思春期に、こども・若者が自らのライフデザインを描けるよう、様々な仕事・ローモデルに触れる機会、社会人との交流の場、乳幼児と触れ合う機会などの創出をすることが盛り込まれている。

また、同日に閣議決定された「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン（はじめの100か月の育ちビジョン）（以下、「はじめの100か月の育ちビジョン」という。）⁽²⁴⁾においては、自身の育ちを支えられた者が次世代のこどもの育ちを支える好循環を生み出すためにも、ライフイベントの多様性を尊重しつつ、全ての人が学童期・思春期・青年期から、教育機関や地域において、乳幼児の育ちや子育てについて学んだり、乳幼児と関わったりする体験ができる機会を保障することとしている。さらに、こども家庭庁は文部科学省との連名で、同年12月26日付け事務連絡で「乳幼児触れ合い体験の推進について」⁽²⁵⁾を各都道府県・政令指定都市教育委員会及び各都道府県私立学校・子ども政策・少子化対策の主管課等あてに発出している。

こうした若年層が「乳幼児触れ合い体験の推進」をする根拠としては、「次世代育成支援対策推進法第七条第一項の規定に基づく『行動計画策定指針』」⁽²⁶⁾及び、『中学校学習指導要領』⁽²⁷⁾、『高等学校学習指導要領』⁽²⁸⁾、『幼稚園教育要領』⁽²⁹⁾、『保育所保育指針』⁽³⁰⁾、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』⁽³¹⁾などがある。

これまで秋田県内の中学校や高校ではどの程度乳幼児との触れ合い体験が行われてきたのだろうか。家庭科や総合的な学習の時間（高校では総合的な探究の時間）の授業の一環として、あるいは学校行事の一環として触れ合い体験を実施している学校が多数あると思われる。しかしその大半は単発での触れ合いではないだろうか。もちろん単発的な触れ合いでも中高生や乳幼児の双方に何らかの刺激があることから、意図する効果が得られることもあることは承知しているが、筆者が提案したいのは、ある程度の時間や回数を設定して、中高生が乳幼児を理論的に理解した上で、実際に触れ合ってその特性を少しでも理解できるようにするというような体験機会を設定するということである。

今回の調査で、大学生の中には、結婚観、子ども観、子育て観への意識が低かったり薄かったりしている傾向がある例もあった。その一方で、「教育系」や「保育系」の80～90%以上の学生が結婚することに対して高い意識を持っていた。教育系学生は、卒業してからの23～29歳までに93.3%が、保育系学生は卒業してからの21～29歳までに96.7%が結婚を希望している。子どもを持ちたい意識は、「保育系」が88.3%、「教育系」が70.3%で、他の区分より前向きであった。そして、子どもを持ちたい学生の85～93%が、2人から3人の子どもを持ちたいと回答している。さらに、子育ての意識としても、「保育系」や「教育系」の学生は他の区分の学生よりも前向きな考えを持っており、不安感は少なく、中には自信すら持っている学生もいることが分かった。これらの背景にあるのは、やはり子どもについて理論的に学んだり、子どもと実際に関わって実態を理解したりする機会が多いという経験が最も大きい理由ではないかと考える。

こうした「教育系」や「保育系」の学生の意識を受けて、試行として日本一の少子化県である秋田県で独自に、次世代を担う子どもたちが中学校や高校時代に乳幼児と関わる体験機会を設けることはできないものかと考える。

国の施策に基づいて、中学生・高校生等を対象とした乳幼児や児童と触れ合う様々な事業等が各地で行われているが、そうした報告からいくつかを事例として次に紹介し、近い将来に次世代育成のための秋田県独自の施策を講じるために具体的な提案をしたい。

（事例1）『赤ちゃん和小中高生とのふれあい交流事業』について

2002年度に厚生労働省が、赤ちゃんに対する愛着の感

情を育むことや、中学生や高校生にとって予備体験をすることが「育児不安」からもたらされやすいといわれる虐待の予防に繋がることなどを目的に、モデル事業として東京都杉並区・京都市・新潟市・岩手県水沢市・愛知県高浜市の5都市で行った「赤ちゃんとのふれあい事業」⁽³²⁾や、2003年度の本事業にスタッフとして参加し、さらに2004年度には小学校や高校で「赤ちゃんとのふれ合い授業」を担当した寺田⁽¹⁶⁾がこの事業の重要性を説いている。それによると、参加した男子高校生が、「事前レクチャー中は、とても硬い表情で」、はじめは「どう声をかけてよいかわからなかった」のに、「赤ちゃんに出会った瞬間笑顔に変化し、交流中は、嬉しそうな表情に変化していった」。また、ある中学1年生男子は、一度だけの同級生への付き合いのつもりで来園したのだったが、「この交流体験を通して、偶然に目が会った時の、にっこり笑った赤ちゃんの笑顔に魅せられて、それ以降、自ら交流内容を企画する係を申し出るなど、生き生きとした表情に変わってきている。」「中高生たちにやわらかい変化をもたらしてくれていることを強く感じている。」と中高生の中には赤ちゃんと接したことによって、赤ちゃんを受け入れたり、赤ちゃんに寄り添ったりするといった行動ができる内面的な変化がもたらされた生徒がいることを伝えている。

また寺田は、この事業報告から、「中高生や赤ちゃん協力者そして職員も、それぞれがこうした場所や環境を求めていることや同じ児童・生徒が同じ乳幼児と継続的に関わることで相乗効果がみられ、継続性が大切であることや思いやりの気持ちが育まれることが、実際の声や感想文から明らかになった。赤ちゃんに触れあった瞬間、参加者の表情が皆柔らかく変化していったことも事実である。」と述べて継続して中高生と赤ちゃんが交流することの必要性を説いている。

この事業に感想を寄せたある職員は、その中で、「継続して関わることによって発達など赤ちゃんを系統的に理解できること、②赤ちゃんに対する愛着の形成が深まること、③そして、愛着形成の深まりが事業に対する積極性を生み出すこと、などより効果的であると考えられる」と述べており、加えて「継続するからこそ、母親の育児体験を聞く、様々な実習（ミルクをつくる、おしめを替える）等、多面的な活動ができる」としていることから、継続の有効性は十分理解できるものと考えられる。

そして寺田は、「中嶋・砂上・他（2004）が高校家庭科の保育体験学習者に対して64.5%は日常生活の中で乳幼児と触れ合う機会がほとんどないことや、乳幼児に対しての意識の変化は体験することにより、好意的な生徒は50.9%から69.1%へと19.1%高くなり、また、非好意的な生徒は49.1%から30.9%と低くなっていること等の報告をしている」と、体験学習が生徒の意識に変化をもたらしていることを伝えている。しかし寺田は、「継続的なかわりを持

たせることの難しさや担当者の転勤により内容が上手く伝達しきれていない」と、交流事業の継続の重要性⁽³³⁾を説きつつも現実的には課題がある⁽³⁴⁾との見解を示している。

（事例2）『家庭科保育学習 中学生と乳幼児のふれ合い体験事例集』について

叶内⁽¹⁷⁾によるとこの事例集は、中学校での技術家庭（家庭分野）の保育学習の一環として、中学生が乳幼児と直接かかわる体験型の学習『ふれ合い体験（ふれ合い体験学習）』が行われており、その担当教員のふれ合い体験の方法等についての質問や要望、ふれ合い体験を園で受け入れている保育現場の先生方の質問や要望に応えるために作成されたものである。全国各地で行われている取組の中から、茨城県、東京都、埼玉県、静岡県、広島県、愛媛県から11の事例が紹介されている。それぞれの保育学習の授業計画をみると、配当時間は4時間から20時間と幅があった。平均すると13.2時間を配当し継続して理論と実践という保育学習を行っていた。こうした継続学習で実施されたふれ合い体験の効果として次のようなことが述べられている。
「〈中学生の効果〉・乳幼児への肯定的な感情を持つ・乳幼児への理解が深まる・中学生が自分自身について考える機会になる・養育者としての役割を理解する・中学生が自分の保護者との関係について考える機会になる・自尊感情や自己肯定感が高まる。
〈乳幼児にとっての効果〉・同じ地域で生活をする異年齢との交流の機会となる・普段とは異なる遊びなどの経験ができる・中学生への『あこがれ』から、成長することへの肯定的な気持ちを持つ・幼児が中学生に甘える姿など、普段の様子とは異なる一面が出ることがある。
〈ふれ合い体験を実施した保育者や施設の職員にとっての効果〉・保育者と乳幼児の絆を再確認する機会になる・保育者や職員にとっても仕事の社会的意義や使命を自覚する機会になる・中学生のふれ合い体験を受け入れることは、長期的な視野でみた子育て支援につながる（中学生たちは未来の保護者になる）。
〈乳幼児の保護者にとっての効果〉・乳幼児のこれから先の姿をイメージすることにつながる・ふれ合い体験で乳幼児と一緒に中学生と接することで、普段はあまりかかわる機会がない中学生のことを知る機会になる。」

このように中学生が乳幼児についてある程度継続した学習や実際に触れ合う体験をするという取組が、「中学生側と乳幼児側の双方にとって互恵的な活動」であり、加えて保育者や保護者にも効果をもたらすという報告であった。

（事例3）「中高生と乳幼児の交流会『清陵 子育て未来塾』」について

秋田県横手市にある社会福祉法人むつみ福祉会むつみ保育園（現在は、むつみ幼保連携型認定こども園）の味水富夫園長は、2011（平成23）年9月に秋田県立横手清陵学

院高等学校長と『清陵 子育て未来塾』を推進するための覚書を交わしてこの企画を開始した。きっかけは、同年春に県南地区で高校生が公園に新生児を置き去りにした事件だった。この事件後に、同園では職員研修会を実施してこの事件の背景や対策等について意見交換をした結果、この企画に至ったという。

同園では、それ以前の2003（平成15）年度から年長児を対象に性教育講座を実施して、赤ちゃんとの関わりから「命」や「生」について体験的に学ぶ機会を設けていた。『子育て未来塾』はそれを踏まえて、乳幼児と接する機会がない今の中高生に、意思疎通がままならない0～1歳の赤ちゃんに触れ合う機会を設け、抱っこしたり、あやしたり、おむつ交換をしたりして母親がやっていることや気持ちを少しでも理解できるような体験活動にしたいと考えたものだった。そして、こうした経験は単発ではなく、繰り返したり継続したりすることで中高生が赤ちゃんに対して「可愛い、いとおしい」気持ちを抱き、それにより「命」や「生」の観点から赤ちゃんを「大事にする、守ってあげる」といった気持ちを実感するようであれば、さらに母親に対しても「世話をすることの大変さ」や「孤独になりがちなので協力しなければ」というようなことを実感できるようになればとの期待感を持って企画した。また、単発でない体験にするために中高一貫教育校であれば中学生と高校生の2度赤ちゃんに触れ合う機会が持てるということから横手清陵学院高等学校との連携に至ったのだった。

10年以上続くこの企画は、コロナ禍による中断を経て、2024年6月に高校1年生が乳児と触れ合う体験学習として家庭科の授業の一環で行われた。むつみ乳児保育園の味水智子園長は、生徒向けの講話で「将来、子どもができたなら自分一人で育てようとする行き詰まるので、周りに頼ることも必要。母親は赤ちゃんに付きっきりになってしまう。男子には、少しでもいいから赤ちゃんを預かって母親を解放する時間をつくってあげる父親になってほしい」と語りかけた。また、生徒の感想からは、「赤ちゃんを世話しながら、自分もかつてはこうだったのかなと思いを巡らせた」「いつか自分が子どもを持った時の対応の仕方が少し分かった」「抱っこやおむつ交換が手際よくできず、大変だった。貴重な体験になった」といった声が聞かれた（以上、2024年6月9日秋田魁新報より）⁽¹⁸⁾。また、「赤ちゃんから生命力をもらった」「将来、赤ちゃんがいる自分を思い描けた」「奥さんに育児を任せきりにせず自分も関わっていききたい」といった感想も綴られていた（以上、2024年6月22日秋田魁新報より）⁽¹⁹⁾。

この企画は、当然のことながら校長と園長だけの合意で行われるものではない。特に園側において、様々な配慮がなされ、それへの理解や協力等があって初めて実施可能になる。まずは、触れ合いに参加する0～1歳児の安全確保と保護者からの同意が最も重要なところである。企画の趣

旨説明をして賛同と同意が得られたお子さんのみ参加させる。触れ合いに参加する保育士との打ち合わせも欠かせない。また、二人目を妊娠しているお母さんが、上の子を保育園に預けて自分は妊婦としてこの企画に参加したことも過去にあり、中高生にとっては妊婦と接する貴重な機会となったこともあったという。実施会場は高校であるため、園からの移動には安全確保のためにタクシーを利用している。一方、高校側では家庭科の保育学習で、新生児の特徴や赤ちゃんの扱い方などについて事前に学び、加えて生徒には保健・衛生面やマナーなどについての指導が行われた。体験場面では、赤ちゃんに近寄れない、抱っこできない生徒もいる。一度だけの体験では無理もないかもしれない。だからこそ継続した体験が必要だと味水園長ご夫妻は言う。他方で継続することの難しさの一つに学校の人事異動と赤ちゃんの保護者理解があるとのことだった。企画は、行政から委託されたものではなく法人と学校独自のものである。これまで体験した多くの生徒の感想文からは、この企画の求めていることがしっかり伝わっていることを確認できた。秋田県内においてこうした体験ができる機会と場をもっと増やし、それが面的に広がり、そして長く継続して行われていくことの必要性を強く感じた。

こうした事例以外にも全国では様々な取組⁽³⁵⁾⁽³⁶⁾⁽³⁷⁾が行われているが、こうした体験が中高生にもたらす効果は、後々には、彼らの結婚観や子ども観、子育て観に対する意識を変化させることにつながる可能性がある。特に結婚や出産、子育てへの不安感等を減らし、養育者としての自覚を芽生えさせるなど、次世代育成に繋がるのではないかと考える。

そこで前述の3つの事例等をもとに秋田県で実施したい『次世代育成のための乳幼児と中高生の保育体験モデル学習』について提言したい。

具体的には、中学生は家庭科の授業と総合的な学習の時間などを活用して10時間程度を配当し、理論と実践の保育学習を行う（イベントも含む）。高校では1年生に月1回、年間10回程度、家庭科の授業と総合的な探究の時間を活用して乳幼児の特性を座学等で学んだあとで、最寄りの保育所や子ども園等の協力を得て赤ちゃんをあやしたり抱っこしたり、一緒に遊んだりする実践の機会を設ける（イベントも含む）。また、保護者から子育ての実体験を聞くことにより子育ての実態を具体的に想像できることから、子育てへの不安感の払拭に繋がる機会を設ける。このことは保護者にとってもメリットがあり、一人で抱え込んでいる子育ての悩みを共有できたり、吐き出したりすることで不安感や孤独感を緩和できることが考えられる。こうした体験をとおして、乳幼児一人一人が持つ個性や可愛らしさなどを認識してもらい、子どもや子育てを身近なものとして捉える機会にしたい。

座学の講師は、最寄りの園の保育者や保育系学科がある県内の大学・短大の教員が担当し、実践は最寄りの各園に指導をお願いすることになる。平日の座学や実体験のほか、主に土日に行われる各園の運動会や発表会などのイベントへの参加も貴重な体験機会になると考える。実践の場では、座学で学んだことをもとにして生徒達が仲間同士で協力し合いながら、どうしたら子どもは喜ぶか、子どもと楽しく遊べるか、子どもは満足するか、どうやったら泣き止むか、どうしたら子どものいざこざを解決できるかなど保育の楽しさや難しさを体験しながら、子どもの生命力や成長等子どもが持っている魅力を少しでも実感してもらいたいと考える。

こうした試みを積み重ねることにより、乳幼児と関わりを持つ経験を積む中高生が増え、彼らの将来的な子育てへの不安をいくらかでも減らし、自分も結婚して子どもを持つとう、そして親となって子どもを育てようということに結び付けられるのではないかと考える。

ここでは2つの案を提案したが、少子化対策の効果は決して短期間で表れるものではない。長い時間をかけて故郷秋田を守り、維持・発展させていくための知恵を出し合っ

て対策を講じることは、育成しなければならぬ次世代のためになることにほかならないと考える。

秋田県の喫緊の課題である少子化対策を一步でも前進させなければ、若年労働者が確保できず、産業は衰退し、遠くない未来に秋田県は消滅する危機にあることを行政と我々県民はもっと深刻に受け止めるべきである。少子化のペースを少し遅らせることも時間がかかることである。もう待ったなしである。早急に何らかの手を打つべきである。次世代育成の観点から、県民の理解を得て、今までやったことがないような手法で取り組む必要性があることを強調して提案するものである。

終 章

本研究では、調査を通じて東北地区に所在している4年制大学3校と短期大学3校の学生602人の結婚観と子ども観、子育て観を中心にその意識を知ることができた。

多くの学生が20歳代で結婚したいと望み、子どもは2人から3人は持ちたい、そして自分が生まれた故郷で子育てをしたいと考えていた。しかし、その意識と現実との乖離が大きい結果が多く見られたことは、未来ある若者達の将来を考え、そして秋田県の先行きを考えると、できるだけ早いうちに解消しなければならない大きな課題であることが分かる。こうした若者の声を実現できるような社会環境を作り出さなければならないと考える。しかし、一般市民の力だけではそれを実現することは難しい。国や県、そして市町村といった自治体のいわゆる行政の力なくしてそれらを実現することは不可能である。このままでは全国の

多くの地方自治体は遅かれ早かれ消滅の危機に陥ることは時間の問題である。

これまで国は、少子化対策を次々に打ち出してきたが成果はまだ見えない。秋田県は、国にすぎるより独自で少子化対策を練り上げて、国を説得して支援を取り付け、その対策に全力をあげて取り組んでいくしかないのではないだろうか。

我々、高等教育機関も持てる教育資源を最大限に活用して秋田県のために尽力していく。

故郷秋田を消滅させるわけにはいかない。県民が「オール秋田」となり、そういう気持ちを強く抱いて、県が中心となり、早期に関係者で具体策について検討し、企画し、予算化し、実践に踏み出す必要があるということを改めて強調したい。

謝辞

○意識調査に協力してくださった秋田大学、秋田県立大学、宮城県の東北福祉大学及び仙台青葉学院短期大学、福島県の桜の聖母短期大学、そして聖園学園短期大学の学生の皆さんとそれぞれの窓口になってくださいました教職員の皆様に感謝申し上げます。

○取材と資料提供にご協力いただきました秋田県横手市の社会福祉法人むつみ福祉会むつみ幼保連携型認定こども園の味水富夫園長、むつみ乳児保育園の味水智子園長に感謝申し上げます。

○他県の大学や短大への調査依頼の橋渡しや研究・論文への助言をいただきました本学の蛭田一美教授に深謝いたします。

引用文献

- 〈1〉 竹原健二、本田 靖、三砂ちづる（2008）「若者の結婚観と結婚や出産に関する情報や体験との関連－沖縄の大学生を対象とした量的調査－」『民族衛生』第74巻第5号 p.238
- 〈2〉 安藤節子・小笠原京子・猿田興子・蛭田一美・佐々木啓子（2016）「秋田県における子育て支援について」『聖園学園短期大学研究紀要』第46号 p.70
- 〈3〉 藤原法生・五十嵐隆文・根布谷豪（2019）「保育・幼児教育の視点からの人口減少対策研究」『聖園学園短期大学研究紀要』第49号 p.19
- 〈4〉 前掲書〈2〉 p.70
- 〈5〉 前掲書〈3〉 p.20
- 〈6〉 前掲書〈2〉 p.71
- 〈7〉 前掲書〈3〉 p.20
- 〈8〉 秋田県（2024）『秋田県こども計画（素案）』p.8※これは、秋田県（2023）「令和5年度子育て 支援に関するアンケート調査」pp.24、26、28によるデータである。
- 〈9〉 厚生労働省（2024）「2023（令和5）年国民生活基礎調査の概況」p.7
- 〈10〉 前掲書〈2〉 p.72

- 〈11〉前掲書〈2〉 p.74
- 〈12〉前掲書〈3〉 pp.20～21
- 〈13〉秋田県（2024）「あきた県政概況2024」 p.2
- 〈14〉前掲書〈13〉 p.2
- 〈15〉前掲書〈13〉 p.3
- 〈16〉寺田清美（2005）「赤ちゃんと小中高生とのふれあい交流事業（授業）の重要性―スタッフとしての現場からの声―」『東京成徳短期大学紀要』第38号 pp.45～55
- 〈17〉叶内 茜（2019）「家庭科保育学習 中学生と乳幼児のふれあい体験事例集」川村学園女子大学 叶内研究室 pp.1～4
- 〈18〉「抱っこ、おむつ交換難しい！」秋田魁新報、2024.06.09朝刊 p.25
- 〈19〉「地方点描 乳児から学ぶ」秋田魁新報、2024.06.22朝刊 p.23

参考文献

- （1）国立青少年教育振興機構（2016）「若者の結婚観・子育て観等に関する調査 [結果の概要]」
- （2）内閣府男女共同参画局（2022）「結婚と家族をめぐる基礎データ」
- （3）国立社会保障・人口問題研究所（2023）「第16回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）の結果報告書
- （4）こども家庭庁（2024）「結婚に関する現状と課題について」
- （5）文部省・厚生省・労働省・建設省（1994）「今後の子育て支援のための施策の基本的方向（エンゼルプラン）について」
- （6）少子化対策推進関係閣僚会議（1999）「少子化対策推進基本方針」
- （7）大蔵省、文部省、厚生省、労働省、建設省、自治省（1999）「重点的に推進すべき少子化対策の具体的実施計画について（新エンゼルプラン）」
- （8）厚生労働省（2003）「次世代育成支援対策推進法」
- （9）厚生労働省（2003）「少子化社会対策基本法」
- （10）厚生労働省（2004）「少子化社会対策大綱」
- （11）厚生労働省（2004）「少子化社会対策大綱に基づく重点施策の具体的実施計画について（子ども・子育て応援プラン）」
- （12）厚生労働省（2006）「新しい少子化対策について」
- （13）内閣府（2015）「子ども・子育て支援新制度」
- （14）厚生労働省（2024）「育児・介護休業法及び次世代育成支援対策推進法」（次世代法）
- （15）国立青少年教育振興機構教育事業部調査研究・情報課編（2009）『これから親となる若者の就労観、結婚観、子育て観に関する調査研究』より
- （16）前掲書（1）
- （17）井梅由美子（2019）「大学生の結婚観、および子育て観について―自身の被養育体験、父母との関係性、対象関係に着目して」『東京未来大学研究紀要』Vol.13pp.11～21
- （18）厚生労働省（2024）「人口動態統計月報年計（概数）の概況」
- （19）前掲書（2）
- （20）総務省統計局（2021）「令和2年国勢調査人口等基本集計」
- （21）国立社会保障・人口問題研究所（2023）「日本の地域別将来推計人口 令和5（2023）年推計」
- （22）秋田県（2020）「第2期あきた未来総合戦略～未来への投資、

未来への足がかり～」

- （23）こども家庭庁（2023）「こども大綱」
- （24）こども家庭庁（2023）「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン（はじめの100か月の育ちビジョン）」
- （25）こども家庭庁・文部科学省（2023）「乳幼児触れ合い体験の推進について」
- （26）内閣府、国家公安委員会、文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、国土交通省、環境省（2014）「次世代育成支援対策推進法第七条第一項の規定に基づく『行動計画策定指針』」
- （27）文部科学省（2017）「中学校学習指導要領（平成29年告示）」
- （28）文部科学省（2018）「高等学校学習指導要領（平成30年告示）」
- （29）文部科学省（2017）「幼稚園教育要領（平成29年告示）」
- （30）厚生労働省（2017）「保育所保育指針（平成29年告示）」
- （31）内閣府、文部科学省、厚生労働省（2017）「幼保連携型認定こども園教育・保育要領（平成29年告示）」
- （32）厚生労働省（2002）「赤ちゃんと中高生のふれあい事業」
- （33）花田雅憲（2005）「年長児童と乳幼児の交流における相互の発達要因についての調査研究」『平成16年度児童関連サービス調査研究等事業報告書』財団法人こども未来財団
- （34）齋藤幸子・高野陽（2005）「思春期児童と赤ちゃんのふれあい交流の実態について―実施主体別の検討―」『日本子ども家庭総合研究所紀要第42集』
- （35）千葉県松戸市（2018）「中高生と赤ちゃんのふれあい体験について～命の大切さを学ぶ～」報道資料 平成30年5月25日 やさシティ、まつど
- （36）千葉県市川市中央こども館（2024）「国分高校生と乳幼児親子のふれあい交流」
- （37）千葉県市川市市川こども館（2024）「高校生と乳幼児親子のふれあい交流」

聖園学園短期大学 研究紀要編集及び投稿規程

（目的）

第1条 本規程は、「聖園学園短期大学 研究紀要」（以下、「研究紀要」という。）の編集及び投稿について規定する。

（編集・発行）

第2条 研究紀要は、本学教職員の研究成果である研究論文を掲載するものとし、毎年度1回、編集・発行するものとする。

（編集委員会）

第3条 研究紀要の編集・発行にあたっては、「研究紀要編集委員会」（以下、「編集委員会」という。）を設ける。

- （1）編集委員会は、委員長及び委員をもって組織し、学長が委嘱する。
- （2）編集委員会は、研究紀要の編集及び制作に関して責任を負う。
- （3）編集委員会は、投稿研究論文募集、制作（体裁決定、校正作業など）を行う。
- （4）編集委員会は、教職員の協力を得て、関係機関に研究紀要の配布、送付を行う。

（研究論文の種類）

第4条 研究論文は、原著論文、研究報告、研究ノート、その他とし、未発表のものに限る。

（投稿資格）

第5条 研究紀要に研究論文を掲載する場合の投稿資格は、原則として常勤の教職員とする。

- 2 前項の規定に関わらず、学長が特に必要と認めた場合は、常勤の教職員以外の者も投稿資格を取得することができる。

（投稿論文数）

第6条 研究紀要に掲載を希望する研究論文は、一人1編を原則とする。

- 2 連名で共同研究に参加した場合には、本人執筆の研究論文と合わせて、合計2編以内とする。

（査読及び掲載）

第7条 投稿された研究論文のうち原著論文は、編集委員長を含めて複数の編集委員の査読を経るものとする。

- 2 原著論文以外の研究論文の研究紀要への掲載の可否については、編集委員会が審査し決定する。

（研究論文の公開）

第8条 研究論文の公開は、編集委員会が編集・発行する研究紀要を、学内外に配布して行うほか、本学のホームページに掲載して行う。

- 2 研究論文の著者は、論文が電子データで公表されることを承諾する。

（著作権）

第9条 本研究紀要に掲載された研究論文の著作権は、本学に属する。ただし、著作者自身が、自己の著作物を利用する場合には、本学の許諾を必要としない。

（執筆要領）

第10条 研究論文の執筆要領は、別に定める。

附 則

この規程は、平成21年1月16日より施行する。ただし、平成20年度の研究紀要の編集・発行については、従前の例による。

附 則

この改正は、平成24年4月1日より施行する。

附 則

この改正は、平成29年4月1日より施行する。

附 則

この改正は、令和3年4月1日より施行する。

附 則

この改正は、令和6年4月1日より施行する。

聖園学園短期大学 研究紀要執筆要領

- 1 投稿原稿は、図・表・写真等を含めて20,000字（刷り上がり12頁）を原則とする。所定字数を超える場合は、申し込み論文数等を考慮して編集委員会の協議を経てその可否を決める。
- 2 原稿の執筆にあたっては、原則としてパソコン等で作成し、縦置きA4版用紙に横書きで、22字×40行の2段組とする。（1ページ1,760字）
- 3 原稿は、提出期限までに、上記様式で印字したものの2部を編集委員長に提出する。
査読が終了し、掲載決定通知後の最終原稿は、電子データと共に、上記様式で印字した原稿を2部編集委員長に提出する。
- 4 論文の基本的構成は原則として、次のとおりとする。
 - ① 論文表題 ② 要約及びキーワード
 - ③ 目次 ④ 序論 ⑤ 本論
 - ⑥ 結論 ⑦ 注釈及び引用・参考文献（論文構成例）
論文表題 （所属大学名、職名、著者名）
要約及びキーワード
目次
はじめに （序論）
第1章 章見出し （本論）
第1節 節見出し
1）
2）
第2節 節見出し
第2章 章見出し
おわりに （結論）
注釈及び引用・参考文献
- 5 原稿1ページ目には、「表題」「所属大学名」「職名」「著者名」を記載した上で、「要約」（和文400字～600字）、及びキーワード（5語程度）を日本語及び英語でつけるものとする。ただし、当分の間「要約」の英訳の作成は執筆者の任意とする。
- 6 「要約」は、論文全体を読まなくとも要点が理解できるように、内容を圧縮したものを作成する。主題範囲、目的、方法、結果、考察等を簡潔にまとめる。
- 7 キーワードは、パソコン等による検索に必要なものであり、論文の内容（分野・領域・特性など）を的確に表す単語（名詞）とする。
- 8 図、表、写真等は、それぞれ図1、表1、写真1等の番号で区別し、本文に差し込む。
他の著作物からの引用の場合は、出典を必ず明記し、必要に応じて、原著者または著作権保持者から使用許可を得ること。また、電子データには、原稿を保存したファイルとは別に、図、表、写真のみを保存したファイルを添付すること。
- 9 本文の記述は、原則として、常用漢字と現代仮名遣いを用いる。
- 10 説明の補足等のための注釈は、本文の該当箇所に、（注1）（注2）のように通し番号をつけて示し、原則として、原稿末尾に一括して入れる。
- 11 引用文献は、「」で示した引用部分の終わりの右肩に（1）（2）のように通し番号で示し、原則として、稿末に番号順に一括してあげる。各文献は、著者名、発表年（西暦）、表題の順とする。単行本の場合は、表題の後に出版社名と引用ページを示す。雑誌論文の場合は、表題の後に、雑誌名、巻号数、論文掲載ページを示す。電子文献は、著者名、公開年、表題、URL、アクセス年月日を示す。
（引用文献記載例）
（単行本）新藤宗幸（2013）「教育委員会：何が問題か」（岩波新書）、p.55(or pp.55-56)
（電子文献）文部科学省（2018）「平成28年度幼児教育実態調査」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/08081203.htm(2018.7.18 アクセス)
参考文献は、引用文献の例に準じて示す。
- 12 研究紀要への論文掲載の申し込み期限は9月末日とし、原稿提出期限は11月末日とする。

平成14年10月制定
平成19年3月一部改正
平成21年1月一部改正
平成24年4月一部改正
平成30年8月1日全部改正
令和3年4月一部改正

執 筆 者		担当科目（「卒業研究」を除く）
共著	白 山 雅 彦 教 授	「教育原理」 「教育制度」
	大 淵 和 峰 教 務 課 長	「保育・教職実践演習（幼稚園）」

研 究 紀 要 第55号

2025（令和7）年4月1日 印 刷

2025（令和7）年4月1日 発 行

発 行 所 〒010-0911 秋田市保戸野すわ町1—58
み 聖 園 学 園 短 期 大 学
電話（018）8 2 3 — 1 9 2 0

印 刷 所 〒011-0901 秋田市寺内字三千刈110
秋 田 活 版 印 刷 株 式 会 社
電話（018）8 8 8 — 3 5 0 0

BULLETIN
OF
MISONO GAKUEN JUNIOR COLLEGE
No.55

A Study of the Survey on Marriage and Child-rearing, Conducted for
the Students in the Tohoku Region, Japan

— For the Proposals Aimed to Nurture Coming Generations in Akita Prefecture —

..... SHIRAYAMA Masahiko ... 1

OHBUCHI Kazutaka

published by
MISONO GAKUEN JUNIOR COLLEGE
March 2025